

Underwater
Ceramics
in the Japan Sea

Report of the Recovered Ceramics
in Niigata Prefecture

日本海
に沈んだ
陶磁器

新潟県内海揚がり品の実態調査



2014

新潟県海揚がり陶磁器研究会

日本海 に沈んだ 陶磁器

新潟県内海揚がり品の実態調査

2014

新潟県海揚がり陶磁器研究会



寺泊沖タラバ海揚がりの珠洲焼



名立沖海揚がりの珠洲焼と須恵器（右奥）



村上地域海揚がりの珠洲焼



長岡・出雲崎地域海揚がりの珠洲焼



名立沖海揚がりの珠洲焼



佐渡地域海揚がりの近世陶器

序

縄文時代から近世まで、数えきれないほどの丸木舟や木造帆船が日本海を往来し、各地の港に立ち寄った。時代によって運ぶ物は変わるけれども、江戸時代は米や塩、砂糖、木綿、木材など生活物資を頻繁に運んだ。国内ばかりでなく大陸の人々とも物資と情報を交換し、日本海側に住む人々はもちろん全国各地に生活の豊かさをもたらし、地域文化の形成に大きな役割を果たした。その一方で、嵐に襲われ日本海に沈んだ船と積荷もかなりの数であったと言われている。

多くの困難にも関わらず海のかなたに物や富を求めた人々の痕跡が、海底や海岸にも残されている。それは今、文化財、史跡、歴史遺産などと呼ばれ、観光面ばかりでなく日本海交通の歴史を探る研究資料として高く評価されている。さまざまな興味や視点から地域の文化交流の歴史が描き出され、郷土資料館や道の駅でも、その成果が展示公開されている。そうした研究をさらに深め、残された物を見つけ出し、保存修復し、そして文化遺産として活用公開することが各地の地域社会に求められている。

能登半島と男鹿半島の間に佐渡があり、佐渡と新潟県の本土の間は古くから交通の大動脈で頻繁に船が往来し、そこは豊かな漁場タラバとしても有名である。日本海のなかで、もっとも多く漁船の網に掛った壺や甕、擂鉢などの陶磁器が海底から引き揚げられたことでも知られている。

新潟県の考古学者たちは寺崎さんを会長として「新潟県海揚がり陶磁器研究会」を組織し、水中考古学の調査を進めている。数年にわたる県内に保管される引揚品の詳細な調査成果を会員諸氏がまとめられ、一冊の本として刊行されることになった。引揚品の写真や図が網羅され、今まで報告されなかった新発見の資料も公開されている。

考古学や歴史学の分野の方ばかりでなく、博物館や各地の教育委員会、海から魚以外の邪魔物を引き揚げて陸に運んだ漁業関係者の皆様に支えられ、本書を世に送り出せることを感謝している。すでに歴史や文化に興味をもつ方ばかりでなく、新たに日本海地域の文化の奥深さとロマンを知りたい方にも、海の考古学や日本海の歴史文化の懐の広さを楽しんでいただけると、新潟県海揚がり陶磁器研究会会員一同から喜んでいる。

また今回の報告書が提供した引揚品の詳細な地点や時代の情報からタラバ近辺での沈没船発掘の糸口が見つかれば、日本の水中考古学に対しての貢献度もより大きなものとなる。近い将来の調査の進展と広がりが待ち遠しく感じられる。

2014年（平成26）8月

金沢大学名誉教授

佐々木 達夫

例　　言

- 1 本書は、新潟県域の日本海から、陶磁器をはじめ海揚げした遺物の集成報告である。
- 2 対象地域は、村上市、粟島浦村、新潟市、長岡市、出雲崎町、柏崎市、上越市、糸魚川市、佐渡市の7市1町1村である。
- 3 この調査は、佐々木達夫金沢大学名誉教授の指導を受けて、新潟県海揚げ陶磁器研究会（会長 寺崎裕助）が2011年度から2014年度にかけて民間助成金を得て実施した。助成金は以下のとおりである。
- 2011年度…公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金
2012年度…公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金
2013年度…第42回（平成25年度）三菱財團人文科学的研究助成、財團法人高梨学術奨励基金
2014年度…第42回（平成25年度）三菱財團人文科学的研究助成
- 4 調査に係わる資料・データは、当該の教育委員会あるいは当該の文化財センターが保管・管理している。
- 5 珠洲焼の編年観については、2014年1月に実施した珠洲焼学習会において、石川県珠洲市立珠洲焼資料館の大安尚寿氏の指導を受けた。
- 6 文中における敬称は原則略させていただいた。
- 7 本書の編集は、相羽重徳・安藤正美・田海義正の協力を得て、寺崎裕助が行なった。
- 8 本書の執筆は、次のとおりであるが、第Ⅲ章3・4・6については執筆者名を文末に記した。
- 第Ⅰ章1…相羽重徳　2…田海義正
第Ⅱ章…寺崎裕助
第Ⅲ章1…塩原知人　2…渡邊ますみ　3…加藤由美子・竹部佑介・小林ひろ子・安藤正美
4…伊藤雄雄・加藤由美子・竹部佑介　5…相羽重徳・木島聰・田海義正・湯尾和広
6…鹿取渉・相羽重徳
第Ⅳ章1…田海義正　2A…寺崎裕助　2B…寺崎裕助　2C…加藤由美子
2D…相羽重徳　2E…安藤正美　3…竹部佑介　4…佐々木達夫
- 9 調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼を申し上げる。（敬称略　五十音順）

相澤裕子　青木重香　青木　茂　青木仁夫　五十嵐金一　池田孝博　池田雄彦
石井正門　石川日出志　石橋夏樹　磯谷光一　磯谷正二　磯野　猛　磯野直矢
磯部友記雄　伊藤克助　石見善平　速藤達実　大平俊一　大橋康二　大安尚寿
荻野繁春　小黒耕一郎　春日真実　堅木宜弘　加藤輝夫　加藤　学　金子拓男
金子雅見　金田拓也　川合喜八郎　川合明生　河合勝則　風間　梢　河野正伸
北野博司　久我　勇　久保田清三　久保田正紀　久保田義二　熊本里子　小池奈美子
小島幸雄　小林秋夫　小林貞雄　近藤佐敏　笠澤正史　佐藤忠彦　佐藤哲哉
佐野茂子　須崎明年　須崎一弥　須崎秀良　高藤一郎平　高橋　保　高橋保雄
高山俊夫　高山裕裕　浅沢規朗　島嶼幸二　塚田長栄　塚田一徳　鶴田浩規
手塚直樹　寺村光明　富樫久雄　富樫　満　戸根与八郎　中澤資裕　中野雄二
中村　実　長崎一清　長崎国昭　長崎佐一　長崎成幸　納谷富雄　野上建紀
野口壽雄　長谷川昭平　羽生令吉　林田憲三　藤塚　明　古田悦作　星　哲栄
本間慶次　前嶋　敏　前山精明　松井茂子　松井広信　三井田忠明　水野敬三郎
宮尾　亨　宮下登一　宮田三郎　村尾　優　室川　諭　山口達太郎　山本史郎
山本　勉　山本　肇　山本吉夫　横山　繁　吉井申一　吉倉大吉　吉崎幸男
渡邊朋明　渡邊三四一
出雲崎町教育委員会　出雲崎天領の里　柏崎市笠島町内会　柏崎市番地一区町内会　柏崎市立図書館
柏崎市立博物館　國學院大学研究開発推進機構　佐渡博物館　聖徳寺　上越市立総合博物館
白山姫神社　治暦寺　長者ヶ原考古館　徳照寺　長岡市立科学博物館　新潟県考古学会
新潟県農林水産部水産課　新潟県埋蔵文化財調査事業団　新潟県立歴史博物館　新潟市北区郷土博物館
新潟市文化財センター　新潟市歴史文化課歴史資料整備室　能生歴史民俗資料館　フォーカル
仏像文化財修復工房　古田組　両津郷土博物館　術不二出版

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 研究史	1
2 底引き網漁について	3
第Ⅱ章 調査・研究	6
1 調査に至る経緯と目的	6
2 調査の方法と計画	6
3 調査・研究の体制	6
4 調査・研究等の経緯	8
第Ⅲ章 調査結果	13
1 村上地域の海揚がり品	13
A 概要	13
B 粟島沖	14
C 粟島～佐渡沖	14
D 粟島～寢屋漁港中間地点沖	15
2 新潟地域の海揚がり品	15
A 概要	15
B 佐渡周辺	16
C 角田沖	17
D 間瀬沖	18
E 弥彦沖	19
F 小結	19
3 長岡・出雲崎地域の海揚がり品	20
A 概要	20
B 寺泊沖タラバ	22
C 出雲崎沖	29
D その他の海揚がり資料	30
E 小結	31
4 柏崎地域の海揚がり品	32
A 概要	32
B 石地沖	33
C 椎谷沖	33
D 荒浜沖	34
E 番神沖	34
F 笠島沖	34
G 地点不明資料	35

5 上越・糸魚川地域の海揚がり品	35
A 概要	35
B 名立沖	36
C その他の地点	42
D 地点不明	43
E その他	44
F 小結	45
6 佐渡地域の海揚がり品	46
A 概要	46
B 土器・陶磁器	47
C その他の海揚がり資料	49
D 小結	50
第IV章 まとめ	51
1 海揚がり品とその分布—陶磁器を中心にして	51
2 各時代の海揚がり品	52
A 銚文時代	52
B 弥生時代・古墳時代	53
C 古代	53
D 中世	54
E 近世	55
3 海揚がりの珠洲焼における加飾法	59
A はじめに	59
B 調査で確認した加飾法	59
C 考察	62
4 新潟県海揚がり品の位置づけ	63
おわりに	65
《引用・参考文献》	66
《引用・借用図版》	68
《報告書抄録》	卷末
《卷末図》	

挿図目次

第 1 図 底引き網漁の許可水域	3	第 14 図 第一群珠洲焼の海没状況復元図	41
第 2 図 板びき網漁の許可水域	3	第 15 図 直江津沖引き揚げの木像仏	42
第 3 図 底引き網漁（1）	4	第 16 図 佐渡地域海揚がり地点	46
第 4 図 底引き網漁（2）	5	第 17 図 その他の海揚がり資料（佐渡地域1）	49
第 5 図 珠洲焼学会	11	第 18 図 その他の海揚がり資料（佐渡地域2）	50
第 6 図 珠洲焼の窯跡別操業時期	12	第 19 図 関連純文土器	52
第 7 図 村上地域海揚がり地点	13	第 20 図 中世陶磁器の産地別構成	54
第 8 図 近世陶器	15	第 21 図 珠洲焼の器種別構成	54
第 9 図 新潟地域海揚がり地点	16	第 22 図 珠洲焼等の時期別数量	54
第 10 図 長岡・出雲崎地域海揚がり地点	20	第 23 図 近世等の航路	58
第 11 図 須恵器（出雲崎沖）	31	第 24 図 主な加飾法	60
第 12 図 柏崎地域海揚がり地点	32	第 25 図 時期別・海揚がり地点別の主な加飾法	61
第 13 図 上越・糸魚川地域海揚がり地点	36		

表目次

第 1 表 新潟県内における古代の海揚がり品	53	第 2 表 海域毎の時期別陶磁器集計表	55
------------------------	----	---------------------	----

図版目次

図版 1 村上地域 1（栗島沖）	図版 19 柏崎地域 1（石地沖・椎谷沖・荒浜沖）
図版 2 村上地域 2（栗島沖・栗島～佐渡沖）	図版 20 柏崎地域 2（番神沖・笠島沖・地点不明）
図版 3 村上地域 3（栗島～佐渡沖）	図版 21 上越・糸魚川地域 1（名立沖）
図版 4 新潟地域 1（佐渡周辺）	図版 22 上越・糸魚川地域 2（名立沖）
図版 5 新潟地域 2（角田沖）	図版 23 上越・糸魚川地域 3（名立沖）
図版 6 新潟地域 3（角田沖・間瀬沖・弥彦沖）	図版 24 上越・糸魚川地域 4（名立沖）
図版 7 新潟地域 4（弥彦沖）	図版 25 上越・糸魚川地域 5（名立沖）
図版 8 長岡・出雲崎地域 1（寺泊沖タラバ）	図版 26 上越・糸魚川地域 6（名立沖）
図版 9 長岡・出雲崎地域 2（寺泊沖タラバ）	図版 27 上越・糸魚川地域 7（名立沖）
図版 10 長岡・出雲崎地域 3（寺泊沖タラバ）	図版 28 上越・糸魚川地域 8（名立沖）
図版 11 長岡・出雲崎地域 4（寺泊沖タラバ）	図版 29 上越・糸魚川地域 9（名立沖）
図版 12 長岡・出雲崎地域 5（寺泊沖タラバ）	図版 30 上越・糸魚川地域 10（名立沖）
図版 13 長岡・出雲崎地域 6（寺泊沖タラバ）	図版 31 上越・糸魚川地域 11（名立沖他）
図版 14 長岡・出雲崎地域 7（寺泊沖タラバ）	図版 32 上越・糸魚川地域 12（地点不明）
図版 15 長岡・出雲崎地域 8（寺泊沖タラバ）	図版 33 上越・糸魚川地域 13（地点不明・浦本沖）
図版 16 長岡・出雲崎地域 9（出雲崎沖）	図版 34 佐渡地域 1
図版 17 長岡・出雲崎地域 10（出雲崎沖・寺泊沖）	図版 35 佐渡地域 2
図版 18 長岡・出雲崎地域 11（その他）	

第Ⅰ章 序 説

1 研究史

日本における水中考古学の調査・研究の歴史は、他の分野と比較したとき決して厚いとはいえない〔以下、西谷他2013・亀井他2001等〕。明治・大正年間では、坪井正五郎や島居龍藏、島田貞彦らが漁訪調から引き揚げられた縄文土器や弥生土器、石器を取り上げた事例など著名なものもあるが、その活動は散発的なものであった。

1970年代に入ると一転、北海道江差沖に沈没した軍艦・開陽丸（幕末）や香川県小豆島沖水の子岩海底遺跡（室町時代初期・古備前）の調査が行われ、海中遺跡・文化財の本格的で大規模な調査の幕を開けとなった。

続く1980年代には、広島県宇治南方沖に沈没した海援隊用船・いろは丸の調査が行われ、2012年（平成24）3月に水中遺跡で初めての国指定史跡となる長崎県の鷹島神崎遺跡に対して、江上波夫らが音響測探やダイバーによる遺物の引き揚げ調査を行っている。また、この頃、任意団体であるが九州・沖縄水中考古学協会が発足している。

1990年代以降は、和歌山県沖ノ島北方海底遺跡（15世紀・貿易陶磁など）や、鹿児島県倉木崎遺跡（12～13世紀・貿易陶磁など）などの水中遺跡の調査の他、千葉県勝浦市沖ハーマン号（1869年沈没、1998年調査）、和歌山県串本町沖エルトワールル号（1890年沈没、2007年～調査）の沈没船調査など、調査事例が増加する。

東・東南アジアにおいても、やはり1970年代以降に沈没船や積み荷の引き揚げを中心として、水中調査が大きく進んできた。韓国では、全羅南道沖のいわゆる「新安沖沈没船」（14世紀前半・貿易船）や、「莞島沖沈没船」（高麗期・国内運搬船）など8隻の沈没船を確認、調査している。中国では、福建省沖沈没船（南宋）や広東省沖の「南海I号沈没船」（南宋）、福建省定海湾沈没船（宋～元および明～清）、遼寧省綏中県沈没船（元）、福建省后渚湾沈没船（宋）、山東省蓬萊水城沈没船（高麗船）、福建省東山冬海灘沈没船（17世紀後半）、海南省文昌昌黎港沈没船（17世紀後半）などがある。台湾では、澎湖諸島の「將軍1号」沈没船（清代）がある。その他、タイではタイ湾のコ・シーチャン1号沈没船（16世紀末～17世紀初頭）やシーチャン島沖第2沈没船（15世紀前半）、クラム島沖沈没船（15世紀中葉）、ベトナムではコンダオ沈没船（1690年）、フィリピンではパラワン・パンダナン島沖沈没船（15世紀前～中頃）、インドネシアではビルトン島海域の「黒石号」沈没船（晚唐）など、枚挙に暇がない。

アジア以外でも、考古学的手法によるではないものの、モーリシャス号（1609年沈没）、ヴィッテレウ号（1613年沈没）、コンセプション号（1638年沈没）、マイケル・ハッチャーコレクション（1640～50年代沈没）、ナンキン・カーゴ（1752年沈没）、ヘンデルマルセルセン号（1752年沈没）、ダイアナ・カーゴ（1816年沈没）、テクシン（1822年沈没）などの沈没船から陶磁器を含む一括資料が引き揚げられている。

長い海岸線と2つの離島を持つ新潟県では、日本海から様々な土器・陶磁器・石器などの遺物が引き揚げられた事例が古くから知られ、沈没船の存在も予見されている。1911年（明治44）には坪井正五郎が『人類学雑誌』に新潟市角田浜沖から引き揚げられた須恵器（「朝鮮土器」蓋1、环1、环盖1、滅失1のセット）を報告している〔坪井1911〕。また、大野雲外も翌1912年（大正元）に糸魚川市能生沖から引き揚げられた原始時代の石錘を同雑誌に報告している〔大野1912〕。

特に「タラバ」と呼ばれる大陸棚縁端部からは、中世の珠洲焼を中心とする古代～近世までの土器・陶磁器が地元の漁業関係者により時折引き揚げられていたことが知られていた。寺村光晴は昭和30年代に長岡市寺泊沖から引き揚げられた土器・陶磁器などについて機関誌に相次いで報告〔寺村 1956・1957、寺村・久我 1960〕した。その後、1977年には新潟県教育委員会の文化財総合調査の一環でまとめられた「寺泊・出雲崎」で43個体を集成するまでに至り〔新潟県教育委員会 1977〕、『出雲崎町史』・『寺泊町史』〔戸根 1991・1993〕で新資料が追加された。

室岡博は1959年(昭和34)7月に皮切りとして上越市名立沖で漁業関係者により断続的に引き揚げられた珠洲焼について、1972年に報告した〔室岡 1972〕。この報告は引き揚げ品におけるセット関係及び詳細な観察を通して積荷の運搬方法にまで迫ろうとする極めて意欲的な報告であり、後に珠洲焼編を確立した吉岡康暢により中世日本海運送の標識資料(Ⅱ期)として取り扱われる〔吉岡 1994〕など記念碑的な研究成果と評価できる。

なお、吉岡康暢は新潟県において珠洲焼がまとまって掲陸している地点として、上述の上越市名立沖(Ⅱ～Ⅳ期)の他、柏崎市沖(Ⅱ～Ⅳ期)、佐渡島近海を含む長岡市寺泊沖(Ⅰ～Ⅲ期)、粟島近海を含む村上市岩船沖(Ⅰ期)、新潟市間瀬沖(Ⅰ～Ⅲ期)を挙げている〔吉岡 1994〕。また、新潟県は複数の海底遺跡を包蔵地として登録していることでも知られており、1970年に柏崎市荒浜沖海底遺跡、1973年に上越市名立海底遺跡と長岡市寺泊タラバ遺跡、2008年に柏崎市椎谷沖海底遺跡が登載されている。

2009年と2010年には金沢大学(以下、金大)の佐々木達夫教授らが、本県を含む日本海沿岸の海揚がり品の悉皆調査を行っている〔佐々木他 2011〕。本県では、その多くが既出の資料の再調査であったが、調査メンバーの精力的な活動により、新出資料も數多く発見され、報告された。この報告は多くの読者に現在でも県内に未知の海揚がり品が相当数潜んでいるのではないかという期待を惹起させた。一方で、海揚がり品の中には金大調査時に既に所在が分からなくなっているものもあり、その管理方法についての課題も浮き彫りとなった。こうした調査の成果は、アジア水中考古学研究所から「海の文化遺産総合調査報告書－日本海編－」〔佐々木達夫他 2013〕としてまとめられている。

その他、個別報告事例としては、粟島沖の灰釉陶器〔戸根 1992〕、寺泊沖の珠洲焼片口鉢〔高橋 1994・竹部 2007〕、越佐海峡の繩文土器〔小熊 1998〕、名立沖の須恵器〔春日 2007〕、佐渡沖の須恵器〔佐藤 1988〕・古代土師器〔佐藤 1989〕・近世陶器〔佐藤 1989〕などがある。

以上の様に、新潟県では比較的早い時期から多くの海揚がり品の存在が知られていた。しかし、それらの多くは漁などによる偶発的発見であり、個人蔵であるが故に個別、乃至は地域限定の報告に留まりがちであった。金大報告はそれらを全県レベルで把握し、該地の海揚がりの全貌を提示しようと試みた。本調査は、金大報告の意図を汲み、既知品の詳細調査を改めて行うと共に、新発見の資料を追加して報告するものである。

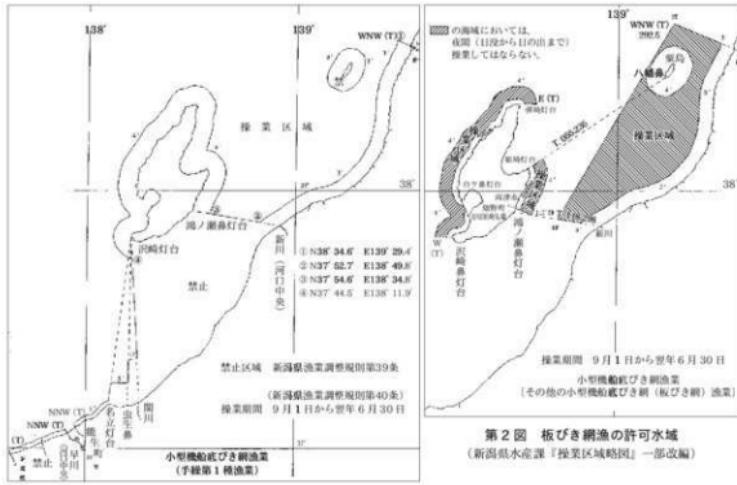
2 底引き網漁について —新潟の漁法と操業場所—

海底から引き揚げられる陶磁器などは、底引き網漁や刺し網漁によって姿を現すことが知られている。新潟県の海では、どのように漁が行われているのであろうか。

漁法や漁場、操業期間は「新潟県漁業調整規則」1964年(昭和39)公布の県条例によって細かく規制されている。新潟県農林水産部水産課発行の『操業区域略図』で確認すると、底引き網は「小型機船底びき網漁業」に一括され、「手縄第1種漁業」、「手縄第1種漁業(特殊)」、「手縄第1種漁業(新潟・山形入会)」、「板びき網漁業」の4つの小分類がある。このうち糸魚川市から上越市名立区では「手縄第1種漁業」(第1図)一一わゆる底引き網漁が行われ、新潟市・村上市岩船・同市山北・粟島浦村周辺・佐渡市では「板びき網漁業」(第2図)が盛んである。年間では7・8月の操業は禁止されている。また、中越沖の越佐海峡は、「小型機船底びき網漁業」(底引き網漁)が禁止されている。

漁業部外者から見ると底引き網漁と同様に見える「ごち網漁業」は、底引き網漁が海底付近に生息する魚種を狙う漁法であるのに対し、ごち網漁は海底よりも上位に群れる魚種を対象としている。この漁法は網目などの形状の違いはあるが、海底からの高さがどれ位と厳密に規定されたものではなく、ごち網漁も網を投入して、船で引くまでの間は着底しているので海底の遺物が網に入る可能性は十分ある。つまり新潟県条例公布の昭和39年以降に越佐海峽で海揚がり品が発見され、漁業者が「底引き網」で揚がったとしても、実際の漁法は「ごち網漁業」による採集であるが、部外者への説明の便宜から底引き網と表現しているものであろう。ごち網漁業は沿岸から制限距離を設けているが、全県の海域で周年（通年）操業可能である。

刺し網漁は「めばる」と「あかがれい」については海域と期間に制限があるが、他は周年（通年）操業



第1図 底引き網漁の許可水域（新潟県水産課『操業区域略図』）

可能である。下越では沿岸から 6 浬内、佐渡は 4 浬内、他は一部の海域で制限があるものの自由に操業できる。

底引き網漁の見学

2013 年(平成 25)9 月 13 日に糸魚川市能生漁港所属の「あけぼの丸」に同乗し、底引き網漁を見学した。船長は磯谷光一氏、弟の正二氏と 2 人で漁をしている。あけぼの丸は全長 20m、9.7 トン。エンジン出力は 750 馬力で底引き網専用の船で船体後部に油圧自動巻きワインチのロープを巻き取るドラムの 2 基が目立つ。

能生漁港所属の底引き網漁の船は、2014 年(平成 26)現在、7 隻ある。能生漁港は大陸棚端の水深 200m までは約 5km と近く、漁場も船で 10 分から 20 分と作業効率に優れた立地である。漁の一日は早朝出港し、網を入れ、獲れた魚を氷と一緒に箱に入れる。魚が船倉に溜まると港に戻り、箱を降ろし仕分け作業へ託し、再び漁場に向かう。これを 3 回ほど繰り返す。港では魚種や大きさ毎に選別し、魚箱に詰め、午後 3 時から港で始まる競りにかける。漁船の方は、清掃や翌日の準備をして午後 4 時頃には陸に上がる。

底引き網の詳細 見学日の最初はメギス(和名ニギス)を狙い水深 140 尋(約 210m)に網を入れた。

- (1) 渔場に到着後、一端に浮きの目印を付けた直径 24mm の細いロープを投入する。
- (2) 卷き上げ機のドラムを自由回転にして船は細いロープを走りながら引き出す。約 500m 出したら、次に太目(直径 42mm)の重いロープを約 500m 引き出す。これが底引き網に直接連結される。
- (3) 網に近いロープは太く、巻き上げ機側のロープは細い。太いロープは底引き網が海底から浮き上がらないように、鉛が巻き込んである。漁師によつてロープの重さに工夫があり、漁網会社に 1mあたりの重さを注文して製作する。
- (4) 太いロープと網の袖に付いたロープを連結する。メギス漁に使用した網は、魚に入る袋の開口幅 12 尺(約 3.6m)、海中での高さ約 6m、袋の長さ約 22m である。この開口部に魚を導くために両側に付けた網を袖と呼び、片側の長さ約 33m。開口と両袖の網を合わせると幅約 70m の底引き網が海中で展開される。網を全部出し終わ



第 3 図 底引き網漁 (1)

ると、再び網に太い・細いロープの順に連結し、最初に目印を投入した地点に戻る。

- (5) 网は網を中心に直径約800mをロープで囲み、出発地点に戻り、最初に投入したロープを巻き上げ機に連結したら底引きを開始する。網を引くために船をゆっくり走らせる。船の速度は、底引き網漁もごち網漁も同じ時速1.4から1.5ノット（時速2.6～2.8km/h）で引く。乗船時の記録は、ロープ投入9時27分、引き始め9時48分、巻き上げ始め10時10分、約15分で網が見え始める。ごち網漁では、ロープ投入12時19分、網投入23分、ロープ連結25分、両端連結29分、引き始め12時31分、巻き上げ始め40分、52分網が見える。
- (6) 一度の底引き網漁は、海底の約1,100mを20分から23分かけて、沖から岸に向かって引く。引き揚げた網は舷側の金具に掛けて、獲物をタモ網で掬い、水と共に箱に入れ、船倉に収納する。最後に獲物が少なく軽くなったら、ウインチで袋網を吊り上げて袋部分を甲板に降ろし、袋端部のファスナーを開けて魚を取り出す。今回、陶磁器は揚がらなかったが、入った場合はこの袋部分にある。
- (7) 現在の漁は、GPS付魚群探知機で海底の状況を知ることができる。写真は操舵室のモニター映像である。海底地形図に漁のポイントと共に、底引き網を仕掛けける船の航跡が黄色線で示されている。網の位置は左上辺の中央にあたる。線が途切れた部分は、ロープの始点で船が引き始める位置である。ここでは2回漁をしたことが表示されている。



第4図 底引き網漁（2）

第Ⅱ章 調査・研究

1 調査に至る経緯と目的

新潟県の上越市や長岡市および出雲崎町などといった日本海に面する市町村の多くでは、底引き漁のさくに珠洲焼を主体とする陶磁器がたびたび引き揚げられることが以前から知られていた。そして、名立タラバ例をはじめとしてそれらの中のいく例かは、公的〔新潟県教育委員会 1977〕あるいは私的〔伊藤・室岡・金子 1975〕に報告されている。しかし、その全容は集成などによって明らかにされているわけではない。また、これらの陶磁器については、所有者の高齢化や市町村合併の混乱から、所在不明なものも少なくないという事実や、最近では網の破損被害を防ぐために、海揚がり陶磁器の位置を正確に記録した漁船の GPS データーが蓄積されているという情報を得ている。また、陶磁器などが引揚げられるという状況は現在も続いているが、それに対する文化財保護的な手立ても、その実態が不明であるということから十分とは言い難いのが現状である。

幸いにも、2011 年（平成 23）に「日本海に沈んだ陶磁器－新潟県内海揚がり品の実態調査－」という研究テーマで「公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金」の助成を受けた。そこで、これを機会に研究会（新潟県海揚がり陶磁器研究会）を組織し、2 年計画で、将来的な海底探査を念頭において、新潟県域の海中より引き揚げられる「海揚がり陶磁器」の実態の把握と記録、ならびに調査成果の公表を目指して調査に着手した。

2 調査の方法と計画

調査方法は、対象遺物は縄文土器から近世陶磁器までの海揚がり陶磁器を中心に、その他仏像や鎧などの海揚がり品も範疇とした。対象地は、新潟県の村上市、栗島浦村、新潟市、長岡市、柏崎市、上越市、糸魚川市、佐渡市といった日本海に面し、過去に海揚がり陶磁器の情報があった沿岸市町村とした。具体的な調査は、海揚がり陶磁器の分布調査と所在の確認、海底から引き揚げた時の情況の聞き取り、GPS データーによる埋没位置の特定、海揚がり陶磁器の観察および実測図作成や写真撮影など記録の作成を行い、最終的には、一連の調査成果を報告書としてとりまとめて公表することである。

当初計画は、1 年目は海揚がり陶磁器の分布調査と所在確認、海底から引き揚げた時の聞き取り調査、GPS データーによる埋没位置の特定を行い、2 年目は海揚がり陶磁器の観察および実測図作成や写真撮影といった記録の作成と報告書による調査結果の公表を行うこととした。

3 調査・研究の体制

平成 23 年度、平成 24 年度、平成 25 ~ 26 年度の新潟県海揚がり陶磁器研究会の調査・研究の体制は以下のとおりである。

A 2011年度

会長・研究代表者

寺崎 裕助（新潟県立歴史博物館）

副会長・共同研究者

相羽 重徳（㈱古田組遺跡調査研究室）

幹事・共同研究者

安藤 正美（見附市民俗文化資料館）

田海 義正（㈱新潟県埋蔵文化財調査事業団）

共同研究者

池田ひろ子（出雲崎町民課）

伊藤 啓雄（柏崎市教育委員会教育総務課）

加藤由美子（長岡市教育委員会科学博物館）

鹿取 渉（佐渡市世界遺産推進課）

木島 勉（糸魚川市教育委員会文化振興課）

塩原 知人（村上市教育委員会埋蔵文化財係）

品田 高志（柏崎市教育委員会教育総務課）

竹部 佑介（㈱大石組文化財事業部調査係）

湯尾 和広（上越市教育委員会埋蔵文化財センター）

渡邊ますみ（新潟市歴史文化課）

調査指導委員

佐々木達夫（金沢大学名誉教授）

B 2012年度

会長・研究代表者

寺崎 裕助（新潟市文化財センター）

副会長・共同研究者

相羽 重徳（㈱古田組遺跡調査研究室）

幹事・共同研究者

安藤 正美（見附市民俗文化資料館）

田海 義正（㈱新潟県埋蔵文化財調査事業団）

共同研究者

池田ひろ子（出雲崎町民課）

伊藤 啓雄（柏崎市教育委員会教育総務課）

加藤由美子（長岡市教育委員会科学博物館）

鹿取 渉（佐渡市世界遺産推進課）

木島 勉（糸魚川市教育委員会文化振興課）

塩原 知人（村上市教育委員会埋蔵文化財係）

品田 高志（柏崎市総合企画部文化振興課）

竹部 佑介（㈱大石組文化財事業部調査係）

湯尾 和広（上越市教育委員会埋蔵文化財センター）

渡邊ますみ（新潟市歴史文化課）

調査指導委員

佐々木達夫（金沢大学名誉教授）

C 2013～2014年度

会長・研究代表者

寺崎 裕助（新潟市文化財センター）

副会長・共同研究者

相羽 重徳（佐渡市世界遺産推進課）

幹事・共同研究者

安藤 正美（見附市民俗文化資料館）

田海 義正（㈱・[公財]新潟県埋蔵文化財調査事業団）

共同研究者

伊藤 啓雄（柏崎市教育委員会総務課、同博物館）

加藤由美子（長岡市教育委員会科学博物館）

鹿取 渉（佐渡市世界遺産推進課）

木島 勉（糸魚川市教育委員会文化振興課）

小林(池田)ひろ子（出雲崎町民課）

塩原 知人（村上市教育委員会埋蔵文化財係）

品田 高志（柏崎市総合企画部文化振興課、同市教育委員会博物館）

竹部 佑介（㈱大石組文化財事業部調査係）

湯尾 和広（上越市教育委員会埋蔵文化財センター）

渡邊ますみ（新潟市教育委員会）

調査指導委員

佐々木達夫（金沢大学名誉教授）

4 調査・研究等の経緯

調査・研究等、活動の経緯は以下のとおりであり、2011年度、2012年度、2013年度に区分して述べる。なお、2014年度は、ほとんどが原稿の執筆と報告書の編集にあてた。

A 2011年度

① 助成金

4月1日付で公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金に、申請者寺崎裕助、研究テーマ名「日本海に沈んだ陶磁器—新潟県内海揚がり品の実態調査—」で研究助成金交付申請を行う。そして、5月18日に贈呈が決定する。

② 幹事会

相羽重徳・安藤正美・田海義正・寺崎裕助で構成し、7月と3月に新潟市内で開催した。第1回は第1回研究会に向けて今後の予定等、第2回は来年度調査計画や来年度予算等について検討を行なった。

③ 研究会

9月、12月、2月の3回、新潟市内で開催した。第1回は研究の内容と目的、今後の計画、調査方法、予算の執行等について、説明と質疑・検討を行うと共に、研究会の名称を「新潟県海揚がり陶磁器研究会」と定め、会長（寺崎裕助）、副会長（相羽重徳）、幹事（安藤正美、田海義正）を決定する。第2回は調査研究成果の報告や今後の予定等、第3回は調査研究成果の報告や来年度の予定等を話し合った。

④ 調査

村上地域 12月に村上市郷土資料館で、粟島沖海揚がりの珠洲焼甕2点と粟島～佐渡沖海揚がりの珠洲焼甕の写真撮影を行う。磐舟文華博物館から村上市に移管された2万点余りの資料の中に、海揚がり資料がないか調査を行い、11点の海揚がり資料が存在したことを確認できた。11点の海揚がり資料は、確認できたものが6点、カードのみで所在不明のものが5点である。それらの内7点は珠洲焼で、カードのみの資料のほとんどは種別不明である。珠洲焼は、全ての採集地点が粟島沖あるいは粟島沖～佐渡沖と記録されている。今後は、粟島における一連の調査ならびに所在を確認した資料の記録作業を行う予定である。

新潟地域 12月～1月にかけて新潟市本所、五十嵐浜支所、松浜支所、南浜支所、西蒲支所など漁業協同組合で聞き取り調査を行うが、いずれも海揚がり陶磁器の情報は得られなかつた。現在は、所在を確認した須恵器や珠洲焼5点の記録作業を行っている。今後は、間瀬地区で所在確認にあたる予定である。

長岡・出雲崎地域 11月～2月にかけて寺泊で、踏査、所在確認、記録作業ならびに聞き取り調査を行つた。今までに58点の所在を確認しているが、今後さらに増加する可能性がある。これらは珠洲焼が中心であるが、他に近世陶磁器や平安時代の須恵器もある。集中して揚っている海域もほぼ特定でき、聞き取りの結果沈没船の存在も想定される。今後は、出雲崎地域にも調査範囲を拡大する予定である。

柏崎地域 公的機関、漁業協同組合、網元、寺院等で聞き取り調査を行い、須恵器・珠洲焼・石仏・鏡等計7点が海揚がりしているとの情報を得た。その内、5点は所在を確認でき、鏡を除く4点は記録作業も終了した。今後は、笠島地区などの情報収集を行いつつ、所在確認と記録作業を行う予定である。

上越・糸魚川地域 柿崎と名立て情報収集と聞き取り調査、東京、上越、糸魚川、能生で所在確認と

記録作業を行った。聞き取り調査では、名立沖は1地点ではなく複数地点が存在することや、施釉陶磁器の掲がっていることが確認でき、その一部は海底地形図上に示してもらえた。所在確認は、糸魚川・能生で6か所15点、名立で2か所9点、上越で1か所2点、東京で1か所1点を確認でき、それら資料の一部は記録作業が終了している。海揚がり品は、珠洲焼が中心ではあるが、他に須恵器や近世陶器も確認できた。海揚がり地点も名立沖に限らず、徳合沖、能漁港沖、崩山（高見崎）沖など数地点存在することが明らかとなった。今後は、漁港関係者、学校関係、寺社関係への情報収集、および情報収集で得た資料の所在確認と記録作業を行う予定である。

佐渡地域 漁業関係者に対する情報収集と、資料の所在確認を行った。その結果、松ヶ崎で繩文土器1点、野浦・月布施・鷺崎で須恵器各1点、琴浦で石鉢等、相川地区で鐘2点の所在を確認した。今後は、所在を確認した資料の記録作業と情報を得たが所在不明資料の所在確認、ならびに引き続いての情報収集を行う予定である。

⑤ 研究会への参加

10月に金沢大学サテライトプラザで、金沢大学公開講座「海の考古学」に参加した。2月に東京海洋大学・越中島キャンパスで開催された、第6回水中文化遺産と考古学シンポジウム「海のタイムカプセル－水中考古学からのおくりもの」に参加した。

B 2012年度

① 助成金

4月20日付で公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金宛に、申請者寺崎裕助、研究テーマ名「日本海に沈んだ陶磁器－新潟県内海揚がり品の実態調査－」で研究助成金交付申請を行う。そして、5月30日に贈呈が決定する。4月20日付で公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金宛に、研究進捗状況報告書を提出する。1月18日付で三菱財團に、代表研究者寺崎裕助、調査研究名「日本海に沈んだ陶磁器－新潟県内海揚がり品の実態調査－」で第42回（平成25年度）三菱財團人文科学研究助成を、3月12日に財團法人高梨学術奨励基金へ、代表研究者申請者寺崎裕助、調査研究名「日本海に沈んだ陶磁器－新潟県内海揚がり品の実態調査－」で調査研究助成をそれぞれ申請した。

② 幹事会

6月、9月、2月の3回新潟市内で開催した。第1回は今年度の計画、第2回は予算執行計画と記録類の編集業者の選択、第3回は編集進捗状況と助成金の応募等を中心に検討を行なった。

③ 研究会

7月、11月、3月の3回新潟市内で開催した。第1回は今年度の計画並びに今年度予算の説明と前回の研究会以降の各地域の調査成果報告等、第2回は報告書作成の説明と前回の研究会以降の各地域の調査成果報告等、第3回は記録類編集等の進捗状況、予算執行状況、助成金申請状況、前回の研究会以降の各地域の調査成果等の報告をそれぞれ行った。

④ 調査

各地域の成果は以下のとおりである。総数151点を数え、内訳は繩文土器1点、弥生土器1点、須恵器19点、土師器2点、珠洲焼103点、越前焼2、青磁1点、唐津焼2点、伊万里焼1、備前焼1点、越中瀬戸焼1点、近世陶器船德利1点、陶器黄釉鉢1点、陶器灰釉德利1点、コンクリート製蛸壺1点、仏像2点、石仏2点、神像1点、鋪5点、船シャフト1対、石鉢1点、鉄製用途不明品1点である。時

代は縄文時代から現代まで広範囲にわたるが、中世の珠洲焼が圧倒的に多く、次いで古代の須恵器である。

地域的に見て海揚がり資料が多い所は、長岡地域の寺泊沖タラ場と出雲崎沖、上越地域の名立海底遺跡、糸魚川地域の筒石である。特筆すべきものとしては、寺泊沖タラ場の青磁と佐渡市の縄文土器がある。

村上地域 6月25日～26日に、粟島の調査を行ったが、海揚がり品は確認できなかった。しかし、聞き取り調査から、「粟島沖」とは粟島と越後本土の間のこと、外海側ではないことが明らかとなった。平成24年度までに確認・資料化できた海揚がり品は、珠洲焼6点である。

新潟地域 間瀬で新たに珠洲焼壺1点と片口鉢5点を確認、海揚がり地点はいざれも弥彦沖である。平成24年度までに確認・資料化できた海揚がり品は、須恵器3点、珠洲焼8点、越前焼2点、仏像1点の合計14点である。

長岡・出雲崎地域 4月～6月にかけて、寺泊で報告済み資料ならびに新資料の記録作業を行った。内訳は、珠洲焼壺2点、同片口鉢6点、同四耳壺1点、同大壺1点、同小鉢1点、青磁盤1点、阿弥陀仏1点、石仏1体、コンクリート製蛸壺1点で、内新資料は珠洲焼の片口鉢3点である。7月～9月にかけて、出雲崎、寺泊において海揚がり陶磁器の記録作業を行い、11点を資料化したが、出雲崎では所在が確認できない既存資料が半分ほどある。中には今年海揚がりしたものもあって、これからも新資料が増加する可能性がある。平成24年度までに確認・資料化できた海揚がり品は、寺泊沖は須生土器1点、須恵器3点、珠洲焼33点、青磁1点、唐津焼1点の計39点、出雲崎沖は須恵器5点、土師器1点、珠洲焼8点、越前焼2点、伊万里焼1点、唐津焼1点、備前焼1点、コンクリート製蛸壺1点、仏像1点、石仏1点、神像1点、鏡1点、船シャフト1対の計25点で、合計64点である。

柏崎地域 7月までに、柏崎市役所、新潟漁業協同組合柏崎支所、柏崎市立博物館、中浜、石地、笠島などで聞き取り調査を行い、番神沖から海揚がりした石仏は、明治年間に引揚げられたことが明らかとなった。須恵器には佐渡小泊産の製品は確認されておらず、時期は8世紀・9世紀のものがある。珠洲焼壺は、13世紀後葉～14世紀前葉の製品とみられる。石仏は、近世の所産と考えられる。平成24年度までに確認・資料化できた海揚がり品は、須恵器3点、珠洲焼1点、石仏1点、鏡4点の合計9点である。

上越・糸魚川地域 能生漁港と筒石漁港で聞き取り調査を行い、能生漁港では漁港沖からも珠洲焼壺が海揚がりしていることや、筒石漁港では名立沖から珠洲焼を中心とした多くの陶磁器が海揚がりしていることが明らかとなった。平成24年度までに確認・資料化できた海揚がり品は、上越では名立海底遺跡から珠洲焼15点、名立～筒石沖から珠洲焼7点の計22点、糸魚川では筒石で須恵器1点、珠洲焼18点、その他で須恵器1点、珠洲焼7点、越中瀬戸焼1点の計28点で、合計50点である。

佐渡地域 ニツ亀沖で須恵器1点の海揚がりを確認した。大野亀沖では徳利や黄色釉薬の鉢など近世末期～近代の陶磁器がたびたび海揚がりしており、徳利には「松露油」の文字がある。この「松露油」は三重と金沢に製造している場所があるようである。2012年度までに確認・資料化できた海揚がり品は、縄文土器1点、須恵器3点、土師器1点、近世陶器の船徳利1点、陶器黄釉鉢1点、陶器灰釉徳利1点、石鉢1点、鉄製用途不明品1点の合計11点である。

C 2013年度

① 助成金

2013年（平成25）年3月12日に財團法人高梨学術奨励基金へ、代表研究者申請者寺崎裕助、調査研究名「日本海に沈んだ陶磁器—新潟県内海揚がり品の実態調査—」で申請した調査研究助成は、5月21

日付で助成が決定した。2013年(平成25)1月18日付で三菱財團に、代表研究者寺崎裕助、調査研究名「日本海に沈んだ陶磁器－新潟県内海揚がり品の実態調査－」で申し込んだ第42回(平成25年度)三菱財團人文科学研究助成は、6月17日付で贈呈が決定した。

② 幹事会

7月と3月の2回新潟市内で開催した。第1回は、今後の予定、予算

支出見込の検討を行った。第2回は、財團法人高梨学術奨励基金へ提出する成果と会計、三菱財團人文科学研究助成の取支報告書の方向性、報告書・『日本海に沈んだ陶磁器－新潟県内海揚がり品の実態調査－』について報告と今後の予定およびそれらの内容の検討を行った。

③ 研究会

9月と1月の2回新潟市内で開催した。第1回は、助成金についての説明、幹事会と各地域の調査状況の報告を行った後、報告書の頁数・目次・執筆者・執筆要項を提示し、それについての質疑を行った。第2回は、1月18日と19日の両日、石川県珠洲市教育委員会の大安尚寿氏を講師に、本格的な原稿執筆を前に珠洲焼学習会(第5図)を新潟市内で行った。この詳細については、別項にて報告する。

④ 調査

各地域の調査成果は、以下のとおりである。

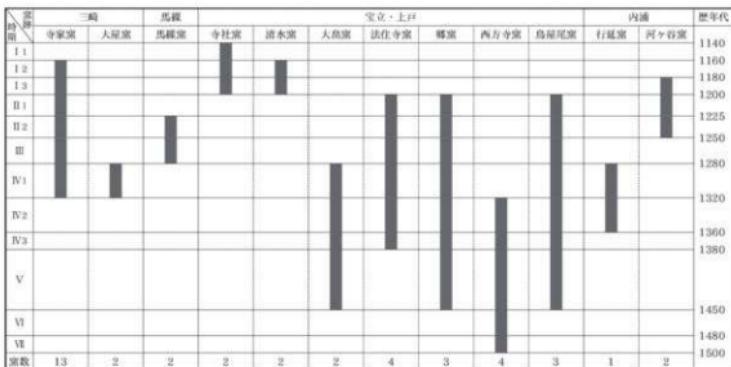
村上地域 2月17日と18日の両日、山北地区の調査を行った。17日は、午前中に調査の打合せを行った後、午後から新潟漁協山北支所桑川連絡所、同漁協山北支所、村上市山北地区公民館を訪ねて、海揚がり資料があるか否かの調査を行った。漁協ではいずれも海揚がりの情報はなかった。公民館では、海揚がり情報は過去に数例あったと記憶しているということであったが、どこに・何があるというような具体的な情報は得られなかつた。18日は、以前に灰釉壺として資料報告および民放の娛樂番組で紹介された資料を所有する個人を対象に訪ねて、引掛けた場所・状況などの聞き取り調査と海揚がり陶器の観察および写真撮影を行つた。その場で、近くにも海揚がり陶器があるという情報を得たので、その個人宅でも陶器の実見と写真撮影および聞き取り調査を行つた。

新潟地域 縄文土器1点と珠洲焼4点の所在が確認できた。10月11日に、漁業関係者が「壺を引揚げた」との情報を得て、14日に確認した。その後この壺は、縄文時代中期の深鉢形土器であることが判明した。この事が新聞で報道されると、新潟市文化財センターに海揚がり品を所有しているとの連絡があり、職員が確認したところ、珠洲焼の壺と片口鉢であることが明らかとなつた。残りの2点は、1月早々に以前底引き網漁で引掛けた土器があるとの情報を得て、新潟市内の個人宅で珠洲焼の壺2点であることを確認し、写真撮影と聞き取り調査を行つた。これら資料は、いずれも新潟市文化財センターで資料化されて、資料報告が行われている〔新潟市文化財センター2014〕。

長岡・出雲崎地域 8月中旬ごろ、石地沖で土器が揚がつたという連絡があった。確認したところ古墳時代前期の壺であったので、実測と写真撮影を行つた。



第5図 珠洲焼学習会



第6図 珠洲焼の窯跡別操業時期（吉岡康暢氏編年をもとに作成）

柏崎地域 3月に、荒浜沖から海揚がりした須恵器の写真撮影を行った。

上越・糸魚川地域 8月～9月に、筒石地区で新発見の須恵器と珠洲焼3点の実測を行なった。9月に底引き網漁船に乗船して、底引き網漁を体験した。12月に上越市立総合博物館で、糸魚川市浦本沖海揚がりの石錘の実測と写真撮影を行う。同月に糸魚川市筒石地区で、海揚がりの須恵器を借用して実測を行う。

佐渡地域 9月に両津・水津地区住民間取り調査、10月に相川・姫津地区住民間取り調査を行うが情報は得られなかった。9月に赤羽郷土資料館で錨1点、10月に両津郷土博物館で錨5点、11月に小木幸丸展示館で鉄錨1点と小木港外海揚がりの御影石23点、小木港海運資料館で錨2点、小木民俗博物館で宿根木沖海揚がりの錨4点、1月に両津大川地区津神神社で大川港沖海揚がりの錨4点をそれぞれ確認する。2月に、両津郷土博物館、赤羽郷土資料館、小木幸丸展示館、小木港海運資料館、小木民俗博物館を再訪して、錨や御影石の計測と写真撮影を行う。

⑤ 珠洲焼学習会

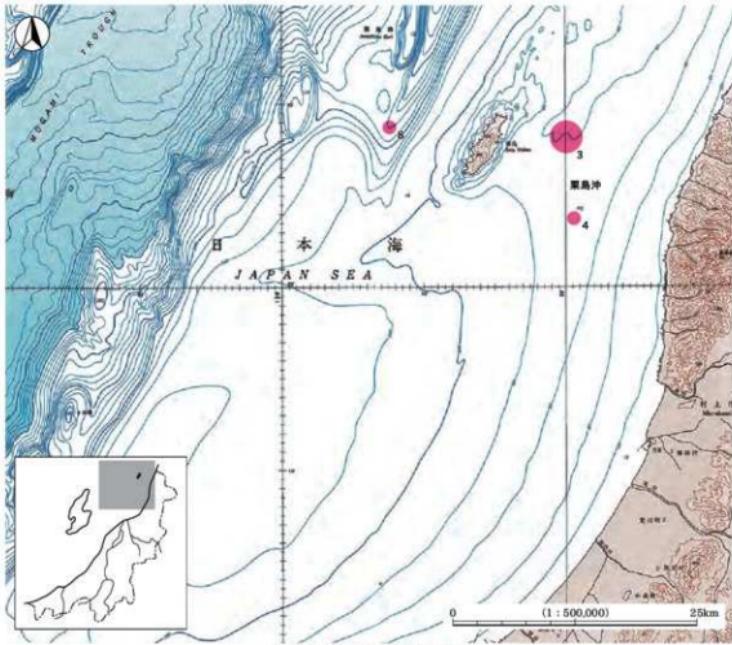
先述したように1月18日・19日の両日、新潟市内で実施した。18日は、寺崎の挨拶と調査の経緯説明があった後に、大安尚寿氏（珠洲市教育委員会）による「珠洲焼の概要一編年を中心にして」という講義と、講義についての質疑を行った。その内容は、「編年研究の現状」、「編年適用の要点」、「標識的形態とその他の形態」という項目からなり、吉岡編年をどう読むかということであった。その後、地域ごとに調査結果を発表し、それについての大安氏のコメントとそれに対する質疑を行った。18日は、村上地域、長岡・出雲崎地域、柏崎地域であった。19日は、新潟地域、上越・糸魚川地域、佐渡地域の発表・コメント・質疑の後に、全体質疑と大安氏のコメントと講評があった。全体質疑は、「器面の押印は窯判別の決め手となるか?」、「摺鉢の卸目の変化について」、「積出港と窯の立地は」、「海揚がりする珠洲焼の時期的傾向はどうか」について行われた。コメントは、研究会側からの希望で、新潟県内各地域から海揚がりした珠洲焼の時期についてであった。講評は、6点ほどあったが、「報告する時は、編年にはあいまいな部分があることを念頭に、絶対視せずに組み立ての方が無難である」と「今回の集成は今後の研究の基礎資料となる」という点が印象に残った。

第III章 調査結果

1 村上地域の海揚がり品

A 概要

現在、確認できている村上市域の海揚がり遺物の殆どは旧磐舟文華博物館収蔵品であり、この項で紹介する資料全8点中の6点を占める(巻頭図版3)。磐舟文華博物館とは、村上市の岩船港ほど近い諸上寺境内にかつて存在した旧私設の歴史・民俗資料館で、地元の篤志家である故斎藤誠一が村上市を含む岩船郡にまつわる2万点近い資料を収蔵・公開していたが、惜しまれながら1987年(昭和62)に閉館した。閉館後、寄託者に返却された資料以外は当時の村上市が管理することとなり、現在は村上市郷土資料館へ移管している。海揚がりと思われる遺物については、磐舟文華博物館資料目録によると14点で、その内訳は珠洲焼甕4点、須恵器もしくは珠洲焼甕2点、近世壺2点、明治期甕1点、明治期罐2点であり、いずれも地元岩船港の漁業関係者の採取によるものである。現在、実見できるものは冒頭の6点のみであるが、これは、寄託者への返却や博物館閉館及び資料移管時の混乱等に起因するものと思われる。なお、



第7図 村上地域海揚がり地点

磐舟文華博物館資料目録によれば、海揚がり品の採取地点として「粟島沖」、「粟島～佐渡沖」のいずれかが記されている。これらの境界はどこに存在するのかは不明だが、粟島の元漁業関係者の証言では、粟島には大きく東沖と西沖のそれぞれに良い漁場が存在し、東沖（本土側）を粟島沖と呼ぶのだという。本稿ではこの言に倣い、粟島の東沖を「粟島沖」、佐渡に臨む西沖を「粟島～佐渡沖」と置くこととする。それぞれの良い漁場を求め、岩船漁港、寝屋漁港（旧山北町）、山形県鼠ヶ関漁港を発した船が底引き網漁をおこなっていたとのことである。

B 粟 島 沖

1) 珠 洲 焼 (図版 1-1・2、図版 2-3・4)

5点確認されている。1～3は旧磐舟文華博物館資料、4は個人所有の資料である。1は中壺で、口径 41.4cm・底径 14.4cm・器高 57.1cm で、焼き歪みが見られる。口縁は端をやや下向きに摘み出し帶状としている。胴部外面の叩き目は頸部下から右下がりとなっており、その底部付近はナデ調整が施されている。底部は静止糸切りである。口縁端から肩部にかけて自然軸が残る。外面に貝殻の痕跡が認められる。吉岡編年Ⅰ期古相と思われる。1972年（昭和47）粟島沖海中からの引揚げとの記録が残る。2は中壺で、口径 20.8cm・底径 11.8cm・器高 35.6cm を測る。口縁部端はナデにより面取りされ、胴部外面の叩き目は頸部下から右下がりとなっている。内面には叩きに伴うて具痕があり、底部は静止糸切りである。吉岡編年Ⅰ期古相である。外面と底部には貝殻が付着しており、特に外面への付着が夥しい。1977年（昭和52）採取とある。3は中壺で、口径 42.8cm・底径 17.0cm・器高 48.0cm を測り、焼き歪みがある。口縁は水平に摘み出され、胴部外面の叩き目はやや右下がりである。内面には叩きに伴うて具痕があり、底部は静止糸切りである。吉岡編年Ⅰ期新段階と考えられる。外面及び底部に貝殻の付着および付着痕が見られる。粟島沖 4～5マイル（約6～8km）で水深は 130m であったという記録が残る。4は四耳壺で、口径 10.1cm・底径 7.9cm・器高 24.3cm を測る。口縁は「く」字状に短く屈曲し端部が面取りされる。頸・肩部に3段、胴部に1段、7～11条1単位の柳目波状文が横位に巡る。胴部にはロクロナデによる凹凸が残る。底部は回転糸切りである。吉岡編年Ⅰ期新段階のものと思われる。外面に貝類の付着が認められる。大正時代に粟島沖南東 6 海里（約11km）、水深 80 尋（約144m）からの採取だという。『寺泊乃おいたち』〔寺村 1960〕、『寺泊町史資料編 1』〔戸根 1991〕などで資料紹介がなされている。

C 粟 島 ～ 佐 渡 沖

1) 古代灰釉陶器 (図版 3-8)

8は短頸壺で、口径 15.5cm・底径 9.5cm・器高 33.1cm を測る。口頸部は短く直立し、胴部はなで肩・長胴で、底部は上げ底風の平底である。外面口頸部上半から肩部にかけて灰釉がかけられ、頸部内面から胴部上半にかけては輪積痕がはっきりと残されている。器壁は薄く、焼成も堅緻である。東海系の古代灰釉陶器と思われる。外面と底部に貝殻の付着が認められる。個人の所有で、1990年（平成2）に粟島西沖 5 海里（約9.3km）、水深 80 尋（約144m）の地点から採取されている。すでに資料報告が行われており〔戸根 1992〕、今回の記述もそれに負うところが大きい。

2) 珠 洲 焼 (図版 2-5、図版 3-6・7)

5は中壺で、口径 23.5cm・底径 16.2cm・器高 37.5cm を測り、焼き歪みが見られる。口縁端はやや

丸みを帯び、外面頸部にも及ぶ叩きは平行から右下がりとなり、肩部にナデ調整が見られるなど丁寧な造成である。内面には叩きに伴う当て具痕があり、底部は静止糸切りである。吉岡編年Ⅰ期古相当である。内外面と底部には貝殻が付着しているが外面への付着が夥しい。6は中腹で、口径 42.6cm・底径 17.4cm・器高 49.5cm を測る。口縁は水平に摘み出され、外面の叩き目は水平から右下がりとなる。内面には叩きに伴う当て具痕があり、下部はナデ調整される。底部は静止糸切りである。吉岡編年Ⅰ期に比定される。内外面と底部には貝殻が付着している。7は四耳壺で、口径 10.8cm・底径 8.8cm・器高 24.2cm を測る。肩部 1段、胴部 4段 4～5条単位の横位櫛目波状文が巡る。4つの縦造り耳中央部に横位の刻み目が入り、口縁は「く」字状に短く屈曲し端部が面取りされる。内外面と底部に貝殻の付着が見られ、底部は回転糸切りである。吉岡編年Ⅰ期相当のものと思われる。磐舟文華博物館の資料目録では大型の甕（所在不明）の中に入っていたものとある。

D 粟島～寢屋漁港中間地点沖

1) 近世陶器（第8図）

広口の壺で、口径 21cm・底径 25cm・器高 32cm・肩部径 28cm 余りを測る。

産地は不明である。現在、植木鉢として利用されているため、詳細な観察は不可能であった。海揚がりした地点は粟島と寢屋漁港の中間点くらいで、水深 70～80m 余りでないかということである。海揚がりは今から 30～40 年前で、その時は当資料を含めて 2 個体が海揚がりしたという。他の 1 個体は茶色がかった壺で、口縁部が破損しており、隣の勝木地区の個人に譲ったということである。所在の確認を行ったが、確認することはできなかった。



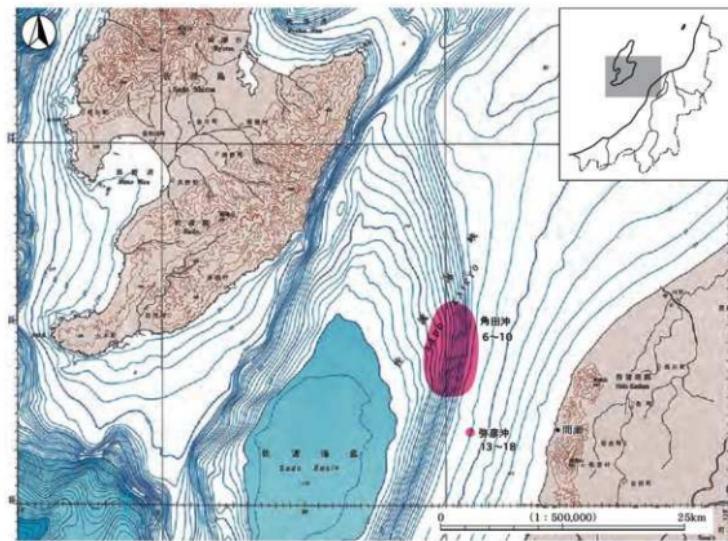
第8図 近世陶器

2 新潟地域の海揚がり品

A 概要

新潟市の沖合い 10km の海域には、水深 200m 前後のタラバが海岸線にほぼ平行して存在する。そのタラバは出雲崎沖から角田沖あたりまで広がっており、漁場となっている。ここからは、時折古代・中世の陶磁器が底引き網漁により引き揚げられることが古くから知られ、それは 1911 年（明治 44）2 月 17 日付、同年 3 月 16 日付の「新潟新聞」の記事にもみることができる。その後、雑誌や市町村史で学術的な視点での報告がされるようになり、今回の調査以前に記載された本地域の海揚り陶磁器は、寺村光晴による弥生土器〔寺村 1956〕、山口栄一による須恵器〔山口 1994〕、藤塚明による珠洲焼〔藤塚 1995〕、旧巻町教育委員会による木像仏〔巻町教育委員会 2000〕、佐々木達夫氏を中心とする金沢大学人文学部考古学研究室の研究グループによる資料集成〔佐々木達夫 2011〕などがある。

掲載した資料は 18 点である。6 点（1・2・6・8・11・12）は前述の文献に掲載された陶磁器等であるが、所在を確認できないものが 2 点（6・12）である。残りの 12 点は新たに確認されたものであるが、そのうち 7 点（5・13～18）は発見者（漁業関係者）から直接情報を得たもので、調査期間中に陸揚げされ



第9図 新潟地域海揚がり地点

た1点を含む。新潟市文化財センター（以下、文化財センターという）にこの情報を提供し、文化財センターでは新潟市の文化財という認識から資料化を行った。このうちの3点は新潟市に寄贈され、文化財センターで収蔵・展示している。また、新聞報道されたことにより市民から文化財センターに2件4点（3・4・9、10）の情報提供があり、2点が新潟市に寄贈された。資料化された海揚がり陶磁器は『新潟市文化財センター年報』〔新潟市文化財センター 2014〕に掲載されている。

B 佐渡周辺

1) 珠洲焼（図版4-1～4）

1は、大壺で口縁部上半の多くを欠損している。口径18.4cm・底径13.3cm・器高48.3cmを測る。口縁部は外反し、端部が嘴状に引き出されている。胴部は上半に最大径がある倒卵形を呈している。口縁部外面にはロクロナデによる稜線、胴部外面には綾杉状の叩き目がみられる。内面には大きな貝殻の付着痕があり、外面はやや摩耗している。胴部外面には「佐渡沖海底 明治四十年」と墨書きされた短冊状の紙が貼られているが、詳細な海揚がりの経緯は不明である。時期は吉岡編年のII期と思われる。本資料は旧豊栄市出身の畠山氏が当時の豊栄市博物館に寄贈した考古コレクションのひとつで、『金大考古』〔佐々木達夫他 2011〕に掲載されている。現在文化財センターに展示されている。2は、完形の中壺で、口径17.7cm・底径12.5cm・器高38.5cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり上方で外反するが、中心から外れてやや片側に偏った位置にある。胴部は上半に最大径がある倒卵形を呈する。口縁部外面にはロクロナデによる稜線がみられる。胴部は外面に綾杉状のタキが施されているが、内面は貝殻の付着が著しく當て貝痕は確認できない。底部は静止糸切りである。底側部に溶着した小破片がみられる。本資料は

昭和初期に佐渡海峡で揚がったものとされる。時期は吉岡編年のIV期と思われる。市内在住の個人が所有しており、そのレプリカが新潟市歴史博物館に展示され、写真が『新潟市史』[藤塚 1995]に掲載されている。3・4は、完形の中壺で、3が口径 20.4cm・底径 15.0cm・器高 35.5cm、4が口径 19.8cm・底径 14.0cm・器高 34.5cm を測る。ほぼ同じ形態で、胴部は倒卵形を呈するが、3はコの字状、4はくの字状に外反した短い口縁部をもつ。胴部には、右下がりの叩き目が施され、内面には当て具痕がみられる。3の外底面は滑らかで製作時の痕跡が残っていないが、4の外底面には砂の付着、板状の圧痕が認められる。これらは市内在住の個人が所有するもので、昭和の初め頃に佐渡近海から底引き網漁で引き揚げられたものであることを祖父から聞いたという。時期は吉岡編年の I - 2 期と思われる。『新潟市文化財センター年報』[新潟市文化財センター 2014] に掲載されている

C 角田 沖

1) 繩文土器（図版 5-5）

深鉢で口縁部の多くを欠損している。口径 26.0cm・底径 10.0cm・器高 36.5cm を測る。底部から直線的に開きながら口縁部に至る。4 単位と思われる波状の口縁部は無文帯であるが、その下の胴部には縄文 (LR) を地文に 4 状 1 組の横位の沈線文が 4 段施されている。このうち 2 段目は波状であるが、いずれも半截竹管での下書き後棒状工具でなぞるという手法による。土器の外面には貝の付着がみられ、器面がわずかに摩耗している。本資料は、平成 25 年 10 月 6 日に、角田沖 15km 地点で引き揚げられた。水深は 150 ~ 170m という。時期は中期中葉の馬高式後半に比定され、出自は信濃川中流域の土器に求められる。発見者（引き揚げ者）は新潟漁業組合西蒲支所に所属する漁業関係者であり、後述する資料の情報提供者でもある。土器は新潟市に寄贈され、文化財センターで展示されると共に、『新潟市文化財センター年報』[新潟市文化財センター 2014] にも掲載されている。

2) 須恵器（図版 5-6 ~ 8）

6 は、『巻町史』[山口 1994] に掲載されている甕であるが、所在が確認できなかつたものである。『巻町史』によると、口径 21.8cm・器高 49.0cm を測る。口縁部はくの字状に開き、胴部上半に最大径をもつ。丸底で、胴部は外面に細かな平行文の叩き目、内面に同心円文の当て具痕がみられる。底部に他の個体の破片が接着している。陸揚げの経緯は不明である。7 は、完形の甕で、口径 26.0cm・器高 48.7cm を測る。口縁部はくの字状に開き、胴部上半に最大径をもつ。丸底で、胴部は外面に細かな平行文の叩き目が、内面に同心円文（底部付近は平行文）の当て具痕がみられる。本資料は、前出の畠山氏が豊栄市博物館に寄贈したものである。胴部外面には「角田沖タラバ遺跡（昭和五年二月）」と墨書きされた短冊状の紙が貼られているが、詳細な陸揚げの経緯は不明である。8 は完形の甕で、口径 27.0cm・器高 56.6cm を測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部上半に最大径をもつ。丸底で、胴部は外面に格子目文の叩き目が、内面に同心円文の当て具痕がみられる。本資料は、五ヶ浜の漁業関係者、遠藤甚兵衛が 1897 年（明治 30）に引き揚げたものであり、現在、巻郷土資料館に展示されている。これらの生産地ははつきりしないが、春日真実によれば、6・8 は佐渡小泊窯群のものでない可能性が高く、8 は阿賀北地方のものでもないという。8 世紀後半～9 世紀前半のものと推定されている [春日 2007]。

3) 珠 洲 焼 (図版 6-9・10)

9は、完形の大甕で、口径 60.0cm・底径 19.5cm・器高 63.4cm を測る。口縁部は強く外反し水平に近い。端部は丸く收めているが、ところどころ歪んでいる。胴部は上半に最大径があり、球形に近い。胴部は外面に右下がりの平行タキが施され、内面には当て具痕が残っている。肩部には「キ」のヘラ描きがみられる。胴部の下方には成形時の接合痕が残り、特に内面は頗著である。外底面には砂が付着している。本資料は、10とともに角田沖のタラバで引き揚げられたもので、1911年（明治 44）3月 16日付の「新潟新聞」で紹介されたものだという。記事には甕 1点・壺 1点・卸目をもつ片口鉢 2点の図が載せられており、運搬の組み合わせとしても興味深い。時期は吉岡編年のIV期と思われる。9・10はともに『新潟市文化財センター一年報』[新潟市文化財センター 2014] に掲載されているので、記事の詳細については年報を参照されたい。これらは市内在住の個人が所有していたが、2014年（平成 26）1月に市が寄贈を受け、現在文化財センターに収蔵・展示されている。10は完形の片口鉢で、口径 30.9cm・底径 12.6cm・器高 12.2cm を測る。口縁端部は外面に面をもち、胴部は内湾気味に聞く。卸目は 12 目一単位の櫛目を中央で交差させており、14 条みられる。底部は静止糸切りである。時期は吉岡編年のII期とされるが、卸目がやや新しい要素をもつようであり、また、この片口鉢が「新潟新聞」のものであるならば、10の甕との時期的な関係において今後の検討が必要である。

4) そ の 他 (図版 6-11)

11は木造の聖観世音菩薩像で、像高は約 50cm である。旧巻町の指定文化財であったが、合併後新潟市の指定文化財になった。『巻町の文化財』[巻町教育委員会 2000] に掲載されており、それによると角海浜の集落は慶長初期に能登から移転してきたと伝えられ、この像は能登から漂流してきたものとされる。現在、角海浜の集落ではなく、五ヶ峰に建てられた神社にこの像は安置されているという。江戸時代に製作されたものである。

D 間瀬沖

1) 弥 生 土 器 (図版 6-12)

『貝塚』で寺村光晴によって紹介されているが [寺村 1956]、所在が不明である。それによると、器種は甕で、口径 16.4cm・底径 4.1cm・器高 20.5cm を測る。口縁部は受け口状で、胴部の上半寄りに最大径をもつ。口縁部のヨコナデは頗著で、胴部には内外面にハケメが施されており、胴部下半は丁寧なナデを行っている。「頸部に荒い刷毛目状擦痕を横に継し」は、工具による横位のナデであろうか。「胎土は砂粒を含み、焼成は良好、黒褐色を呈している」が、水中に露出していたと思われる半分は水勢摩耗がみられたようである。この土器は、1946年（昭和 21）に秋山金太郎等が東経 138° 40'・北緯 37° □' の間瀬沖タラバで、水深 200m の海底から引き揚げたものであるという。その後、出雲崎町の宮下登一氏が陸揚げの状況を調査しており、寺村はそれを踏まえ、さらに土器について弥生時代終末期の千種式彫形土器（B類）に類似するなどといった考古学的な見解を述べている。

E 弥彦沖

1) 珠洲焼 (図版 6-13、図版 7-14 ~ 18)

13 ~ 17 は卸目をもつ片口鉢で、17 以外は完形である。形態はほぼ同じで、口縁端部は外面に面をもち、胴部は内湾氣味に開く。底部は静止糸切りである。13 は口径 31.2cm・底径 11.6cm・器高 13.6cm を測る。内面の卸目は 10 目一単位で、「米」状に加えて口縁部近くの 1 か所に短く口縁部に平行して施されている。外面に製作時にいたと思われる沈線状の傷がみられる。14 は口径 30.8cm・底径 11.2cm・器高 12.7cm を測る。内面は 16 目一単位の卸目が「米」状に施されている。内面の一部に器面の荒れがみられる。15 は口径 30.4cm・底径 11.8cm・器高 11.8cm を測る。外面がやや摩耗しており、外底面は静止糸切り痕があまくなっている。内面の卸目は 16 目一単位で、「米」状に施されている。貝殻付着痕と思われるものが内面に 2 か所みられる。16 は口径 30.7cm・底径 12.0cm・器高 11.6cm を測る。外面は摩耗している。内面は 8 目一単位の卸目が雑に施され、「米」状に加えて放射状に 1 か所、口縁部に平行して 1 か所、短いものが施されている。口縁部が黒ずんでおり海中で沈着したものと思われる。外面が摩耗しており、底部の糸切り痕がほとんど残っていない。17 は口径 29.8cm・底径 11.4cm・器高 13.0cm を測り、口縁部が一部欠損している。内面の卸目は 10 目一単位で、「米」状に加えて口縁部近くの 1 か所に口縁部に平行して短く施されている。貝殻が卸目付近に付着しているのがわざかに確認できる。18 は完形の小壺である。口径 9.7cm・底径 7.6cm・器高 20.5cm を測る。口縁部はくの字形状に外反し、強くヨコナデされている。胴部はいかり肩氣味の器形で、内外面のロクロメは顯著である。肩部には同一工具によるものとみられる 8 ~ 13 目一単位の櫛目波状文が 3 段施されている。底部は静止糸切りである。内外面に貝殻の付着がみられるが、内面の方がやや少ない。これらは、弥彦沖で新潟漁業組合西蒲支所に所属する 2 名の漁業関係者により引き揚げられたもので、その地点はいずれも北緯 37° 43' 59"・東経 138° 41' 39" 付近の水深 200m ほどのところである。13 ~ 16 は同じ漁業関係者が 2007 年(平成 19) 7 月の中越沖地震をまたいで前後に 2 点ずつ引き揚げたもので、地震後に引き揚げた 2 点は重なった状態だったという。17・18 は別の漁業関係者が地震後に引き揚げたものである。6 点はいずれも吉岡編年の二期に比定される。『新潟市文化財センター年報』[『新潟市文化財センター 2014』]に掲載されており、13・14 は 2012 年(平成 24) 6 月に市が寄贈を受け、現在文化財センターに収蔵・展示されている。

F 小結

今回の調査では、沖合 10 ~ 15km のタラバから昔のもの(陶磁器)が揚がるという古くから知られていた事実が具体的な形で把握された。考古資料となる陶磁器 17 点を時代・種別でみると、繩文土器・弥生土器が各 1 点、古代の須恵器が 3 点、中世の珠洲焼が 12 点であり、どの時代でも海が何らかの活動の場になっていたことが改めて認識される。また、地点別では佐渡周辺が 4 点、角田沖が 6 点、間瀬沖が 1 点、弥彦沖が 6 点となっており、数量の違いはあるにしろ、当時の人々の活動の軌跡・範囲を考える上で注目される。

調査開始時に把握していた資料は 6 点であったが、現時点で 18 点である。これは発見者である漁業関係の方々と情報共有できたことが大きく影響しており、さらに行政(文化財センター)が関わることで文化財としての位置づけがされ、効率のよい調査ができた。その後も文化財センターには情報提供があり、海揚がりした須恵器が新聞報道されている。今後の資料の増加に期待する。

3 長岡・出雲崎地域の海揚がり品

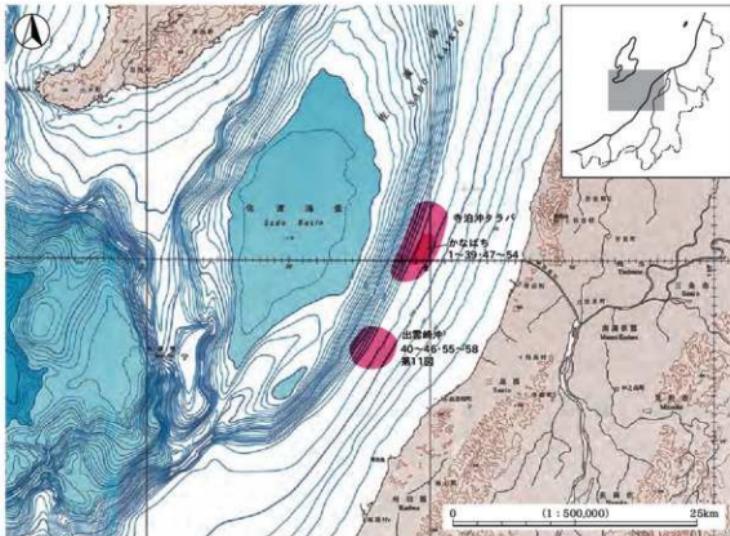
A 概 要

当該地域において、陶磁器などが海揚がりする場所は、「寺泊沖タラバ」と「出雲崎沖」の2地点が知られている。

1) 寺泊沖タラバ

寺泊沖タラバ(タラ場)は、三島郡出雲崎町境から長岡市寺泊野積の沖合い10kmの海域である(第10図)。大陸棚の縁端部にあたる同所は水深180~240m前後で、沖へ向かうと急激に地形が落ち込み、500m前後の深海になる。海底は泥質で、水温は年間を通じて0~1度と低く、地元の漁業関係者にはタラ・マダイ・アカガレイ等の漁場として知られている。この海域では、古く明治時代から底引き網漁やごち網漁に伴い、須恵器や珠洲焼等の陶磁器類が引き揚げられてきた(巻頭図版1・3)。

当地域における海揚がり品の考古学的研究は古く、寺村光晴の『貝塚』、『若木考古』紙上で資料紹介に始まる〔寺村1956・1957〕。1960年(昭和35)には、寺村と久我勇により『寺泊乃おいたち』が刊行され、当時把握した寺泊沖タラバ掘陸の土器17点が表にまとめられた〔寺村・久我1960〕。これらが今日の海揚がり土器研究の礎となっている。1977年(昭和52)には、新潟県教育委員会が実施した文化総合調査の報告書として、『寺泊・出雲崎』が刊行された。この中で金子拓男と高橋陽子は、寺泊・出雲崎地域に所在する海揚がり品43点を報告した〔新潟県教育委員会1977〕。特筆すべきは、土器以外



第10図 長岡・出雲崎地域海揚がり地点

の海揚がり品をも調査の対象とした点で、海揚がり品の多様性が改めて明らかにされた。加えて、同書では地元で行われている漁法についても触れられており、引き揚げの条件を考える上で興味深い報告である。1990年代に入ると、戸根与八郎が『寺泊町史』資料編1において新資料を含めた26点の海揚がり土器を報告した〔戸根1991〕。また、その後も高橋保雄、竹部佑介らによる新資料の報告が続き〔高橋1994、竹部2007〕、春日真実は県下で引き揚げられた須恵器の器種・帰属時期・胎土の検討を行っている〔春日2007〕。

今回の調査は『寺泊乃おいたち』、『寺泊・出雲崎』(以下、『私報告』とする)、『寺泊町史』資料編1(以下、『寺泊町史』とする)の掲載資料を追跡することから始めた。調査の結果、既報告資料の7割弱の所在を確認することができ、また、これまで知られていなかった新資料の発見も相次ぎ、当地域における陶磁器の引き揚げが、今なお続いていることが判明した。以下の資料各節では、今後の研究の手助けとなるよう、『寺泊町史』掲載資料については当時の図版番号を合わせて記載した。

広い寺泊沖タラバの海域の中で、特に陶磁器が多く引き揚げられる地点がある。長岡市寺泊の大河津分水路河口の沖合い10～11km、水深200m前後の通称「かなばち」と呼ばれる地点である(第10図)。引き揚げ品の大半は珠洲焼である。地元の漁業関係者によると、「かなばち」の海底は深くえぐられたような窪んだ地形であり、ここを目指して網を入れると陶磁器が揚がる確率が高いのだという。また、陶磁器は揚がるときは立て続けに揚がり、揚がらないときは何年も揚がらない。近年では2007年(平成19)7月の新潟県中越沖地震の後に、一時揚がるようになったという。これは、地震の揺れに起因する液状化現象により、海底に埋もれていた陶磁器が浮き上がったためと考えられる。

「かなばち」周辺は水深が深いため水温が低く、カキ等の貝類が生息できない。よって、ここで引き揚げられた陶磁器類の表面には、貝類がほとんど付着しない。また、「かなばち」の海底は細かい泥層であるという漁業関係者の証言どおり、引き揚げ直後の陶磁器の表面には、黄土色や緑灰色の細かい泥が付着している。以上のことから、長岡・出雲崎地域に所在する海揚がり品のうち、貝類がほとんど付着せず、表面に泥が観察できる個体は、高い確率で「かなばち」付近からの引き揚げ品と判断できる。反対に、土器の表面に貝類がびっしり付いた個体は、別のポイントから引き揚げられた可能性が高く、現状では出雲崎沖や石地沖がその有力候補と考えられる。なお、「かなばち」周辺では寺泊の漁業関係者のほか間瀬の漁業関係者も操業をしており、本書で新潟地域掲載として紹介するものの中には、「かなばち」周辺で引き揚げられた資料も含まれている可能性がある。

「かなばち」を含めた周辺海域の潮は、常に南から北へ流れしており、海底の陶磁器も潮に押されて、少しずつ北に動いているのではないかと語る漁業関係者もいる。また、引き揚げには至らなくとも、日々の操業で土器が網に引っ掛かり、海底を移動していることは十分考えられるという。これらの証言を総合すると、土器は当初は特定の場所にかたまって沈んでいたが、諸々の影響を受けて現在は一定の範囲に拡散することが予想される。さらに、今日知られている海揚がり品の多くは完形品であるが、過去の操業では陶磁器の破片が大量に網にかかったこともあったという。破片は漁の邪魔になるため、その場で捨ててくるとのことであった。海揚がり品に占める完形率の高さは、船上での選別が作用した部分が大きいと考えられ、図版12-25の口縁を大きく欠いた珠洲焼片口鉢などは、海底での土器の実態を示す好資料といえよう。

(加藤由美子)

2) 出雲崎沖

本稿でいう出雲崎沖とは、三島郡出雲崎町の沖合い5～10km、水深80～200m前後の海域を指す（第10図）。このうち水深180m以上の海域は「タラバ」と呼ばれるが、主に土器が引き揚げられるのは、これより浅い海域で、引き揚げられた土器の内外面には貝類が多く付着する。出雲崎町にはかつて42艘ほどのタラバ船があり、土器類も度々引き揚げられていたが、多くの漁業関係者は価値が無いと考え、割つて海に捨てていたという。

出雲崎地域における海揚がり品の研究は、長岡地域の研究史と共通する部分が多い。1957年（昭和32）に寺村光晴が『若木考古』で紹介した横版〔寺村1957〕は、出雲崎沖から引き揚げられたものであり、本稿図版16-40の個体である。新潟県教育委員会の文化総合調査報告『寺泊・出雲崎』における金子拓男と高橋陽子の報告は、当時把握しえた海揚がり品の情報の集大成であり〔新潟県教育委員会1977〕、現在は確認できない資料も多く含まれている。1988年（昭和63）には『出雲崎町史』通史編上巻（以下、『出雲崎町史』とする。）が刊行され、戸根与八郎により新資料を含めて11点の海揚がり品が報告された〔戸根1993〕。また、『和島村史』資料編I（以下、『和島村史』とする。）において、戸根による出雲崎沖引き揚げ資料の報告がある〔戸根1996〕。2007年（平成19）には、春日真実が県下の海揚がり須恵器の器種・帰属時期・胎土を検討した〔春日2007〕。以下の資料各節では、『出雲崎町史』及び『和島村史』掲載資料について、当時の図版番号も合わせて記載する。

出雲崎沖周辺では、2007年（平成19）7月の新潟県中越沖地震直後から大量の古木が漁網にかかるようになり、深刻な漁業被害が出た。古木は主に縄文時代中期から後期のものと判明し、「縄文古木」と名付けられた。地震の揺れによる液状化現象により、水深70～100mの海底で、泥に沈んでいた古木が表面に浮き上がったと考えられる。漁業組合挙げての回収作業が行われ、古木に混じって数点の土器類も引き揚げられたという。

（小林ひろ子）

B 寺泊沖タラバ

1) 弥生土器（図版8-1）

1点のみ確認できた。径3.1cmの小さな底部を持つ甕の胴部破片で、最大径（19cm）を胴部の半ばに持つ。内外面とも縦から斜め方向にかけて密なハケ調整がなされており、内面上半では横ハケの後、不完全ながら横ナデを行っている。また、胴部外面上半には長軸0.9cm程の刺突文が巡る。頭部はわずかに残存、横ナデを確認できる。口縁部が欠損しており判然としないが、有段口縁を持つ北陸南西部系の甕で2期〔滝沢2005〕を中心とした時期が考えられる。内外面ともに、貝類の付着はほぼ認められない。

2) 須恵器（図版8-2～4）

2は『寺泊町史』第8図23で残存高24.5cmを測る横版である。口縁部が欠損しており、セメントによる補修が行われている。胴部は、閉塞部側の側面が大きく歪み、内外面ともナデ調整が行われており、叩き目はほとんど確認できない。色調は暗灰色を呈し硬質に焼結まる。胎土は灰白色の細砂を多く含み粗い。県内では阿賀北産の胎土に類する。器形から、小泊産ではないと考えられている〔春日2007〕。貝類の付着は認められず、引き揚げ経緯も定かではない。3・4は共に小泊産と考えられる甕である。3は『寺泊町史』第8図21で、口径22.4cm・器高48.9cm、4は『寺泊町史』第8図22で、口径27.2cm・

器高 60.4cm である。中型の 3 は直立する口縁部を持ち、口縁端部は外側に引き出される。胸部は倒卵形で、底部は丸底である。外面は格子目状、内面は同心円状で胸部下半に平行の叩き目が認められる。箱書きに、「昭和九年一月漁船越丸寺泊沖合百四十尋の海底より曳揚たり」と記される。外面全体に小型の貝類、頭部から肩にかけてゴカイ類の付着が認められる。4 は大型で、3 とは異なり胸部は球胴に近いが、口縁の成形、叩き目の構成に共通性が見られる。「大正十五年十一月漁船越丸寺泊沖合約百五十尋の海底より曳揚たり」との箱書きが残る。生物付着痕跡は頭部にわずかに認められるのみである。（竹部佑介）

3) 珠洲焼（図版 8-5～図版 15-37）

壺・壺（叩き）・四耳壺・小壺・小型鉢・片口鉢の 32 個体が確認できた。器種内訳では片口鉢が 21 個体と多く、全体の 65% を占める。これら珠洲焼の時期は、吉岡編年〔吉岡 1994〕II・III 期を中心 I～IV 期にわたる。

中壺（図版 8-5・図版 9-6）5 は『寺泊町史』第 6 図-9、口径 35.5cm・底径 16.4cm・器高 50.2cm である。口縁は「く」字状に外反した後に下方に重れ、端部を丸く收める。頭部内面に強いロクロナデによる稜線が巡る。胸部は倒卵形で、底部は平底である。胸部外面は左上りの平行叩きを施し、中程に成形時の接合痕が残り、内面は円形の當て具痕が認められる。外面共に貝類が付着し、引き揚げ時期は定かでないが、聞き取りにより戦前に遡ると考えられる。吉岡編年 III 期に比定できる。6 は口径 37.8cm・底径 16.8cm・器高 44.6cm を測る。口縁は「コ」字状に外反し、先端を下方に重らして端部を丸く收める。胸部がやや丸みを帯び、最大径を胸部上半に持ち、底部は平底で砂目が残る。胸部外面は左上りの平行叩きで、下段で水平叩きと左上りの叩きが交差する。内面には叩きに伴う円形の當て具痕が認められる。肩部に「○」に「大」字を伴う押印があり、外面に貝類が付着する。箱書きに、「明治廿九年二月廿七日三島郡寺泊町漁夫〇〇海中より引揚」とある。『県報告』に掲載され、『寺泊町史』編さん時点に所在不明となっていた個体である。時期は吉岡編年 II 期と考えられる。

叩き壺（図版 9-7～図版 10-12）7～10 は中壺、11 は小壺に入れてもよく、12 は大壺である。7 は『寺泊町史』第 6 図-7、口径 18.5cm・底径 11.5cm・器高 34.5cm である。口縁は「く」字状に直線的に開き、端部を下方へ折り曲げる。肩部はナデ肩で、外面は綾杉状の叩き、内面は當て具痕が並ぶ。肩部に縦横 4 条のヘラ描きが施され、底部は静止糸切りである。胸部外面には油状の染みが残り、口縁の一部はセメントで補修が行われている。外面に貝類の付着が認められ、箱書きに「大正八年漁船日丸寺泊沖百三十尋ノ海底より曳揚たり」とある。吉岡編年 III 期に比定される。8 は『寺泊町史』第 5 図-3、口径 18.4cm・底径 12.7cm・器高 37.4cm を測る。口縁は「く」字状に開き、口縁端部に面を持つ。胸部はやや丸みを帯びた倒卵形である。胸部外面は綾杉状の叩き、内面は円形の當て具痕が並ぶ。肩部の肩に「○」印の押印がある。底部は静止糸切りである。口縁の一部はセメントによる補修が行われている。引き揚げの経緯は不明である。時期は吉岡編年 IV 期と考えられる。9 は『寺泊町史』第 6 図-8、口径 19.8cm・底径 12.3cm・器高 36.2cm である。胸部は倒卵形を呈し、底部は上げ底気味の平底で静止糸切り後にナデ調整が行われる。外面は綾杉状の叩き、内面は円形の當て具痕が並ぶ。肩部にカマボコ形の押印があり、反対側の肩部には「|」のヘラ描きが認められる。肩部付近に窓体の破片が数点溶着する。貝類の付着はわずかで、引き揚げ時期や経緯は不明である。吉岡編年 III 期と考えられる。10 は、口径 13.3cm・底径 11.8cm・器高 32.4cm を測る。口縁が「く」字状に外方に伸び、端部を下方につまみ出し面を作る。器高に比して胸部最大径が小さく頭部が長い。胸部外面は綾杉状の叩きで、内面に當て具痕が並ぶ。肩部

に「=」のヘラ描きがみられる。底部は糸切り痕が認められず、板状工具による調整痕が残る。ハケ状工具による調整痕が残る。口縁部は一部セメントで補修されている。内面に小さな貝類が付着する。1991年(平成3)12月に寺泊タラバ沖の「かなばち」地点から引き揚げられた新資料である。時期は吉岡編年Ⅲ期に比定される。11は『寺泊町史』第5図-5、口径12.3cm・底径9.8cm・器高28.0cmである。口縁は「く」字状に外反気味に開き、端部に面を持つ。胴部は丸みを帯び、肩の張りは緩やかである。外面は綾杉状叩きで、内面は当て具痕、肩部外面に「3ツ切れた〇」印の押印がある。底部は静止糸切りの後にヘラナデが行われている。明治・大正期に引き揚げられたと伝わり、当初は押印の部分に小さな貝が付着していたという。時期は吉岡編年Ⅳ期に比定される。12は『寺泊町史』第5図-6、口径20.7cm・底径12.3cm・器高44.3cmである。口縁は外反気味に「く」字状に開き、端部を小さく外方へつまみ出す。器形は肩の張る倒卵形で、外面は肩部から頸部にかけて格子状叩き、胴部は綾杉状叩きで、底部付近にロクロナデを施す。内面は当て具痕が並ぶ。肩部に「二」のヘラ描きがある。底部は静止糸切り後、ナデ調整を行う。1904～1906年(明治37～39)頃に寺泊野積沖35km地点で引き揚げられ、引き揚げ後は魚網に塗る柿渋の貯蔵器として使用され、柿渋が付着する。吉岡編年Ⅱ期に比定される。

四耳壺(図版10-13) 13は『寺泊町史』第7図-13、口径10.7cm・底径8.7cm・器高24.2cmである。口縁は「コ」字状に開き、端部に面を持つ。耳はいずれも紐造りで、1耳を欠損する。肩部から胴部にかけて2段の櫛目波状文が横位に巡る。波状文は5目一単位で、上段は短い波長、下段は長い波長で描かれる。胴部はロクロナデ、下部に一部ヘラケズリが施される。底部は回転糸切りである。引き揚げの経緯は不明だが、貝類の付着が見られないことから、引き揚げ場所は寺泊タラバ沖と考えるのが自然である。吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期と考えられる。

小壺(図版10-14・15) 14は『寺泊町史』第7図-10、口径9.6cm・底径7.2cm・器高19.8cmである。口縁は「く」字状に外反気味に開き、端部で面を持つ。肩部から胴部上半に13～16目一単位の櫛描き波状文が3段施される。外面調整はロクロナデで、底部付近にナデに伴う2条の沈線が巡る。底部は静止糸切りである。引き揚げ後に花器として使用するため、内部に銅製の筒が埋め込まれている。揚陸経緯は不明であるが、開き取りによると戦前に引き揚げられた可能性が高いという。吉岡編年Ⅱ期と考えられる。15は口径9.4cm・底径7.0cm・器高18.2cmである。口縁は「く」字状に開き、端部に面を持つ。肩部が強く張り、胴部は直線的で丸みを持たない。頸部から胴部上半にかけ、櫛目波状文が3段横位に巡る。波状文は上2段が8～13目一単位、下1段は6目一単位である。底部は静止糸切りである。2009年(平成21)に寺泊沖タラバの「かなばち」地点から引き揚げられた新資料で、時期は吉岡編年Ⅱ期と考えられる。

(加藤由美子)

片口鉢 寺泊沖海揚がり陶磁器の中で最も多く、小型鉢2点を含め計21点を確認した。法量・器形・御目の有無から、口内径20cm以下の小型鉢と口内径28cm以上の大型鉢に大別でき、大型が多い傾向にある。本来、小型鉢も定量存在したと考えられるが、揚陸時に選択的意図が働いた可能性がある。

小型鉢(図版10-16・17) 16は口径19.5cm・底径10.9cm・器高9.0cmで、今回の調査で新たに所在が明らかとなった。口縁は丸みを帯び、指1本分程度の片口が作出される。一部金縫ぎがなされているが、後世のものであろう。胴部は僅かに内湾する。底部は平底で、静止糸切り痕が残る。内外面とも無文である。現所有者宅の蔵に収納されていたため由来は不明で、揚陸の経緯は定かでない。吉岡編年Ⅱ期頃の所産と考えられる。17は口径17.6cm・底径9.3cm・器高8.2cmで、16同様、新たに所在が明らかとなつた資料である。口縁は外削ぎ状で、胴部は直線的に開く。底部は平底で、静止糸切り後ヘラケズリ調整が

なされている。内外面とも無文である。2006年(平成18)5月25日に寺泊沖の「かなばち」付近で引き揚げられた。揚陸時期は異なるが、壱(10)や後述する大型鉢(19~29・36)も近接した地点で引き揚げられたという。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。

大型鉢(図版11-19~図版15-37) 19から22までは壱(10)・小型鉢(17)と共に同一の漁業関係者によって複数回に渡って引き揚げられた。また、36についても同一の漁業関係者が引き揚げて人に譲ったという。19は口径31.5cm・底径12.3cm・器高11.8cmで、今回の調査で新たに所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状で、成形時の強いナデにより内面端部がわずかに突出する。底部は平底、静止糸切り痕が残る。卸目は9目一単位で幅2.5cm、入り組み技法によって10条施文される。また、卸目の間、片口付近には「×」字のヘラ記号が認められる。1995年(平成7)4月14日に長岡市寺泊野積の大河津分水路河口沖合、水深160尋(約240m)の地点で引き揚げられた。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。20は口径32.3cm・底径11.2cm・器高12.7cmで、今回の調査で新たに所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状で、胸部は直線的に開く。底部は平底で、静止糸切り痕が残る。卸目は12目一単位で幅2.7cm、入り組み技法によって20条施文される。また、片口の対面側において卸目の上端付近に、卸目と同じ施文具を用いて横位に短く櫛歯の痕跡が残る。所有者によって「平成6年3月15日」と海揚がりした日付が書かれたメモ書きが貼り付けられている。海揚がり地点は18・19等と近接する。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。21は口径30.7cm・底径11.3cm・器高13.5cmで、今回の調査で新たに所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状で、体部は僅かに内湾する。底部は平底で静止糸切り痕が残る。卸目は12目一単位で幅3.2cm、入り組み技法によって8条施文される。卸日の上端付近において、卸目と同じ施文具を用いた横位の櫛歯痕が認められる。他の個体と異なり、摩耗のためかやや軟質で色調も明るい。また内面には、引き揚げ後に白ペンキにて揚陸の経緯が「平成六年三月十四日 鮎場 百八十ヒロ 川口沖 網に入る」と記載されており、18・19等と程近い大河津分水路河口の沖合から海揚がりしたことが分かる。水深およそ270mの地点であろう。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。22は口径32.8cm・底径12.3cm・器高12.9cmで、今回の調査で新たに所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状、胸部は大きく歪む。底部は平底でナデ調整が行われており、糸切り痕は残らない。卸目は20目一単位で幅2.7cm、入り組み技法によって13条施文される。通常は内面の底部中央を通ることで対角線方向に2条の卸目を施文するが、13条目だけは内面の中央を跨がない。同様の卸目を最後に1条追加する資料には25・26・27・35がある。「平成11年3月13日」と引き揚げ日が付されている。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。

23から29の7点は、先述の10・17~22の所有者の親類にあたる漁業関係者が所有しており、やはり近接した場所から引き揚げられている。23は口径31.9cm・底径14.0cm・器高11.5cmを測る。2001年(平成13)2月に引き揚げられた。口縁は外削ぎ状で一部欠損、胸部はやや丸みを帯びて立ち上がる。底部は平底で静止糸切り痕が残る。卸目は10目一単位で幅2.6cm、入り組み技法によって8条施文される。また、片口傍には内面に「×」字のヘラ記号が認められる。色調は暗灰色を呈する。外面に僅に生物付着痕跡が認められる。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。24は口径31.9cm・底径11.7cm・器高12.3cmで、今回の調査で所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状、胸部は僅かに内湾する。内面はクロコ成形時の凹凸が顕著に認められる。底部は平底で静止糸切り痕が残る他、底部中央外側を横断する大きな亀裂が存在し、周囲には刺突列が認められる。静止糸切りを行ってから焼成までの間のものであつて、乾燥時のひび割れに対する補修痕跡と考えられる。卸目は10目一単位で幅2.3cm、入り組み技法により8条施文される。片口傍の内面には「×」字のヘラ記号が認められる。やや軟質で、色調は灰白色

を呈する。平成に入ってから引き揚げられた。吉岡編年II期の所産と考えられる。25は大きく破損した個体で、復元口径は30.1cm・底径は10.7cm・器高は12.3cmを測る。今回の調査で新たに所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状、胴部は直線的に開く。底部は平底で静止糸切り痕が残る。卸目は12目一単位で幅3.0cm、入り組み技法によって9条施文される。22・26・27・35同様、卸目を最後に1条追加される。胎土中には径6mm大の白色礫が混ざる。吉岡編年II期の所産か。26は口径33.1cm・底径12.0cm・器高13.0cmで、今回の調査で新たに所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状で一部欠損する。胴部は僅かに内湾する。底部は平底で切離し後にヘラナデ調整される。卸目は13目一単位で幅3.4cm、入り組み技法によって9条施文される。22・25で認められたように、卸目が最後に1条追加される。色調はやや明るい灰色を呈する。平成に入って引き揚げられた。吉岡編年II期の所産と考えられる。27は口径30.2cm・底径12.0cm・器高11.6cmで、今回の調査で新たに所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状で、胴部は内湾する。底部は平底で静止糸切り痕が残る。卸目は17目一単位で幅2.9cm、入り組み技法によって16条施文される。底部中央を跨がない短い卸目が最後に施文される。色調は淡浅黄色を呈し他と大きく異なるが、内外面とも器面より塩の噴出が頗著であり、酸化付着物による所も大きい。吉岡編年のII期からIII期にかけての所産と考えられる。28は口径30.6cm・底径13.9cm・器高は12.5cmで、今回の調査で所在が明らかとなった。口縁は外削ぎ状で、胴部は僅かに内湾する。底部は平底で、静止糸切り後粗いヘラナデ調整がされる。卸目は20～23目一単位で幅2.9cm、16条が入り組み技法によって施文される。片口右手奥の内面において、卸目上端付近では短い横位の卸し目が施文される。色調は暗灰色を呈する。外面に広く生物付着痕跡が認められる。吉岡編年のII期からIII期にかけての所産と考えられる。29は口径30.3cm・底径10.8cm・器高13.0cmで、今回の調査で所在が明らかとなった。口縁端部は強いナデによりやや外側に引き出される。胴部は僅かに内湾する。底部は平底で、静止糸切り痕が残る。卸目は9目一単位で幅2.6cm、入り組み技法により8条が施文される。卸目上端と口縁の間に左右に長い「×」字のヘラ記号が認められる。吉岡編年II期の所産と考えられる。

30～35・37もやはり近接した海域から引き揚げられたと考えられるが、31・37が同一所有者である以外は皆、所有者が異なり、また揚陸経緯も今となっては不明である資料が多い。30は『寺泊町史』第7図-20、口径31.2cm・底径11.3cm・器高11.0cmを測る。口縁端部は強いナデによってやや外側に引き出される。胴部は僅かに内湾する。底部は平底で静止糸切り後ナデ調整される。内面はロクロ成形時の凹凸が頗著に認められる。卸目は10目一単位で幅2.4cm、入り組み技法により8条施文される。また、卸目間に「×」字のヘラ記号が認められる。現所有者の曾祖父が漁の際、タラ場より引き揚げたと伝わる。吉岡編年II期の所産と考えられる。31は『寺泊町史』第7図-16、口径27.8cm・底径10.8cm・器高11.7cmを測る。口縁は外削ぎ状、胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は平底で静止糸切り痕が残る。卸目は9目一単位で幅2.5cm、入り組み技法により8条施文される。また、口縁部内面付近の高い位置に「×」字のヘラ記号が認められる。胎土は白色礫が混ざる。揚陸の経緯は不明である。吉岡編年II期からIII期の所産と考えられる。32は『寺泊町史』第7図-15、口径28.6cm・底径10.8cm・器高12.7cmを測る。口縁は外削ぎ状、胴部は直線的に立ち上がる。底部は平底で静止糸切り後外周をナデ調整している。卸目は10目一単位で幅2.6cm、入り組み技法により8条施文される。また、卸目の間に「×」字のヘラ記号が認められる。胎土には白色礫が混ざる。揚陸の経緯は不明である。吉岡編年II期からIII期の所産と考えられる。33は『出雲崎町史』図2-7、口径31.2cm・底径11.5cm・器高は12.5cmを測る。口縁は外削ぎ状、体部は直線的に開く。底部は平底で静止糸切り痕が残る。卸目は10目一単位で幅2.5cm、

入り組み技法により 8 条が施文される。また口縁部内面の高い位置に「×」字のヘラ記号が認められる。胎土には白色礫が混ざる。1980 年（昭和 55）12 月に大河津分水路沖で引き揚げられたと伝わる。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。34 は『寺泊町史』編纂時に所在不明となっていたが今回の調査で所在を再確認することができた。口径 33.0cm・底径 12.5cm・器高 15.3cm を測る。口縁は外削ぎ状、胴部は立ち上がりが僅かに内湾する。底部は平底で静止糸切りの後一部をナデ調整する。卸目は 13 目一単位で幅 3.4cm、入り組み技法により 8 条が施文される。また、卸目の間に竹管状工具による倒立したカマボコ形の押印が認められる。胎土の色調は灰白色を呈し、酸化付着物により全体が褐色を帯びる。6 の壺同様、「明治廿九年二月廿七日寺泊町漁夫〇〇海中ヨリ引揚」との箱書きがある。6 と同時に引き揚げられた可能性が考えられる。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。35 は『寺泊町史』第 7 図-19、口径 31.5cm・底径 10.2cm・器高は 12.4cm を測る。口縁は外削ぎ状、胴部は直線的に広がる。底部は平底で静止糸切り後外周がナデ調整される。卸目は 12 目一単位で幅 3.2cm、入り組み技法によって 9 条施文される。最後に卸目が 1 条追加される点で 22 や 25 等と類似する。酸化付着物に由来するためか、色調は黄灰色を呈する。また、外面上半には生物付着痕跡が認められる。揚陸の経緯は不明である。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。36 は片口の一部が残存する他、口縁部が大きく欠損する。復元口径 31.5cm・底径 10.8cm・器高 12.3cm を測る。今回の調査で新たに所在を確認した。口縁は外削ぎ状である。胴部は僅かに内湾し、内面はロクロ成形時の凹凸が頗著に認められる。底部は平底で静止糸切り後外周がナデ調整される。卸目は 11 目一単位で幅 2.3cm、入り組み技法によって 10 条が施文される。卸目上端付近に、卸目と同じ原体を用いた横位の櫛歯痕が認められる。胎土には塵を含む。19 から 22 と同様の地点から引き揚げられた。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。37 は『寺泊町史』第 7 図-18、口径 30.0cm・底径 12.0cm・器高 13.1cm である。口縁は外削ぎ状、胴部は直線的に広がる。底部は平底で静止糸切り後ナデ調整される。卸目は 9 目一単位で幅 2.4cm、入り組み技法によって 14 条が施文される。海揚がりの経緯は不明である。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられる。

(竹部佑介)

4) その他の陶磁器（図版 15-38・39）

青磁（38） 完形の盤である。『寺泊町史』第 5 図-2、口径は 24.3cm、高台径は 9.8cm、器高は歪みがあるため 5.2 ~ 6.5cm である。口縁は直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁内面は強いロクロナデによる短い段が作出される。高台は断面三角形で高台内は露胎である。縁文様は不明瞭ではあるが蓮弁文が認められる。細い櫛目の沈線を放射状から螺旋状に施文後、やや太目のヘラ状工具で花弁単位が描かれる。見込みにも文様が描かれているが釉厚にむらがあるため詳細は不明瞭である。外面は無文で、内外面とも焼成時にできた気泡の破裂痕がある。釉調はにぶい淡緑色で、厚く施釉される。中国の龍泉窯系で時期は 15 世紀中葉から後半の所産と考えられる。

唐津焼（39） ハンズーガメである。『寺泊町史』第 9 図-26、口径 54.0cm・底径 28.3cm・器高 79.5cm で、胴部最大径が口径をわずかに上回る。肩が張らず頸部から口縁部まで外側にわずかに曲がりながら立ち上がる。口縁部は内傾し釉剥離される。端部は内外に肥厚する。頸部以下全体に鉄釉が施される。体部外面には 3 段の平行沈線が巡る。内面には一部格子目叩き痕が残る。18 世紀後半から 19 世紀にかけての所産と考えられる。

(安藤正美)

5) 所在不明資料（図版 10-18、図版 17-47～54）

既に報告済みの資料のうち、今回の調査で所在が確認できなかったものをここにまとめる。

古式土師器（47）『寺泊町史』第5図-1、現存高 14.5cm。球胴の壺で最大径が体部中央や下にある。底部は丸底で安定しない。また、底部付近は直線的な立ち上がりとなる。頸部まで残存、口縁部は欠損するが、おそらくは直線的に開く長い口縁を持つ。古墳時代前期前半の所産と考えられる。（竹部佑介）

珠洲焼（18・48～52）18は口径 21.1cm・底径 9.2cm・器高 8.1cm を測る、やや小型の片口鉢で完形である。1994 年（平成 5）に高橋保雄によって資料紹介がなされた〔高橋 1994〕。器形は直線的に開き、口縁端部は上方へわずかに引き出される。卸目はない。底部には静止糸切り痕が認められる。紹介によると、胎土は砂の混入が多く器面はざらざらしている。また、海綿骨針も多く認められている。色調は底部付近が灰色、それ以外は暗灰色を呈し、焼成は堅緻であるという。1980 年（昭和 55）4 月に大河津分水路河口沖、水深約 200 ～ 300m 地点（通称タラ場口）より引き揚げられた。器形から吉岡編年 II 期の所産と考えられる。48 は肩部に波状文が巡る四耳壺で 2 耳を欠く。『寺泊町史』第 7 図-11、口径 11.4cm・底径 9.0cm・器高 24.9cm である。口縁は「く」字状に外反し、端部に凹んだ面を作る。底部は回転糸切りである。吉岡編年 I 期と考えられる。49 は『寺泊町史』第 5 図-4 の卯き中壺で、口径 16.2cm・底径 9.2cm・器高 33.1cm である。肩部が丸く張る倒卵形を呈し、底部は静止糸切りである。口縁端部及び頸部に波状文を巡らせ、胴部外面に綾杉状の叩きを施し、内面に当て具痕が並ぶ。肩外面に印花文の押印がある。吉岡編年 III ～ IV 期と考えられる。50 は小型鉢で『寺泊町史』第 7 図-14、口径 18.6cm・底径 9.8cm・器高 7.4cm を測る。口縁は外削ぎ状でやや丸みを帯びる。胴部は僅かに内湾しつつ広がる。底部は平底で静止糸切り痕が残る。吉岡編年 II 期と考えられる。51 は小型鉢で『出雲崎町史』図 2-6、口径 20.0cm・底径 9.3cm・器高 7.0cm を測る。口縁は丸みを帯び、胴部は僅かに内湾する。底部は平底で静止糸切りである。内外面に貝の付着が認められた。1968 年（昭和 43）頃大河津分水路沖にて引き揚げられた。吉岡編年 II 期の所産か。52 は片口鉢で『寺泊町史』第 7 図-17、口径 30.0cm・底径 11.3cm・器高 12.2cm を測る。報文によれば、口縁部は肥厚して端面の断面が鋭角的になる点で 35 との類似性が指摘される。また、直線的に開く胴部下半は部分的に欠損する。底部は静止糸切り痕が残る。卸目は 15 目一单位で幅 2.4cm、入り組み技法により 8 条施文される。吉岡編年 II 期の所産と考えられる。

（竹部佑介・加藤由美子）

唐津焼（53）ハンズーガメであろう。『寺泊町史』第 8 図-25、口径 17.8cm・底径 13.8cm・器高 26.5cm を測る、胴部最大径が口径を上回る。やや肩が張り、頸部は短く直線的に立ち上がり、口縁部は水平で端部は外側に肥厚する。口縁部は釉剥ぎされる。頸部以下全体に鉄軸が施される。体部外面上段には比較的狭い間隔で 4 段の平行沈線が巡り、中段にも太目の沈線を巡らす。18 世紀後半から 19 世紀にかけての所産と思われる。

備前焼（54）布袋德利で、『出雲崎町史』図 2-11、器高 17.5cm・底径 7.3cm を測る。胴部にはロクロによる成形痕が顕著に残り、肩は比較的張りが弱く、頸部から口縁部は欠損している。胴部はおそらく 3 節所に押圧を加え、そのうちの 1 か所に布袋の人形を貼付したものである。町史では、大河津分水路沖にて引き揚げられたとされる。江戸や大阪の消費地遺跡で 19 世紀前半から後半の遺物と共に伴することから、これも同時期のものと考えられる。

（安藤正美）

C 出雲崎沖

1) 須恵器 (図版 16-40・41)

横瓶が 2 点ある。40 は、『和島村史』図 92-14、口径 9.5cm・器高 21.0cm である。口縁端部に面を持ち、外側はわずかに引き出される。胴部は張っており、左右対称ではない。外面の調整は平行の叩き目で、ナデによって消されている。内面はナデ調整で同心円状の当て具痕が残る。口縁部の内面と底部付近の外側にはゴカイ類の貝が多数付着している。詳しい経緯は不明であるが、出雲崎町の漁業関係者によって引き揚げられた。佐渡の小泊産である可能性が高い。41 は、口径 11.7cm・器高 27.5cm である。40 と同様に口縁端部に面を持ち、外側はつまみ出される。胴部は左右非対称で、40 に比べて丸みを帯びている。外面の調整は平行叩き目で、内面は同心円状の当て具痕が残る。外面には一部力キ目がみられる。口縁内面と外部全面に貝類が多く付着している。2012 年(平成 24)12 月、ごち網漁に伴い、水深 130 尋の地点より引き揚げられた。胴部の特徴から奈良時代後半のものと考えられる。

2) 珠洲焼 (図版 16-42 ~ 44)

出雲崎沖揚陸とされるものは 3 点である。

42 は大型の片口鉢、『出雲崎町史』図 2-8、口径 32.6cm・底径 11.5cm・器高 13.0cm である。口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外削ぎ状を呈する。叩目は直線的に施入され、10 目一単位である。また、口縁から 4.5cm 下の叩目と叩目の間に、竹管によるいびつな円形のヘラ記号がある。底部は静止糸切りである。全面にナデ調整が加えられる。内面には貝が付着しており、使用の痕跡は認められない。吉岡編年Ⅱ期からⅢ期の資料と考えられる。

43 は小型鉢、『出雲崎町史』図 2-5、口径 18.7cm・底径 11.0cm・器高 7.4cm である。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外削ぎ状を呈し、中央部が若干凹んでいる。胴部は直線的に開く。外面には粘土巻き上げ痕が一部にみられる。底部はヘラ切りとみられる。内面には貝類が付着している。使用の痕跡は認められない。吉岡編年Ⅱ期からⅢ期の資料と考えられる。

44 は叩き中壺、口径 17.0cm・底径 13.0cm・器高 36.5cm である。口縁部は外反し、端部は面を持ち引き出される。肩は張らず緩やかで、外面には綾杉状に叩き目が施される。口縁から胴部上半にかけて貝が多数付着している。底部はナデ調整が施される。2012 年(平成 24)7 月 20 日頃、地元の漁業関係者によって椎谷沖と出雲崎沖の間において、水深 300m 程度の地点から引き揚げられた。2 点あったというが、もう 1 点は蛸が棲み着いていたため海に戻したという。吉岡編年Ⅱ期の資料と考えられる。

(小林ひろ子)

3) その他の陶磁器 (図版 17-45・46)

越前焼 (45) 撥鉢で、『出雲崎町史』図 2-9、口径 33.0cm・底径 14.5cm・器高 10.4cm を測る。口縁は平坦で断面三角形を呈し、わずかに内傾する。胴部は直線的に立ち上がり、胴部外面の成形痕は目立たない。底部は平底である。内面口縁下に沈線が巡り、叩目は 10 目一単位で密に施される。形状および口縁形態および口縁下の沈線から 17 世紀第 1 四半期が下限と考えられるが、叩目が 10 目一単位であることから、さらに年代が下る要素もある。反面、見込みには叩目は施さないことから年代の上限が 16 世紀後半までおよぶ可能性もうかがわれる。

伊万里焼（46）型打ち成形による輪花の胎皿で、口径 14.7cm・底径 8.8cm・器高 4.7cm を測る。口縁文様にはみじん唐草、見込みには形骸化した松竹梅文を施す。外面は簡略化された如意頭唐草文、高台回りには二重圓線を巡らす。高台は蛇の目高台で高台内に「成化年製」銘がある。全体に貝須の発色が藍色であることなどから 18 世紀末から 19 世紀中頃の所産と思われる。

（安藤正美）

4) 所在不明資料（図版 17-55 ~ 58）

出雲崎沖から揚陸され、『出雲崎町史』に掲載されているが、今回の調査で所在が不明であった資料である。

須恵器（55 ~ 57）55 は横瓶で、『出雲崎町史』図 2-4、口径 11.0cm・器高 25.2cm を測る。口縁は外反し、端面はナデにより外側に引き出され、水平な面を持つ。胴部は俵形である。外面は格子目叩きが認められる。町史編纂時に、既に所在不明であった。56 は長頸瓶で、『出雲崎町史』図 2-2、口径 16.8cm・底径 11.6cm・器高 28.8cm を測り、最大径を体部上方より 1/3 程の所に持つ。口縁端部は上方に引き出され有段状を呈し、頸部は大きく外反する。胴部は肩が張らず、底部は高台の端面が内傾する。肩および高台部に自然釉が認められる。佐渡市小泊窯跡の製品と考えられる。57 は甌で、『出雲崎町史』図 2-3、口径 15.8cm・器高 32.0cm を測る。胴部は倒卵形、底部は丸底である。外面は平行叩きで、胴部下半の一部に格子状叩き目がみられる。内面の叩き目は平行叩きと菊花状叩きである。器面には油状の染みと貝類の付着が確認できる。1927 年（昭和 2）12 月に引き揚げられた。

越前焼（58）壺で、『出雲崎町史』図 2-10、口径 14.5cm・底径 18.0cm・器高 45.3cm を測る。胴部は肩が大きく張り、胴部上半にヘラ描きが認められる。底部は平底でナデ調整される。底面には陶片が付着する。内外面に貝が付着する。海揚がりの経緯は不明である。15 世紀後半から 16 世紀前半の所産であろう。

（竹部佑介）

D その他の海揚がり資料（図版 18-59 ~ 64）

59 はセメント製の蛸壺、『寺泊町史』第 8 図-24、口径 13.4cm・底径 11.7cm・器高 33.2cm である。長胴で口縁が直立し、内外面に貝類がびっしりと付着する。戦前に引き揚げられ、地点や経緯は不明である。60 は、大字寺泊の總鎮守・白山姫神社の境内に座する二面神社の御神体である。漁の守り神として漁業関係者からの篤い信仰を集め。御神体は西洋船の船飾りで、1391 年（明徳 2）地元の平三郎が寺泊の海上に漂っていたのを拾って祀り、その後神社に遷したという。縦 91.5cm・横 41cm・厚さ 7.0cm の木の板の両面に漁網を持つ人物が透かし彫りで表わされ、神社では男女両面の像として解釈される。年 2 回、春と秋の祭りで表と裏をひっくり返す神事が行われる。61 は木造阿弥陀如来立像で、寺泊沖で難破した北前船の積荷と伝えられる。鎌倉時代後期の作と考えられ、像高 38.9cm を測る。62 は石製の地蔵尊像である。明治生まれで漁業関係者であった家人がイワシ漁の際、弥彦沖で引き揚げたという。何度も振り落しても、たびたび網に掛かるので家に持ち帰り祀ったところ、以後は豊漁続きだったという。幕末から明治期の作と考えられ、像高 35cm を測る。なお、弥彦沖とは弥彦山を指標とした呼称で、寺泊野積沖や新潟地域の間瀬沖とも重なる海域である。本資料は寺泊野積の漁業関係者により引き揚げられたことから、寺泊タラバの資料としてここに所収した。63 は、江戸から大正期に使用された和船の錨である。先端が 4 つに分かれた四爪錨で、フジツボなど貝類が表面を覆う。2007 年（平成 19）7 月の中越沖地震後に、出雲崎沖 4km の地点で引き揚げられた。長さ約 3m。64 は、江戸幕府の輸送船「順動丸」のシャ

フト 1 対である。シャフトとは船の外輪の車軸である。順動丸は、1862 年（文政 2）に江戸幕府がイギリスから 15 万ドルで購入した鉄製の外輪船で、將軍家茂や幕府要人の航行に活躍した。戊辰戦争下に会津藩に貸し出され、戦争物資を輸送していたところ、1868 年（慶応 4）5 月 25 日、碇泊していた寺泊沖で薩長両軍の戦艦の攻撃を受け、逃げ切れずに寺泊港内で自爆した。船体は翌年に解体・撤去されたが、シャフトはそのまま寺泊上町の港内に残された。左右 2 本で 1 対となり、1 本あたりの長さは約 4.3m・軸直徑約 30cm・重さ 4t と 4.5t である。

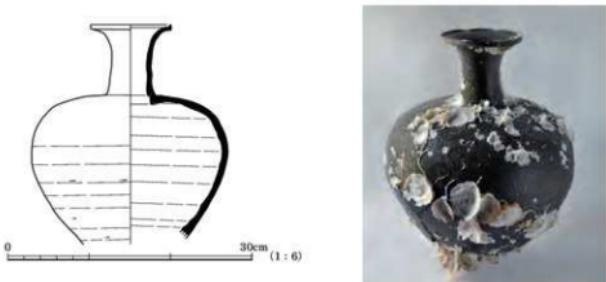
(加藤由美子)

E 小 結

長岡・出雲崎地域で引き揚げられた資料のうち、時期が最も古いのは、1896 年（明治 29）に遡る。1904～1906 年引き揚げと伝わる資料も 1 点確認でき、当地域における揚陸時期の上限は、明治 30 年前後と言える。土器や陶磁器の引き揚げは、当地の漁法とも深く関わっている。長岡（寺泊）地域に限ると、江戸時代以来、タラバでは網を使わない延繩漁が専ら行われてきた。しかし、明治時代後期にタラを含む回遊魚の不漁が続くようになり、その打開策としてイワシ漁で定置網が導入された。その後、大正期に発動機船による底引き網漁が始始され、海底を網で引く漁法が本格的に導入された。海揚がり品はこの時期以降に発見例が増えたと考えられる。1922 年（大正 11）に信濃川大河津分水路が通水し、大量の土砂が日本海沿岸に放出されるようになると、海岸部への土砂の堆積が急激に進む。寺泊沖タラバの「かなばち」地点は分水路河口の沖合に位置し、急激な土砂の堆積により、海底の地形にも変化が生じた可能性がある。その後、この海域での底引き網漁が禁止されたこともあり、昭和 30～60 年代は引き揚げ事例が少なくなっている。地元の漁業関係者は「土器が揚がる時は、たて統けに揚がる」と言い、近年では長岡・出雲崎両地域とも中越沖地震後が一つのピークだったという。

海揚がり品の帰属時期は、弥生時代後期から近世・近代までと幅広い。個体数では珠洲焼が多く、今回掲載した所在不明品を含む全資料 64 点中 41 点が珠洲焼である。弥生時代後期の甕は、県内の海揚がり品としては類例が少なく、弥生時代の日本海を介した交通・交易を示す貴重な資料である。出雲崎沖引き揚げ資料に、一定量の須恵器があることにも注目したい。佐渡の小泊産と判別できる個体がある一方、明らかに小泊とは違う特徴を持つものも存在する。小泊以外の产地を明らかにすることが今後の課題と言える。

(加藤由美子)



第 11 図 須恵器（出雲崎沖）

【註】

本稿脱稿後、出雲崎沖で新たな資料が引き揚げられたので、ここに紹介する。第11図は、2014年（平成26）2月に出雲崎沖で引き揚げられた須恵器の長頸瓶である。口径9.8cm・現存高27.0cmを測る。底部を欠損するが、元は高台が付いていたと考えられる。頸部は細く直線的に伸び、口縁部は外半し、端部を上方につまみ上げる。体部は肩が強く張り、下半をヘラ削りする。肩部外面には自然釉が認められる。9世紀前半の時期が比定される。引き揚げ場所は、タラバに近い水深150m前後の海域である。外面に貝類が多く付着していることから、元は浅い海域に沈んでいた土器が、何らかの原因で深い場所へ転がり、引き揚げられたと考えられる。

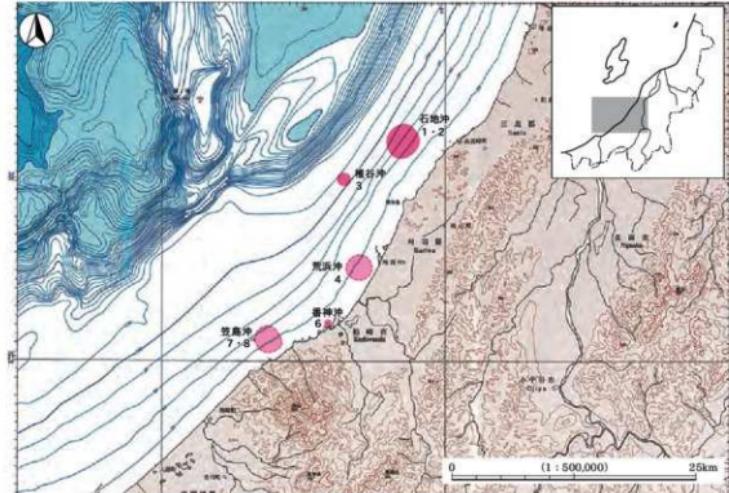
(加藤由美子)

4 柏崎地域の海揚がり品

A 概 要

柏崎地域の海岸は、旧刈羽郡西山町を含む現在の柏崎市域となっている。中越地方に属し、新潟県の中央部よりもや南西側に位置する。海岸線の総延長は約42kmで、北東は三島郡出雲崎、南西は上越市柿崎区に接する。

ここで報告する海揚がり品は8点である。地点による内訳は、石地沖で古式土師器・須恵器各1点、椎谷沖で須恵器1点、荒浜沖で須恵器1点、番神沖で石仏1点、笠島沖で錨2点、地点不明の珠洲焼1点である。このうち、椎谷沖・荒浜沖では「海底遺跡」として埋蔵文化財包蔵地が周知化されている。また、2006年（平成18）に柏崎市立博物館で特別展「諸モノがたり—漂着物からみた越後・佐渡—」が開催されており、漂着物のほかにも本報告書に掲載された海揚がり品の一部も紹介された〔柏崎市立博物館2006〕。



第12図 柏崎地域海揚がり地点

ただし、周辺の寺泊沖や名立沖に比べると、柏崎地域では海揚がり品の発見例は少ない。民俗学の調査[大竹 1990] や今回の聞き取りから、柏崎の漁法では全体的に底引き網をあまり用いてこなかったとみられるが、このことが海揚がり品の少なさに関係するものと考えられる。また、北東部の石地沖・椎谷沖では出雲崎の漁業関係者も活動しており、報告する資料のうち 3 点は出雲崎町内で保管されているものである。

なお、以下の資料のほかにも、海揚がり品と考えられる陶器が柏崎市内の個人宅で所蔵されていた。胴部外面に貝が付着した完形の甕である。しかし、所蔵者（家族）への聞き取りでは、これは購入品で、発見地は不明とのことであった。そして、現物は破損し、すでに処分されているとのことである。この陶器は、かつて中世の東播系とみられていたが、このたび福井工業高等専門学校の荻野繁春氏から写真をみていただいたところ、「全体の器形や外面のタタキ目には共通点があるが、口縁形態が異なることから、東播系としては違和感がある」との所見が得られた。

(伊藤啓雄)

B 石地沖

1) 古式土師器（図版 19-1）

1 は、口縁部を大きく欠損した甕である。残高 29.6cm・底径 9.3cm・胴部最大径は 31.6cm を測る。頸部内面は直立気味に立ち上がり、胴部との接合部分は滑らかで稜は弱い。最大径を胴部中央付近に持つ扁平な球脛を呈し、胴部最大径やや上部に径 1cm 程度の焼成後の穿孔が認められる。底部は中央に向かって凹むドーナツ状を呈する。胎土は、2~5mm 大の石英・長石・チャートといった砂粒を含み粗い。色調は灰黄褐色を呈す。調整は、胴部外面上半に左上がりのハケ、下半は継ハケが認められる。ハケの後ナデカミガキによって器面が整えられていたと考えられるが、磨滅が著しく不明である。内面は胴部上半がヘラナデ、下半に密な横ハケが認められる。外面全体に貝類・ゴカイ類が多数付着する。2013 年（平成 25）8 月 12 日に出雲崎町の漁業関係者によって、出雲崎沖と椎谷沖の間の海域で、ごち網漁の際に引き揚げられた。口縁形態が判然としないため、胴部のみでは帰属年代を断定できないが、胎土や胴部穿孔といった諸要素を鑑みて、古墳時代前期の所産である可能性が高い。

(竹部佑介)

2) 須恵器（図版 19-2）

2 は、内外面ともびっしりと貝類・ゴカイ類が付着した完形の甕である。器高 43.5cm・口径 20.5cm・胴部最大径は 36.2cm を測る。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁端部に四角く面を持つ。肩部に最大径を持ち、丸みを帯びた胴部で、底部は丸底である。胴部外表面は格子目タタキ調整の後、カキ目を施す。内面は平行當て具痕が並ぶ。焼成は良好で胎土は細かい。佐渡の小泊窯産の特徴をよく表す個体で、9 世紀末から 10 世紀前半の所産であろう。2012 年（平成 24）5 月に出雲崎町の漁業関係者によって、石地沖で引き揚げられた。

C 椎谷沖

1) 須恵器（図版 19-3）

3 は、完形の横瓶で、器高 28.0cm・口径 12.5cm を測る。口縁部は外方に開き、端部は内傾した面を持つ。胴部外表面は平行叩きの後にナデを施し、閉塞部にはカキ目がよく残る。時期は定かではない。貝類・ゴカイ類の付着は口縁部と肩部を中心に、胴部上半に限定して認められることから、海底において胴部下半が砂または泥に埋まった状態であった可能性が高い。2007 年（平成 19）7 月の中越沖地震以降、出雲

崎沖では漁網に海底の古木が掛かる漁業被害が相次いだ。そのため大々的な古木の回収作業が行われ、本資料も出雲崎町の漁業関係者によって回収作業の中で古木と共に引き揚げられた。
（加藤由美子）

D 荒浜沖

1) 須恵器（図版 19-4）

4は、完形の横瓶である。口径 13.3cm で、胴径 20 ~ 21cm・長さ 34.2cm・器高 24.7cm を測る。口頭部は外反しながら立ち上がり、端部はやや丸みを帯びている。胴部は片面閉塞で、外面に約 3mm 四方の格子目文の叩き目。内面に同心円文の当て貝痕がある。さらに、閉塞部と胴部との接合部内面に同心円文とは異なる弧状の当て貝痕がみられるので、成形・閉塞の後、あるいは閉塞の段階で口頭部の穿孔部分を利用して調整されたことが考えられる。また、口頭部～胴部上半に自然袖がみられ、閉塞部と反対側の外面に他の製品の破片が付着している。胎土はおむね精緻であるが、黒色・白色の微粒子を含んでいる。内外面とも全体的に貝類等が付着する。本資料は郷土史家でもあった中村藤八（1853 ~ 1920）が収集して寄贈した「中村文庫」（柏崎市立図書館蔵）のひとつで、すでに『柏崎市史資料集』に掲載されており、文庫の目録には「刈羽郡荒浜村之海底ヨリ引上ケシモノ」とあるが、詳細は明らかではない。産地は不明であるが、胴部の形態などから、8世紀後半の所産と考えられている〔山本 1987〕。

E 番神沖

1) 石 仏（図版 20-6）

6は、丸彫りの坐像である。安山岩製で、残存する高さは 21.1cm・最大幅 21.6cm・最大奥行 11.1cm を測る。頭部と左腕～左脚部を欠損し、全体的に表面が磨耗しているが、胸や腕の付近には法衣（納衣）の一部がみられ、右手に錆杖があることから、地蔵菩薩と考えられる。光背はない。現在は地元の諏訪神社境内に安置されているが、発見後に付加されたと思われる基礎の正面に「明治三十 / 六年（1903）五月 / 三本棒杭ノ / 処ヨリ揚ケ / 此処へ安置ス」((1903) は筆者加筆)、左側面に「村山米藏」と刻まれている。情報提供者によれば、番神沖の通称“三本棒杭”付近の海底は平坦になっており、石仏は3体あったという。

F 笠島沖

1) 鑓（図版 20-7・8）

7は、四爪鑓である。アンカーリング（上部の輪状部分）が欠損し、フルークと呼ばれるアーム（爪）の先端が腐食しているほか、全体が鏽などで覆われている。全長は 127cm、中心からのアームの長さは直線で約 70cm が残る。シャンク（柄）は断面が長方形で、上部が 11cm × 10cm、下部が 18cm × 20cm となる。アームの厚さは最大 10cm で、確認されるフルークの厚さは 1.5 ~ 2.5cm である。

8は、四爪端である。アーム・フルークが一部欠損しているほかは、おむね完形である。全長 220cm、アームの長さは直線で約 60cm である。シャンクは断面が長方形で、上部が 6cm × 9cm、下部が 10cm × 16cm となる。アームの厚さは最大 6cm であるが、フルークの厚さは鏽や腐植によって明らかではない。アンカーリング・付属リングに貝が付着しており、安置されている位置の関係からも観察は難しいが、アンカーリングの形態は縦長楕円形状で、断面はおそらく方形、厚さ 2.5cm 以上とみられる。また、付属リングの断面は円形もしくは隅丸形と思われる。時期の比定にはより詳細な観察が必要であるが、松井広信の研究からは 18世紀末～19世紀前葉の所産と考えられる〔松井 2013〕。

地元住民によれば、7・8は以前（1970年代頃）に笠島沖で網にかかったもので、保管場所がなかったために笠島海岸にある弁財天宮の岩に固定したとのことである。このほかにも全長75cmの四爪鉄錆2点が奥にあるが、来歴は不明である。

G 地点不明資料

1) 珠洲焼（図版20-5）

5は、叩き成形による中壺である。口径22.0cm・底径11.6cm・器高37.5cmを測り、上から1:2の位置が胴部の最大径30.0cmとなる。口頭部はやや外反気味に開き、口縁端部は面を持つ方頭をなすが、外端が若干肥厚する。底部と胴部は外面に、口頭部と胴部は内面に接合の痕跡が観察される。胴部は外面に叩き目、内面に当て具痕があるが、叩き目は3cmあたり14～16目を数える。内外面には貝の付着が著しいため、所蔵者がかなり擦り落としたとのことであるが、それでもなお多く付着している。発見された地点や来歴の詳細は明らかではないが、戦後にはすでに現在の所蔵者に伝わっていたようである。発見者は、かつて所蔵者の近隣に在住しており、漁業関係者であった時期もあったといわれている。2006年（平成18）には柏崎市立博物館の特別展で紹介された〔柏崎市立博物館2006〕。口縁部の形態や叩き目の状況などから、吉岡編年〔吉岡1994〕の第Ⅱ期に考えておきたい。
(伊藤啓雄)

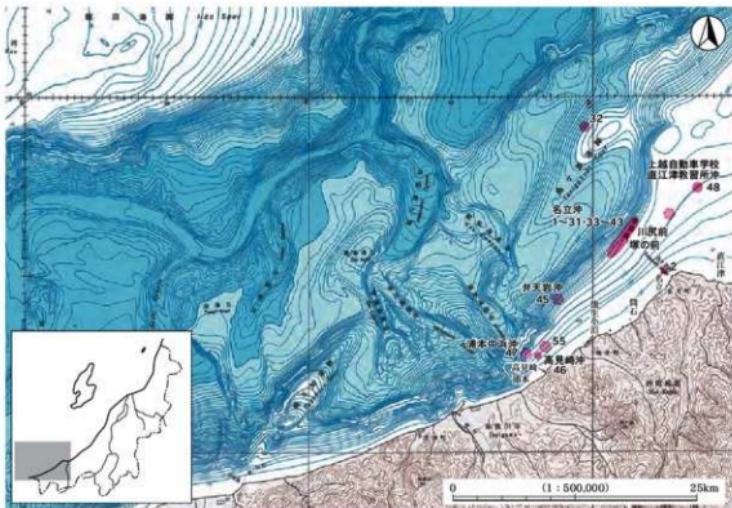
5 上越・糸魚川地域の海揚がり品

A 概要

上越・糸魚川地域の海岸は富山湾東部に位置し、富山県境の境川河口、糸魚川市市振から新潟県柏崎市との境、米山までの約83kmに及ぶ。そのほぼ中央にある上越市郷津以東は直線的な砂浜^{いなごの}が続き、大規模な砂丘が形成され。一方の郷津以西は姫川、青海川、早川、能生川などの急流河川が流れ込み、大型礫からなる海岸と親不知海岸などの断崖^{だんがい}が続き、糸魚川市能生の白川・藤崎^{ふじさき}、上越市谷浜に若干の砂浜が形成されているに過ぎない。海底の様子も西と東では大きく異なり、早川河口以西は急激に水深を増して富山湾に落ち込み、以東は比較的遅浅である。このため、早川以東の浦本^{うらもと}¹⁾、能生、小泊、筒石、名立など^{なだ}の漁港では底引き漁が盛んである。

海揚がり資料の採集地点を概観すると、高見崎沖（鬼伏沖）、弁天岩沖（能生沖）、名立沖、上越自動車学校直江津教習所沖、直江津沖となり、なかでも名立沖のものが大半を占める。この名立沖は地元の漁業関係者たちがいわゆる三角波の発生が多い危険水域としている鳥ヶ首岬沖の西方に位置し、報告されているとおり〔室岡1972、伊藤・室岡・金子1975等〕、以前から珠洲焼などの海揚がりの地点として知られる。なお、名立沖における採集地点は複数か所に及び、名立川河口沖西側の「塚の前」、東側の「川尻前」、沖合の「鳥ヶ首海脚」、北緯37°18'213"・東経137°59'380"付近の水深400m～600mにも採集地点が確認できる（第13図）。名立川河口の沖合約7km、水深約150mの北緯37°12'26.9"・東経138°2'5.7"の「塚の前」では、珠洲焼が集中して海揚がりする場所があるという（巻頭図版2・4）。「焼きものが集中する地点は、周辺より約15m深くなっている、底は岩盤のようになっている。昔から地元では船が沈んでいるのではないか」と伝えられている。遺物集中地点の海底が周辺よりも深くなっているという

1) 浦本漁港では2012年以降、底引き網漁船は操業していない。



第13図 上越・糸魚川地域海揚がり地点

話は、寺泊の大河津分水路河口沖約11kmの集中地点・かなばちと共通性がある。ここも沈没船の伝承がある。

なお、これまでに「筒石沖」とした記載(『金大考古』[佐々木恒2011])例もあり、そのように認識している資料の所有者も少なくない。しかし、今回の調査における採集者の聞き取りでは確実に「筒石沖」と限定できる資料は無く、採集者が筒石漁港の漁業関係者であることから「筒石沖」となった可能性が高く、今回は「筒石沖」とされているものも名立沖に含めた。この他の直江津沖、上越自動車学校直江津教習所沖、弁天岩沖(能生沖)、高見崎沖(鬼伏沖)はその他の地点で一括した。

B 名立沖

1) 須恵器(図版21-1~3)

1は甕で、口径30.6cm・器高42.6cmを測る。薄手で、口縁端部を外面に引き出し、丸底である。タタキ成形で、外面の印目は格子状、内の当具痕は平行文であるが、内の上半はタタキの痕跡が明瞭ではなく、調整方法が不明である。胎土には黒色の噴出物が見られる。小泊産で、9世紀の所産である。内外面とも上半に貝・ゴカイ類の付着が著しい。筒石地区の漁業関係者の個人蔵で、新出資料である。2は長頸瓶である。口縁部を欠損し、底径は12.7cmを測る。貼り付け高台を持つ。胴を狙った底引き漁で、名立川沖合水深約20mの地点から揚がった²⁾。小泊産で、9世紀後葉の所産である。個人蔵で、新出資料である。3は水瓶で、口縁部の一部を欠くもののほぼ完品である。口径4.5cm・器高26.4cm・底径8.5cm・胴部最大径13.8cmを測る。外面の胴部上半はナデ、下半はロクロケズリで調整されている。完形のた

2) 海底地形図で名立沖を見ると岸から約1.5kmが水深20mである。

め、内面の調整は不明である。底部は貼り付け高台である。外面には2ヶ所に沈線が巡り、頸部には5条、胴部には2条1対の沈線が5単位(10条)を数える。高田平野西部丘陵産で、8世紀中頃～9世紀前半の所産である。2004年(平成16)に名立沖水深約200mから引き揚げられたもので、個人の所有である。[春日2007]の発表要旨が初出で、上記の観察所見はそれを参考とした。図版の実測図は発表要旨の再トレース、写真は新たに撮影を行った。

2) 珠洲焼(図版21-4～図版31-43)

壺5点、壺10点、小鉢・小型片口鉢4点、片口鉢17点、その他4点の計40点がある。その内、21点が新出資料で、11点は室岡が報告した名立沖揚陸陶質土器群「室岡1972」である。図版21-4、図版22-6・7・9、図版23-11～13・15、図版24-16～18、図版25-19・20、図版27-26、図版28-28・30・31は、能生地区筒石の漁業関係者により引き揚げられたもので、すべて新出資料である。4・10・12・17～19・26・28及び13・16・30はそれぞれ同じ個人の所有で、その内、前者(4・10・12・17～19・26・28)の引き揚げ地点は「塚の前」である。また、図版26-22～24、図版27-25・27は現在、糸魚川市教育委員会が管理し、能生歴史民俗資料館と長者ケ原考古館に保管・展示されているもので、『金大考古』[佐々木他2011]で初めて報告された。図版の実測図はその報文を再トレースし、写真は今回の調査で撮影した。文中の法量は『金大考古』[佐々木他2011]報文に掲載された。その内、23～25、27は新潟県遺跡カードに掲載されており、「名立海底遺跡(筒石)」からの引き揚げとされる。

壺(図版21-4・5) 4は、叩き大壺の口縁部で、口径は推定65.6cmを測る。叩き目は右下がりの斜行を呈する。吉岡編年IV期の所産である。貝の付着が著しい。5は、叩き中壺で、口径43cm・器高42cm・底径16cmを測る。完形であるが、歪みが著しい。外面の叩き目は太い原体で右下がりを呈する。吉岡編年IV期の所産である。貝・泥の付着が目立つ。上越市立総合博物館へ1993年(平成5)に寄贈されたが、海揚がりの経緯は不明である。『金大考古』が初出であるが、2011年(平成23)11月14日に実見したところ実測図に疑義が生じたので再実測を行い、写真も再撮影した。

壺(図版22-6～10、図版23-11) 6は、叩き大壺で、口径16.3cm・器高49.5cm・底径11.7cmを測り、完形である。ほぼ直立する細頸を持ち、口縁端部を外へやや引き出す。叩き目は階段状を呈する。内外面の胴部下位には叩き目が認められず、横位方向のナデが施される。器壁は薄い。吉岡編年IV期の所産と考えられるが、III期まで遡る可能性もある。内面口縁部には、油状のシミが付着している。胴部には泥の痕跡は少なく、斑状に認められる。一方、貝やゴカイ類の付着が著しい。7は、叩き中壺で、口径20.5cm・器高34.4cm・底径11.9cmを測り、完形である。「く」字状に短く屈曲する頸部を持ち、口縁内端部を上方へつまみ上げる。外面の綾杉の叩き目は階段状を呈し、やや崩れた印象を持つ。内外面とも胴部下端には叩き、当て具痕が認められず、横位方向のナデが施される。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年IV期の所産である。胴部には泥の痕跡が斑状に認められ、やや大型の貝の付着が著しい。8は、叩き中壺で、口径19.7cm・器高35cm・底径11.2cmを測る。叩き目は整った綾杉状を呈する。口縁上端は面取りし、内端は上方へ引き上げられている。吉岡編年II期の所産と考えられるが、III期まで下る可能性もある。泥の付着が認められる。この壺は21と共に引揚げられた。引き揚げた漁業関係者によると引き揚げ地点は、水深160～200mで、他に片口鉢2点が一緒に揚がったが、「花生けにしたい」という人がいて譲ったという。今回の調査で新たに発見したもので、新出資料である。2007年に国道8号拡幅工事に伴い、漁業関係者の浜小屋にあったものを漁具一式とともに上越市立総合博物館に寄贈したもので、

現在は下名立生涯学習センターに所蔵されている。9は、小壺で、口径 10.5cm・器高 17.8cm・底径 8.8cm を測り、完形である。肩部外面に櫛目波状文が 2 条巡る。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年 II 期の所産である。10は、小壺で、口径 10.8cm・器高 18.8cm・底径 9.1cm を測り、9と法量が近似する。完形である。肩部外面に櫛目波状文が 2 条巡っているが、9より波長が緩やかに描かれている。内面は口縁部が頗著である。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年 II 期の所産である。貝・泥痕が見られる。11は、草樹文中壺で、口径 13.0cm・器高 29.7cm・底径 8.6cm、胴部最大径 24.8cm を測る。口縁部の一部を欠き、体部下半に縦の亀裂が認められるが、ほぼ完形である。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁外端を外に引き出す。胴部はやや歪み、球状から寸胴気味を呈する。口縁部上面と頸部中位、頸部と胴部境に櫛目波状文が巡る。胴部には棒状工具により 5 種類の草樹文が描かれる。草樹文の間には肩部に縦波状文、線刻文、2 単位の櫛目文が不連続に描かれる。草樹文の下、胴部中位よりやや下には文様帶を区画するように波頂部を表すような波状文が全周する。吉岡編年 II 期の所産で、「塚の前」から掲げられたものである。

小鉢・小型片口鉢（図版 23-12～14）12は、小鉢で、口径 20.5cm・器高 9.5cm・底径 9.1cm を測り、完形である。器形は底部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。片口ではなく、卸目は施されていない。器面全体はナデが施され、底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年 I 期から II 期の所産である。外面胴部下半と内面全体には褐色を呈する泥痕が認められる。13は、小型片口鉢で、口径 17.5cm・器高 7.5cm・底径 9.8cm を測り、完形である。器形は底部から緩やかに内湾する。小型の片口が付くが、卸目は施されない。器面全体にナデが施され、内面は凹凸が頗著である。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年 I 期の所産と考えられるが、II 期まで下る可能性もある。内面には褐色を呈する泥痕が認められる。14は、所在が不明な資料である。やや小型で、口径 22.5cm・器高 8.5cm・底径 10.7cm を測る。卸目の記載はないが、添えられた拓本をみると、7 条一単位の蛇行する卸目が僅かに施されているようである。名立沖から掲がつたものとされており〔吉岡 1994〕、時期は I 期に位置付けられているものの、製品の特徴から、吉岡編年 I 3～II 期頃まで下る可能性もある。

片口鉢（図版 23-15、図版 24-16～18、図版 25-19～21、図版 26-22～24、図版 27-25～27、図版 28-28）15は、口径 30.0cm・器高 16.3cm・底径 11.4cm を測り、完形である。器形は底部から直線的に立ち上がり、上端を内側に引き出す。卸目は 10 目一単位で 8 条（4 本）が放射状（「米」字状）に入いる。卸目は、口縁に対しやや弧を描く。底部は静止糸切り痕が残る。内面胴部上位には、花弁状の印花文が 2 つ刻印される。吉岡編年 II 期の所産である。16は、口径 28.8cm・器高 13.8cm・底径 9.7cm を測る。口縁部を所々、欠くがほぼ完形である。器形は底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部を短く直立させ、端部を外側へ僅かに引き出す。口縁上端は平坦な面を持つ。卸目は浅い 10 目が一単位として、11 条が胴部内面に不均等に蛇行して入れられており、底部の内は不明瞭である。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年 II 期の所産である。内面には貝付着・泥痕が著しい。2012 年（平成 24）10 月に名立沖の「塚の前」から引き揚げられた。17は、口径 32.8cm・器高 13.3cm・底径 12.2cm を測る。口縁の約半分を欠損し、歪みが著しい。器形は底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁内端を内側にやや引き出す。卸目は 13 目一単位で、8 条（4 本）が放射状（「米」字状）に入る。内面胴部上半には、外輪のある印花文が 2 つ重なるように刻印される。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年 II 期の所産である。内外面には褐色を呈する泥の付着が認められ、特に内面が著しい。これも 2012 年（平成 24）10 月に名立沖の「塚の前」から 16 と同時に引き揚げられた。18は、口径 31.6cm・器高 13.0cm・底径 12.7cm を測り、口縁部をわずかに欠くもののほぼ完形である。器形は直線的に立ち上がり、口縁内端をわずかに内側に引き

出す。内面胸部上位には 15・17 とは異なる印花文が 1 ケ所刻印される。卸目は 10 目一単位で、14 条が放射状に入る。ただし、卸目は見込み中央を跨いで施されるものと、中央から口縁に向って引かれるものと混在している。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年Ⅱ期の所産である。泥痕は内外面口縁部に僅かに認められる。19 は、口径 31.8cm・器高 13.1cm・底径 11.4cm を測る。口縁部の約 1/3 を欠き、歪みが著しい。器形は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁内端を僅かに内側に引き出す。胸部内面上位には、17 に類似した印花文が刻印される。卸目は 13 目一単位で、8 条（4 本）が放射状に入る。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年Ⅱ期の所産である。口縁部内面と外面全体に泥痕が著しく認められる。20 は、口径 30.1cm・器高 14.7cm・底径 13.0cm を測る。底部内面中央が若干剥落しているものの、完形である。器形は直線的で器高がやや高い。口縁内端を僅かに内側上方へ引き出す。卸目は 10 目一単位で、8 条が放射状に入る。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年Ⅱ期の所産である。口縁部の内外面に斜行に泥痕が認められ、器表にはゴカイ類が付着する。21 は、口径 27.5cm・器高 12.0cm・底径 10.6cm を測る。やや内湾しながら立ち上がる器形で、口縁部直下でやや括れる。口縁上端は面取りをし、内端が僅かに上方へ摘み上げられる。卸目の単位は不明瞭で良く分からぬが、見込み中央から 9 条が口縁に向かってやや左に弧を描きながら放射状に施される。吉岡編年Ⅱ期の所産である。内外には泥と貝の付着が著しい。泥は口縁部に付着していないことから、本品は他の個体と重ねられて海底に埋没していた可能性を示唆している。本品は 8 と同時に引き揚げられたもので、下名立生涯学習センターに所蔵されている。新出資料である。22 は、口径 29.6cm・器高 12.4cm・底径 12.0cm を測る。歪みが著しいが、完形である。卸目は 12 目一単位で、8 条（4 本）が放射状（「米」字状）に入る。胸部内面上位には「大」字状の記号文が刻文され、底部には静止糸切り痕が残る。器形は 24・25 に似る。吉岡編年Ⅱ期の所産である。口縁にサンゴが付き、胸部上位に褐色の泥痕が認められる。現在は 23～25 及び 27 と共に能生歴史資料館に所蔵されているが、本品は新潟県遺跡カードには掲載されていない。23 は、口径 30.4cm・器高 13.7cm・底径 12.0cm を測る。口縁部を大きく欠損しており、片口の有無は不明である。卸目は 12 目一単位で、10 条が蛇行しながら放射状に入る。底部には静止糸切り痕が残る。18 に似た器形であるが、器壁は厚く、同様に褐色の痕跡が認められる。吉岡編年Ⅱ期の所産である。新潟県遺跡カードに掲れば、かつて木浦小学校に所蔵されていた。24 は、口径 29.5cm・器高 14.8cm・底径 12.3cm を測り、完形である。器形はやや内湾しながら立ち上がり、口縁内端を上方内側に引き出す。卸目は 13 目一単位で、8 条（4 本）が放射状（「米」字状）に入る。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年Ⅱ期の所産である。口縁部から胸部上位にかけて褐色の泥痕が認められる。新潟県遺跡カードによれば、かつて能生町公民館に所蔵されていた。25 は、口径 31.8cm・器高 12.7cm・底径 11.4cm を測り、完形である。器形は屈曲して作り出した底部から、やや内湾しながら立ち上がり、口縁部を内湾気味に細く作り出す。卸目は 12 目一単位で、8 条（4 本）が放射状（「米」字状）に入る。胸部内面上位には名立沖揚陸陶質土器群第一群（国版 30-37・38）と同じ印字文が刻印されている。吉岡編年Ⅱ期の所産である。内面及び口縁部外面には褐色の泥痕が認められる。新潟県遺跡カードに掲れば、かつて能生町公民館に所蔵されていた。26 は、口径 34.4cm・器高 13.7cm・底径 13.5cm を測る。歪みが著しいが完形である。器形は直線的でやや開き気味に立ち上がる。口縁上端には面を作出し、その中央がやや凹む。器壁はやや厚い。卸目は 10 目一単位で、13 条（7 本）が放射状に入る。ただし、その内の 12 条（6 本）は鉢の中心を跨ぐ、残りの 1 条は中心から口縁部まであり、他の卸目 1 条分の半分の長さである。底部には静止糸切り痕が残る。吉岡編年Ⅳ 1 期の所産である。貝・泥の付着は僅かで、胎土は精良である。27 は、口径 42.2cm・器高

18.2cm・底径 15.1cm を測り、完形である。器形はやや内湾して立ち上がり、口縁部上端に平坦面を持つ。鉢目は 5 目一単位で、内面全体に密に入る。口縁上面には櫛目波状文が施されている。底部は中央がやや凹み、静止糸切り痕が認められる。吉岡編年 V 期新段階の所産である。胴部上半には褐色の泥痕が認められる。新潟県遺跡カードに拠れば、かつて木浦小学校に所蔵されていた。28 は、口径 40.2cm・器高 17.4cm・底径 16.0cm を測り、完形である。器形は僅かに外反しながら立ち上がり、口縁部直下でやや屈曲した後、大きく外反し口縁部に至る。口縁部の内面は平坦な面を持ち、櫛目波状文が施されている。器面は粘土組の接合痕が残り、胎土に夾杂物が目立つなど、雑な作りである。鉢目は 7 目一単位で、放射状に内面全体に密に入る。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年 VI 期の所産である。内面には褐色を呈する泥の痕跡が認められ、外面には貝の付着が著しい。

その他（図版 28-29 ~ 31、図版 29-32）29 は水瓶で、口径 10.1cm・器高 31.4cm・底径 10.1cm・胴部最大径 17.8cm を測る。本品は注口の基部より先を欠くものの、その他は完形である。いわゆる「仙箋型」である。胴部には横位方向の櫛目波状文が 3 単位巡る。吉岡編年 I 期の所産である。名立沖の底引き漁で引き揚げられたもので、糸魚川市在住漁業関係者により糸魚川市教育委員会にもたらされた。新出資料で、図・写真とも本報告が初出である。30 は水瓶で、残存器高 25.0cm・底径 9.5cm・胴部最大径 18.0cm を測る。注口先端と頸部上端を欠くが、その他は完形である。口縁部は 29（仙箋型）のように復元できようか。頸部は基部から上面に向かい徐々に細くなっていき、ヘラにより大胆に面をとる。それらの面には縱位方向の弧あるいは波状の櫛目文が施され、さらに頸基部直下には縱位波状の櫛目文が連続する。胴部下位には器面全体に草花櫛目文が連続して配される。底部は低く「ハ」字形に作り出される。吉岡編年 I 期の所産と考えられるが、II 期まで下る可能性もある。胴部外面には褐色の泥痕が認められる。31 は、水注で、口径 4.0cm・器高 15.7cm・底径 6.4cm・胴部最大径 11.2cm を測る。注口と把手を欠くが、その他は完形である。直線的に伸びる頸部を持つ。胴部には単線による網目状線刻文が全面に施される。底部はヘラナデが施されている。吉岡 II 期の所産と考えられるが、I 期まで遡る可能性もある。胴部外面には泥痕が認められ、特に下位に顕著である。32 は、秋草文水注である。口径 3.0cm・器高 15.4cm・底径 5.6cm・胴部最大径 10.4cm を測り、完形である。頸部は細く直線的に上方へ伸び、口縁部がラッパ状に開く。胴部にはほぼ全面に細いヘラ描きにより秋草文が施される。胴部中位には細く屈曲した注口が付く。把手は断面がやや扁平で歪な梢円形を呈し、背面にも秋草文が施される。類例が乏しく判断に苦しむが、吉岡編年 IV 期の所産かと思われる。器表には貝・ゴカイ類・泥の付着が顕著である。本品は、昭和 50 年代に名立大町の漁業関係者により、名立海底遺跡とは異なる水深 600m の地点で南蛮エビを探る際に海揚がりしたものである。現在、引き揚げた個人が所有している。『金大考古』〔佐々木他 2011〕が初出で、実測図は報文の再トレース、写真は今回新たに撮影した。

名立沖揚陸陶質土器群（図版 29-33・34、図版 30-35 ~ 41、図版 31-42・43）33 ~ 43 は「名立沖揚陸陶質土器群」〔室岡 1972〕として報告されたものである。これらの海揚がり品は第一から五群に細分され、第四群は名立大町の漁業関係者に、第一～三・五群は名立小泊のそれぞれ異なる漁業関係者により引き揚げられた。第一群は、名立川の河口から北西に約 5,000m 沖合（名立川尻）にあるクリ（岩礁）とクリの間、水深 150 ~ 200m の泥中から引き揚げられたものである。この地点は「たら場」とも呼ばれている。第二・三群は第一群と同じ地点、第四群は第一群の東方約 1km の地点、第五群は第一群の東方約 4km の地点から引き揚げられた。第一群は 1959 年（昭和 34）10 月 7 日、第二群は 1960 年（昭和 35）5 月、第三群は 1960 年（昭和 35）9 月 18 日、第四群は 1960 年（昭和 35）5 月、第五群は 1960 年（昭和 35）4

月に引き揚げられている。このうち、第一～四群を包含するように水深 170 ～ 200m を測る北東～南西 3km、北西～南東 1km の水域を、新潟県は「名立海底遺跡」として 1973 年（昭和 48）に遺跡登録している。

第一群 33 ～ 38 是第一群である。いずれも珠洲焼で、吉岡康暢により「Ⅱ期の日常容器の一セット」[吉岡 1994] と捉えられている。室岡博は個々の器表に付着している泥の範囲に着目し、その分析からそれぞれの海

中での状態を検証し、埋没状況を復元した（第 14 図）[室岡 1972]。この状態は「最小の体積をもって最大多数のものを容している」といえ、このことは即ち「船の積荷を意味する」[伊藤他 1975] と理解されている。その後、1997 年（平成 9）年に刊行された『名立町史』では、33・34・35・37・38 及び後述の第四群小壺（42）の写真が掲載され、名立公民館に所蔵されていたことが分かる[花ヶ前 1997]。しかし、市町村合併を経て 2010 年の金沢大学の調査時にはすでにこれらの所在が不明となっていたが、今回の調査で 36 を除き下名立生涯学習センターに所蔵されていることが判明した。残念ながら、依然として 36 の所在は分からず。33 ～ 38 の実測図は [伊藤他 1975] の再トレースで、写真は 36 を除き今回改めて撮影した。33 は、叩き中壺で、口径 41.5cm・器高 39.8cm・底径 17.5cm・胴部最大径 48.2cm を測る。削れているものの欠損部分はなく、完形である。器面にはサンゴ・貝の付着が著しい。34 は、叩き中壺で、口径 25.3cm・器高 34.5cm・底径 11.5cm・胴部最大径 32cm を測り、完形である。外面の叩き目はやや崩れた綾杉文を呈し、一見Ⅳ期頃の所産にも見える。しかし、口縁上端部を上方に引き上げるなど器形がⅡ期と共に通じ、外縁のタタキの一単位毎が面取り風になるなど古い様相を示すことから、ひとまずⅡ期の範疇にいれておく。胴部上位には「T」字状の記号文が刻文されている。35 は、ロクロ成形の小壺で、口径 9.4cm・器高 19.1cm・底径 8.0cm・胴部最大径 18.3cm を測り、完形である。肩部と胴部上位には櫛目波状文が 3 条巡る。1 段目と 2 段目の波状文の間には、印文文が刻印されている。36 は、ロクロ成形の小壺で、口径 11.5cm・器高 21.3cm・底径 8.5cm・胴部最大径 18.2cm を測る。所在不明のため、実見できなかった。実測図から推測すると、35 と同様に 3 条の櫛目波状文が施されるようだ。器形は 35 と比べると肩部の張りが弱く、器高がやや高い。37 は、片口鉢で、口径 31.3cm・器高 12.2cm・底径 12.0cm を測る。口縁部の一部を欠く。やや内湾しながら立ち上がる器形で、口縁部は短く直立する。口縁部内側を内側上方へ僅かに引き上げる。底面は静止系切りである。鉢目は 12 単位（6 本）が「米」字状に施される。胴部内面上位には「ハ」字の上に四角を二つ施した印字文が刻印される。38 は、片口鉢で、口径 32.0cm・器高 13.5cm・底径 11.3cm を測る。37 に似るが、胴部は直線的に開き、口縁部はやや長い。

第二群 39 と 40 は、いずれも片口鉢である。本群はその他に、39 の中に入れられていたシャチの歯 10 本（國學院大學鑑定）と大甕の破片 1 点（珠洲焼か）と一緒に引き揚げられたと報告されているが、現在は行方が分からない。39 は、口径 30.2cm・器高 12.5cm・底径 11.6cm を測る。口縁部の一部を欠く。器形は直線的に開き、口縁部直下が括れる。口縁部上端には平坦面を作出する。歪みが著しい。鉢目は 8 条が放射状に入いる。そのうち、6 条（3 本）は中心を跨いで施され、連続する。器表には泥と貝が付着する。内面の泥は胴部上半にのみ付着していることから、正位の状態で内に別の個体を入れ子にした状態で水没していた可能性を示唆していると考えられる。吉岡編年Ⅱ期の所産である。現在は上越市立総合博物館



第 14 図 第一群珠洲焼の薄没状況復元図

に所蔵されている。図版の実測図は〔吉岡 1994〕の再トレース、写真は新たに撮影した。40は、口径19.5cm・器高8.0cm・底径10.5cmを測り、完形である。口縁部内端は上方へ引き出す。外底面は静止糸切り後、ナデ消している。器表には39と同様に泥と貝が付着し、口縁部にはサンゴが頗著である。吉岡編年Ⅱ期の所産と考えられるが、卸目を持たないことからⅠ期まで遡る可能性もある。現在は國學院大學学術資料館に所蔵されており、実測図・写真ともに初出である。

第三群 41は、珠洲焼叩き甕の底部片である。推定底径は16.0cmである。内外の器表には貝とゴカイ類が付着する。遺存率が低いため判断し難いが、吉岡編年Ⅲ期墳の所産であろうか。現在は下名立生涯学習センターに所蔵されており、実測図・写真ともに初出である。なお、『金大考古』のFig5-3「名立沖揚陸珠洲焼甕破片」として紹介されている写真のうち、底部片が本品にあたる。

第四群 42は、珠洲焼叩き小壺で、口径10.5cm・器高19.8cm・底径8.5cm・胴部最大径16.8cmを測る。無文で、貝の付着が著しい。吉岡編年Ⅱ期の所産である。現在は下名立生涯学習センターに所蔵されている。実測図は〔吉岡 1994〕の再トレース、写真は新たに撮影した。

第五群 43は、珠洲焼叩き中壺で、推定口径46.0cmを測る。外面の叩き目はやや細めの原体で右下がりの斜行を呈する。吉岡編年Ⅲ期の所産である。現在は下名立生涯学習センターに所蔵されており、実測図・写真ともに初出である。なお、『金大考古』のFig5-3「名立沖揚陸珠洲焼甕破片」として紹介されている写真のうち、大型の口縁部片が本品にあたる。

C その他の地点（図版 31-44～48、図版 33-55）

44は、珠洲焼四耳壺である。口径10.6cm・器高24.7cm・底径9.1cmを測り、完形である。胴部の中央よりや上方に最大径を持つ倒卵型の胴部を呈し、直線的に聞く短い頸部から口縁部に至る。口縁部内端は上方につまみあげ、上端は外傾した面を持つ。肩部には4単位の横位の耳が付く。ロクロ成形で、器面は丁寧なロクロナデが施されているが、底部付近は横位のヘラケズリである。底部は回転系切痕が残る。胴部外面には波長・振幅の大きい単位7目の櫛目波状文がややごちなく描かれ胴部を全周するが、起点と終点は交差する。内外面には、貝類・ゴカイ類が多く付着しており、外面の口縁～胴部上半に特に頗著である。吉岡編年Ⅰ期の所産である。本品は、今回の調査で所在が判明した新出資料である。本品が収蔵されている箱の箱書きによれば、直江津沖20海里の地点で寺泊の漁業関係者により昭和4年に引き揚げられたとされ、現在は親族が所蔵している。昭和7年の「北越新報」には、写真入りの記事が掲載されており、記事によると当時の鑑定結果は「6～700年前、石見の国の土人が海底の粘土で製した」とある。なお、同記事では引き揚げ地点を直江津沖合9海里としており、箱書きと齟齬がある。なお、本資料との揚陸位置関係は不詳であるが、直江津沖からと伝えられている木像阿弥陀仏（第15図）が筒石地区の漁業関係者により引き揚げられている。引き揚げた方はすでに亡くなられており、現在ご家族が所蔵している。引き揚げ時の状況は伝えられておらず、不明である。高さ9cm・幅3cm・厚さ1.95cm・頭部幅1.3cmを測る。手首より先端を欠くが、全体的に残存状態は良好で袈裟等のヒダも明瞭に残る。なお、後背と台座は後に作製したものである。45は、珠



第15図 直江津沖引き揚げの木像仏

洲焼の小壺で、口径 11.7cm・器高 14.8cm・底径 8.4cm を測り、完形である。丁寧にロクロナデがされている。底部は静止糸切り痕が残る。吉岡編年 IV 期の所産である。貝・泥の付着はほとんど認められない。能生小泊の漁業関係者によって弁天岩沖の水深 200m の地点で採集されたもので、新出資料である。46 は、近世の越中瀬戸焼陶器広口壺で、底径 10.4cm を測る。肩部以上を大きく欠損する。ロクロ成形で、内外面に赤褐色の鉄釉を施す。底部外面には回転糸切り痕が見られる。引き揚げ地点は北緯 37° 5' 33.7、東経 137° 55' 98.8 の高見崎沖（鬼伏沖）の水深 60m から引き揚げられたもので、個人の所有である。金沢大学の調査で初めて報告され、2006 年の聞き取り時は類似品が 2 つ存在し、報文に写真が掲載されているが、現在その内の 1 つは別の個人に引き取られ、所在が不明である。今回の調査では、残った資料の図化と再撮影を行い掲載した。2012 年の聞き取りでは、「海が大荒れの後に揚がった。海底の砂や礫が動いて、焼きものが露出したのかも知れない。現在は砂などが被ったとみて揚がらなくなったり」ということであった。なお、『金大考古』〔佐々木 2011〕では本品を、瀬戸内海での使用例との類似から「蛸壺」と報告しているが、糸魚川近海では蛸漁に木箱を使うことから使用方法に疑問が残る。本稿では、近世消費地遺跡での出土報告例から「広口壺」〔相羽 2003〕とした。47 は弥生時代の石錘〔紅村 1966〕で、長さ 24.4cm・最大径 6.7cm・重量 1415g を測る。劔錘形で頭部が括れ、頭部に縦に頂部から頸部まで表裏対を為す 2 条の溝（幅 1.3cm、深さ 3mm）が刻まれる。石材は閃綠岩とみられ敲打技法で整形されている。この石器は、大野雲外が『人類学雑誌』において「海底発見の石器に就いて」と報告した石器 3 点のうち 1 点と同一物である。「越後国西頃城郡能生村の西方なる鬼伏の沖合一里許りのところにて、深さは六七十尋の海底から、刺網にかかりて得たるものであると云ふ…」と発見地などが記されている。上部を瘤ませた作りは繩を掛けるためのもので、石器の用途は「漁業具用錘りの一種」としている。現在は上越市立総合博物館に「森成コレクション」の一部として所蔵されており、石器が縫い付けられる厚紙台の注記は、表「浦本村大字中濱海中」。裏「浦本村字中濱海中ヨリ網ニ掛る 屢々出ツ 全村漁師福島初太郎氏 福島氏ヨリ 小松芳春氏□口白銀賛瑞氏 昭和式年五月八日 白銀氏ヨリ寄贈」となっている。両者の記載では海揚がり地点が、能生村鬼伏沖と浦本村中濱海中と違いがある。現地は隣り合つた村であるため漁場が共通していると見られることから、浦本海底谷（第 13 図）（カンザシと呼ばれる漁場）周辺で採集されたものと考えられる。平成 26 年 3 月に浦本漁協で写真を示して類例を求めたが、「現在の鉛錘の前は自然縞を縄で包み用いていた。写真の錘は見たことがない」ということである。今回の調査で図化と写真の再撮影を行い、掲載した。55 は四爪錘である。浦本地区大字中浜の諏訪神社に、浦本漁港の漁業関係者が 50 年から 60 年前に浦本沖から引き揚げたとされる長さ 180cm の鉄製錘 1 点が奉納されている。幅 4.8cm ~ 15cm・厚さ 2.5cm ~ 5.0cm を測る。48 は、達磨大師を象った土人形で、高さ 17.7cm、正面下部幅 7.5cm を測る。型作りで中空である。筒石漁港の漁業関係者が上越自動車学校直江津教習所沖の水深 100m の地点で採取した。所有者の祖父（故人）が「全面を覆っていた貝殻を落としたら仏像だったので大事にしていた」ということである。江戸時代末から明治時代の製作と考えられる。31 と同じ所有者による個人蔵で、新出資料である。

D 地点不明

1) 珠洲焼 (図版 32-49 ~ 51、図版 33-52 ~ 54)

49 ~ 51 は、個人が能生小泊の漁業関係者から入手したもので、名立沖から海揚がりした可能性が高い。『金大考古』〔佐々木 2011〕での写真報告が初出であるが、今回の調査で改めて実測図の作成及び写真

撮影を行い掲載した。49は、叩き大甕片で、器高46.4cm・底径17.8cmを測る。大きく破損しているものの、口縁から底部まで遺存していることから、図上復元を行った。推定される口径は56.0cm程であるから、中甕に分類すべきかもしれない。外面の叩き目は階段状を呈する。吉岡編年IV2期の所産である。50は、片口鉢で、口径30.9cm・器高12.7cm・底径12.0cmを測る。口縁部を3ヶ所欠く。器形は緩やかに内湾し、口縁内端をわずかに内側上方へ引き出す。器面内側は、横位方向の凹凸が目立つ。鉢目は13目一単位で、9条がやや弧を描きながら放射状に入る。その内、少なくとも4条(2本)は中央を跨いで連続して引かれている。吉岡編年II期の所産である。51は、片口鉢で、口径29.3cm・器高12.7cm・底径12.6cmを測る。器形は50に似る。鉢目は8目一単位で、8条(4本)がほぼ直線的に放射状(「米」字状)に入る。内面の凹凸が著しい。吉岡編年II期の所産である。底部中央に直径1.0cmの円孔が穿たれているが、これは後世(引き揚げ後)に植木鉢として再利用されていたためのもので、流通時ないしは消費時の工作ではない。52は、双耳壺である。口径12.9cm・器高16.8cm・底径10.0cm・胴部最大径20.7cmを測り、完形である。胴部中央付近に最大径を持つ球形に近い器形で、頭部は極めて短い。口縁端部下端は下方や外側に僅かに引き出される。肩部には横位方向の双耳が充存する。ロク口成形で、内外面をロクロナデし、底部には回転糸切り痕が残る。吉岡編年I期の所産である。貝の付着は顕著ではないが、泥痕が認められる。能生地区の個人所有で新出資料である。53は、叩き中甕である。口径16.8cm・器高33.3cm・底径11.7cm・胴部最大径35.1cmを測り、完形である。胴部に歪みが認められる。器形の特徴から吉岡編年のII期の所産とみられるが、外面の叩き目が綺麗な絞糸状にならず階段状となることから、III期まで下る可能性も考えられる。54と同じ所有者の所蔵である。本品は、能生町史口絵〔能生町役場1986〕に写真が掲載されているが、今回の調査で初めて図化され、実測図を掲載することができた。また、写真は新たに撮影したものを掲載した。54は、片口鉢で、口径42.3cm・器高19.5cm・底径14.7cmを測る。器形は、底部から直線的に開きながら立ち上がり、口縁部直下で括れた後、口縁部上端に顕著に内傾する平坦面を作り出し、口縁部へと至る。口縁端部は丸みを持ち、上面には櫛目波状文が全周する。片口部は小さく、浅い。鉢目は5目一単位とし、内面全面に密に施されている。吉岡編年VI期の所産である。53と同じ所有者の所蔵である。引き揚げた方は亡くなっているが、生前の聞き取りで「名立沖から揚げた。続けて揚がる時と数年間姿を見ない時がある。潮の流れで砂に隠される時があるのかも知れない」と述べている。正確な地点は不明だが、クリ(岩礁)近くの印象があるとすれば、名立川河口から見て右手(東側)の「川尻前」の可能性が考えられる。新出資料である。

2) 鑷(図版33-56・57)

56と57は、上越市名立区名立小泊の^{御前}神社境内に奉納されている鑷2点である。両方ともコンクリート製の台座に埋め込まれている。56は和船で用いられたもので、長さ約125cm(下部は埋め込んでいるため正確ではない)、四爪の幅65cm・爪長27~28cm・爪の基部幅5.5cmである。上部の環は外径10.5cm・内径縦幅17.5cmで、これに外径18cmの金輪が付いている。57は基部の環にシャックル金具が付き新しい。

E その他の

所在が不明であるが、名立海底遺跡第一群付近の徳合崎沖で、1968年(昭和43)10月に能生筒石の漁業関係者により、珠洲焼大甕1点、同中甕1点、同片口鉢2点が揚げられている〔室岡1972〕。室岡

によれば、1972年の段階で既に骨董屋や好事家へ渡った片口鉢や小壺などの複数の海揚がりした珠洲焼の存在が知られていた。また、名立沖揚陸陶質土器群第一群から1km程海岸に近い、水深約100mの地点からは、錨3点が引き揚げられている。その内、1点は四爪で、長さ3mを測る。残り2点は棹・爪ともに短いものであったという〔室岡1972〕。なお、詳細は不明であるが、1965年（昭和40）頃には「ヒラメの絵が描かれた壺」が揚がったことがあり、既に売却されたとの証言もある。近代以降の海揚がり品では、直江津港で石炭が大量に揚がるという。柿崎漁協長の話では「柏崎市笠島からも同様に石炭が大量に揚がり、焚き付けにしていた」ということである。

F 小 結

上越・糸魚川地域からは、58点の海揚がり品を提示できた。今回、残念ながら2点の行方が不明であつたが、残る56点はすべて実見し、資料化することができた。そのうちの約6割である35点が新出資料である。本報告の掲載に快く同意頂いた所有者の方々に改めて敬意と御礼を申し上げる次第である。これらの新資料の公開により、水中考古学研究が更なる深化を迎えることは疑いがなく、加えて、未知の資料がまだ何処かにひそりと埋もれているのではないかという期待を抱かせるに充分な情報を提供できたと思う。そして一方では、本紙で報告した資料が映し出す情景についても、海中に沈んだ、あるいは後世に引き揚げられた歴史のほんの一側面にしか過ぎないということを我々に教えてくれている。

さて、全58点中の内訳は土器・陶磁器が53点(91.4%)と圧倒的多数を占め、その他は石器1点、鐵錨3点、木像仏1点があるに過ぎない。土器・陶磁器では、珠洲焼が48点(90.6%)と大多数を占め、ほか、須恵器3点、越中瀬戸焼1点、土製人形1点がある。時期別にいえば、弥生時代1点、古代3点、中世48点、近世（～近代）2点、不明（錨・木像仏）4点となり、中世の資料が突出している。先に示したように、中世の資料は珠洲焼のみと偏向しており、本地域における中世資料の突出性と、その内訳の偏在性については、生産・流通時の社会的背景は勿論のこと、揚陸・保管に至る現代的諸問題についても深く検討する必要があるものと考えられる。

また、本地域の海揚がりした海域をみると、全58点中42点が「名立沖」である。名立沖は名立海底遺跡として遺跡登録されている地域を含み、第13図に示したように広域な範囲を指す呼称である。かつて、室岡が報告した際にも第一～五群の揚陸地点（第一～三群は同じ地点）を含ませており、今回の聞き取り調査でも更に複数の揚陸地点が存在していることが判明している。また、名立沖として包括した海揚がり品の中では、珠洲焼が40点と最も多いのであるが、その生産年代については著名な「六個一組セット」（図版29-33・34、図版30-35～38）を始めとする吉岡編年Ⅱ期の製品が多くみられるものの、Ⅰ期まで遡りうる資料や、Ⅲ～Ⅵ期の資料も散見される。そして、同海域からは須恵器も確認されている。このことは、「名立沖」において海没時期の異なるグループが地点毎、あるいは同地点に累積して複数存在している可能性を示唆するものとも考えられる。今後は、GPS座標データなど用いた個々の詳細揚陸地点の把握と揚陸状況の聞き取り等によるグルーピングが沈没船、あるいは海没集中地点の特定に有効な分析手段となり得るであろう。

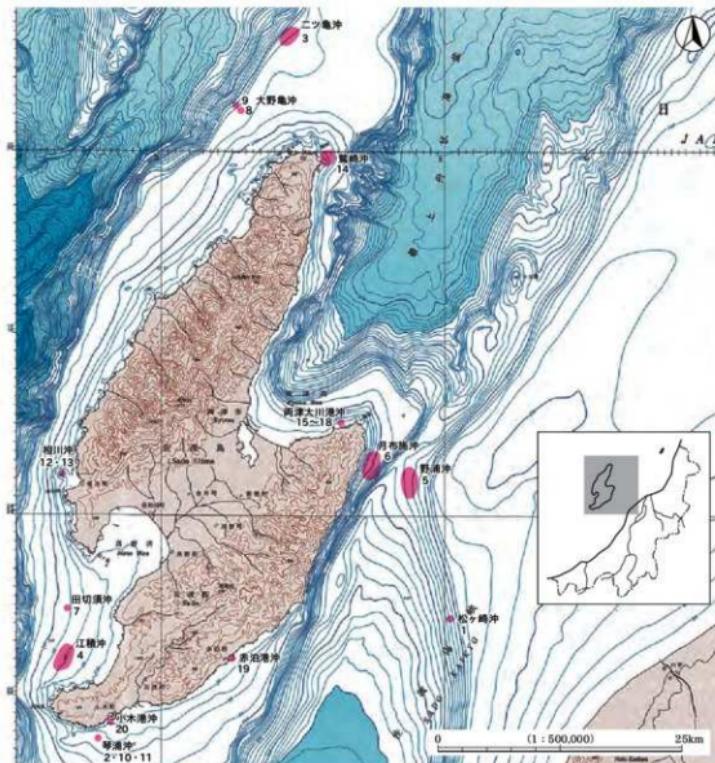
数多くの焼きものが沈むこの危険水域を、昔人は如何にして越えようとしたのか、興味は尽きない。

6 佐渡地域の海揚がり品

A 概 要

佐渡地域の海揚がり品は、佐渡島の沿岸域～15kmの海域で掲陸し、水深は約20～200m前後である。他の地域のように限定的な地点に集中することなく、鷺崎沖、二ツ亀沖、大野亀沖、相川沖、月布施沖、野浦沖、江積沖、田切須沖、両津大川港沖、松ヶ崎沖、赤泊港沖、小木港沖、琴浦沖というように、島の東西南北にわたって、いずれの海域でも海揚がりしている。そのため、個々の記述は種別ごとに行なった。

佐渡地域では、底引き網漁などに伴い、須恵器や珠洲焼といった陶磁器が採集されてきた歴史は比較的新しい。1982年（昭和57）に初例が掲がっており、海揚がり品の研究は、1988年（昭和63）に佐藤俊策が『佐渡考古歴史』第13号【佐藤1988】に報告したことから始まる。その後、佐藤俊策が1989年（平成元）に『佐渡考古歴史』第16号【佐藤1989】と『佐渡考古歴史』第17号【佐藤1989】で資



第16図 佐渡地域海揚がり地点

料紹介を行い、1998年（平成10）に小熊博史による「佐渡海峡から揚陸された縄文土器」『長岡市立科学博物館研究報告』第33号【小熊1998】が発表された。小熊論文では松ヶ崎沖海揚がり縄文土器の記載が中心であるが、1998年当時の佐渡沖出土海揚がり資料の位置図が全て掲載され、今日の佐渡海揚がり研究の礎となっている。その後、2011年（平成23）には、佐々木達夫らによる『金大考古』第69号で、土器以外の海揚がり品についても集成されている。

今回の調査では、『佐渡考古歴史』・『佐渡海峡から揚陸された縄文土器』『長岡市立科学博物館研究報告』・『金大考古』に掲載された海揚がり資料を元に、資料の追跡調査を行った。一部の資料については所有者の移転などに伴い所在を確認できなかったが、幸いにして全資料の8割に近い個体を実見することが叶った。また、今回の調査により、新資料も確認でき、当初の予想を上回る成果が得られた。

B 土器・陶磁器

1) 縄文土器（図版34-1）

深鉢で、口縁部と胴部上半の一部を欠く。残存部で器高18.4cm・最大径20.2cm・底径11.2cm・器厚0.8cmを測る。器形は頸部が屈曲したキャリバー形となり、残存部の外形や文様の割付から、口縁部が内湾する4単位の波状口縁と推定される。長期間海底にあったため、器面が著しく摩耗し、かつ貝殻の付着した跡と推定される部分が白色化しているため、文様や調整は明瞭でないが、外面には半截竹管文を主体とした文様が施文されている。口縁部は、4単位の波状部に沿って半隆起線文と連続爪形文が施される。波頂部下は円形に押圧され、左側には燃系侧面圧痕文Rが見られる。胴部上半は4条の半隆起線文を横方向に施文することで、頸部無文帶と区切り、胴下半は縦方向の半隆起線文を配置することで文様を区画している。また、区画内の上部には竹管による蓮華文、下方には渦巻状に入り組んだ半隆起線文を描き、さらには綾杉状の刻目を充填している。底面には縦紐と横紐（R）が直交した網代痕が存する。内面は口縁部から胴部上半は横方向のナデ、胴部下半から底部ではケズリ調整されている。縄文時代中期前葉の新崎式期のものと考えられる。1982年（昭和57）10月23日、松ヶ崎沖で底引き漁中に、北緯37°54'・東経138°40'、水深約250mの松ヶ崎沖海底（第16図1）から揚陸されたもので、個人蔵である。

2) 須恵器（図版34-3・5、図版35-6）

3は甕で、口径21.8cm、最大径41.6cmを測る。口縁部から胴部上半の一部が残存するのみで、ほとんどを欠損する。口縁は「く」字状に外反し、口縁端部は面取りされ、外側に引き出される。肩部は強く張り出す。外面は縦方向の平行叩きに横方向の沈線を3～4条巡らし、内面は同心円状の叩き目が認められる。1983年（昭和58）4月17日、二ツ亀沖（第16図3）で底引き網漁中に、水深200mの砂地の海底より海揚がりしたものである。5は甕で、口径26.0cm・器高48.5cm・最大径37.4cm・器厚平均1.1cm・底部厚1.6cmを測る。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形である。口縁は「く」字状に外反し、口縁端部は面取りされ、強いナデにより窪みが生じている。肩部に最大径を持ち、倒卵形を呈し、底部は丸底である。外面は平行状、内面は青海波状の叩き目が認められる。内外面とも貝殻が付着している。9世紀と考えられる。1988年（昭和63）12月7日、野浦沖3.1浬（約5741m）の地点（第16図5）で底引き網漁中に、水深約250mの海底から海揚がりしたものである。6は長頸瓶で、口縁部を欠く。残存部で器高25.5cm・最大径17.2cm・底径10.7cmを測る。最大径を胴部上半1/3程の所に持つ。胴部は肩が張らず、底部は高台の端面が内傾する。外面胴部上半及び底部に貝の付着が認められる。小泊窓跡の製品と推

定され、9世紀後半頃と考えられる。1983年（昭和58）12月20日、月布施沖（第16図6）で底引き漁中に、北緯38°01'・東経138°41'、水深130mの海底から海揚がりしたものである。3・6は佐渡博物館、5は両津郷土博物館収蔵資料である。

（鹿取 渉）

3) 近世陶器（図版35-8・9）

8は、口径20.3cm・底径11.5cm・高さ10.4cmを測る。産地不明の近世陶器黄釉鉢の完形品である。ロクロ成形で、底面を除き内外面全体を横位のロクロナデ調整を施しており、器面には凹凸が著しい。釉はカラシ色を呈する失透性の黄釉で、底部付近は無釉で、釉塊は下方へ重れていることから、底部を擒んで釉を濁け掛けしたものと考えられる。口縁部上面は平坦面を作出しており、釉が大堆把に拭き取られている。そのため、釉が薄く残った部分が赤褐色に発色しており、刷毛目目的な視覚効果をもたらしている。底面は平底で、調整痕はない。底部内面には目積みなどの痕跡はないが、底部外側には長径2.2～2.3cmの楕円形の痕跡が2ヶ所に見られる。團子状目積み痕であろうか。胎土は黄白色を呈し、長石を多量に含み軟質である。無釉部は黄褐色に発色する。器表は焼きハゼによる空隙が目立つ。9は、口径2.4cm・底径9.5cm・高さ27.4cmを測る。産地不明の近世陶器灰釉徳利の完形品で、いわゆる「貧乏徳利」である。灰釉は乳白色を呈し、外面全面に施されている。器表には鉄絵で「因松川」「松露油」と筆で描かれている。胴部外側には6.5cm間隔で4ヶ所に目積みの痕跡が認められる。底部は「ハ」字状に低い高台を削り出しており、高台内底面は反時計回りに回転ヘラケズリで調整されている。頸部と底部外側にはゴカイ類が付着している。両者は姫津集落の漁業関係者により大野亀沖（第16図8・9）の東経138°21'8''・北緯38°25'5''付近の地点で、8は平成3年4月23日に水深150mから、9は昭和57年2月に水深200mから底引き網漁中に引き揚げられたものである。どちらも新出資料、個人蔵である。

（相羽重徳）

4) 所在不明資料（図版34-4、図版35-7）

佐渡沖からの海揚がり品であり、『佐渡考古歴史』第16号[佐藤1989]及び『佐渡考古歴史』第17号[佐藤1989]に掲載されているが、今回の調査で所在が不明であった資料である。

土師器（4）長胴の甕で、口径11.8cm・器高19.7cm・最大径14.0cm・器厚0.7cmを測る。最大径が胴部上部にあり、胴部はあまり張らず、底部は丸底で安定しない。器厚は厚手で、外面には指頭圧痕が明瞭に残り、粘土紐の巻き上げ痕が所々に見られる。また、頸部と胴部の一部は摩耗しているが、ハケメらしき痕跡が微かに認められる。内面には貝殻が付着し、成形の痕跡として粘土紐の巻き上げ痕が残り、下部ほど明瞭に見られる。胎土は粒子が細かく、よく焼き締まって硬い。色調は暗黃褐色を呈する。完形品である。昭和60年頃、江積沖で底引き網漁中に、水深約73mの海底から揚陸されたものである。

近世陶器（7）産地不明の鉄釉徳利で、底径11.3cm・現存高20.8cm・最大径16.7cm・最小径3.8cm・高台高0.9cmを測る。口縁部から頸上部を欠損する。外面全体及び底部に岩礁性の細く白い貝殻が付着する。最大径を胴下半部に持ち、肩はあまり張らない。頸部で急激にすぼまるが、口縁部に向かって外反する。いわゆる「ラッキヨウ徳利」である。底部は上げ底で、疊付には回転糸切痕が残る。高台の一部は直径4.4cmの半円形に削り抜かれている。底部外側は粗いヘラケズリで、中央部がやや突出する。ロクロ成形で、特に内面に引き上げ痕が明瞭に見られ、頸部は凹凸が著しい。器厚は頸部が0.3～0.4cmと薄く、底部へ近づくにつれて1.0cmを測り、厚さを増す。胴部下半まで鉄釉が掛かり黒褐色を呈する

が、軸境は失透性の白い軸溜りが生じている。胎土は粒子が細かく、鉄分を多く含み、褐色を呈するが、底部外面はやや焼成が悪く、赤褐色を帯びる。1982年(昭和57)9月、田切須崎から西方7.3km、稚鯨港から南南西9.5kmの地点で底引き網漁中に、水深約85mの海底から海揚がりしたものである。また、図版34-3と同じ二つ亀沖から須恵器壺〔佐藤1988〕、高瀬沖から焰燈が海揚がりしたというが〔佐藤1999〕、所在不明であり、実測図・写真もない。今後の発見が期待される。

C その他の海揚がり資料(図版34-2、図版35-10・11、第17図、第18図)

2は磨製石器で、全長31.0cm・刃部幅16.5cm・基部幅約4.0cm・最大厚4.2cm・重さ800gを測る。淡緑灰色の頁岩製である。長期間海底にあったため摩耗が著しく、かつ貝殻付着跡と推定される部分が白色化している。1993(平成5)年頃、琴浦沖の南方4km、水深約45mの海底で定置網漁中に掲陸されたもので、個人蔵である。所有者によると国学院大學に送付し、石器と鑑定を受けたとのことだが、海中の摩耗により製作痕・使用痕が明瞭でなく石器でない可能性もある。今後の研究に期待したい。

10は石製鉢である。口径40.5cm・器高21.0cm・最大径50.0cm・重量25.0kgを測る。丸底で、胴部から口縁部にかけて内湾する器形を呈するが、歪みがあり、成形は整っていない。色調は暗灰~灰黄色を呈する。底面の器厚の薄い部分が一部欠損している。口縁部の一部は幅25cm程の弧状に窓が空けられているようにも看取され、内面にはススが付着しているようにも見えることから、風炉などの可搬性火器(爐)として使用されていた可能性も指摘できる。11は鉄製用途不明品で、比重は高く、ずっしりと重い。最大長69cm・最大幅41cm・厚さ15cm・重量23.0kgを測る。貝などの付着による表面の白色化が著しく、原形は窓いしれないが、錨などの鉄製品の一部と思われる。10・11は2と同様に琴浦沖の海底から掲陸されたものである。第17図12~18と第18図19は和船の錨で、先端が4つに分かれた四爪錨である。12・13は相川沖の一里岩付近で姫津集落の漁業関係者によるメガニ漁中にかかり、引き揚げられたものである。表面には貝類の付着が認められる。14は最大長210cm・最大幅160cmを測る。

鷺崎沖で引き揚げられたものである。15~18は大川の津神社境内展示品。江戸時代に北前船が大川港停泊中に急な時化にあり、錨の網を切って避難した際のものと伝えられ、近年大川港沖20mの海底より引き揚げられている。ちなみに大川港は北前船の寄港地であり、津神社前の岩場にはかつて船を繋ぐ



第17図 その他の海揚がり資料(佐渡地域1)

ため岩に穴を開けた「船繫ぎ岩」が多数残されている。15は欠損品で、現存長55cm・現存幅50cmを測る。16は最大長175cm・最大幅106cm、17は最大長185cm・最大幅110cm、18は最大長177cm・最大幅113cmを測る。19は赤泊港内から引揚げられた佐渡奉行御座船の錨と伝わるものである。最大長167cm・最大幅85cmを測る。20は小木港沖から明治時代以降に引き揚げられた御影石の石材である。これらは、明治初年頃に函館市五稜郭の台場築造用に漱



第18図 その他の海揚がり資料（佐渡地域2）

戸内海から運ばれる途中、遭難にあい海中に沈んだものである。後年に引き揚げられ、荷揚場の外壁に再利用していくが、1971年（昭和46）の小木港整備事業の際に撤去された。長らく旧小木町により保管されていたが、1985年（昭和60）からは海運資料館前の公園に屋外展示され、歩道の敷石やベンチとしても利用されている。御影石は、上面形が長軸185～190cm×短軸60～80cmを測る直方体をなす切石が17個体、同110～120×60～70cmが7個体、同70～90×60～70cmが5個体の計29点のほか、経緯不明の円筒形の船つなぎ石2個体が展示されている。御影石は佐渡のみならず、新潟県のとりわけ海岸部で様々な石材として使用され、小木地区宿根木では石鳥居や石橋、船つなぎ石などがみられる。

なお『金大考古』第69号に掲載されている両津郷土博物館の鉄錨は、聞き取り調査により海揚がり資料でないことが判明し、小木海幸丸展示館の鉄錨も昭和30年代初頭まで使用されていた佐渡海峡最後の和船「幸丸」のもので海揚がり資料ではなく、小木海運資料館及び佐渡国小木民俗博物館の鉄錨もその由来が不明で海揚がり品か確証がないため、いずれも今回は掲載を見送った。（鹿取 渉・相羽重徳）

D 小 結

佐渡地域における海揚がり品は、越後側のように珠洲焼に集中するといった時期的な偏りはなく、繩文土器から近世陶器といった幅広い時期の資料が掲載されている特徴がある。これは、島という地勢的特徴ゆえに古来より海上交易が発達していたためであろう。また、佐渡は17世紀以降には金銀山の大盛りにより、相川を中心とした物資の一大集積地となり、かつ西廻り航路における北前船寄港地を抱えていたことから、当初は難破船などによる多くの近世陶磁器を中心とした海揚がり品が存在するのではないかと思われた。しかし、結果としては予想外に少ない。これは江戸時代の文献を見ても船が難破した記事がほとんどなく、あっても早急に回収したような記載であり、海揚がり品の少なさの一因を物語っている。他には底引き漁をあまり行っていない現状もある。しかし、今後の展開次第では資料の増加が見られるかもしれない。

現在確認できる海揚がり陶磁器の多くは完形品である。しかし、過去には破片が網にかかったという証言もある。今回の新発見資料である8・9が掲載された大野亀沖では、破片は漁の邪魔になるため全て海に捨てたとの聞き取り情報もあり、海揚がり陶磁器の完形品率の高さは、むしろ船上の漁業関係者による選別行為によるものかもしれない。おそらく海底には多くの破片資料も沈んでおり、図版34-3の胴部以下を大きく欠いた須恵器などは、その実態を示していると考えられる。（鹿取 渉）

第IV章 まとめ

1 海揚がり品とその分布－陶磁器を中心にして（巻末図）

新潟県の海から揚がった陶磁器や鎧、仏像など 206 点を掲載した。その内訳は縄文土器・弥生土器・古墳時代の土器各 2 点、平安時代の須恵器 21 点、灰釉陶器 1 点、珠洲焼などの中世陶器 110 点、近世陶磁器 10 点、中国青磁 1 点、磨製石器 1 点、石錐 1 点、仏像 3 点、石仏 2 点、土人形 1 点、セメント製蛸壺 1 点、西洋船の船飾 1 点、蒸氣船シャフト 1 対など多様である。これらの中でも、越佐海峽から揚がった縄文時代中期前葉と中期中葉の深鉢が注目される。縄文人が実際に越佐海峽を往来したことを示す資料として貴重であり、全国的に見ても陸地からこれほど離れた地点の出土例は稀有である。

各海域を概観すると、村上地域は 3 地点で 9 点を確認した。珠洲焼を中心に古代の灰釉陶器、近世陶器がある。資料の多くは旧磐舟文華館収蔵品で 6 点がある。栗島周辺が好漁場で、その周辺からの海揚がり品が多いが、集中地点は見つかっていない。新潟地域は 4 地点で 18 点が確認されている。沖合 10km、水深 200m 前後のタラバが海岸に平行してあり、漁場は出雲崎沖から新潟市西蒲区角田沖あたりまで広がる。陶磁器は、縄文土器と弥生土器が各 1 点、古代の須恵器 3 点、中世の珠洲焼 12 点が確認されている。古くは明治時代に揚がり新聞報道されたものもあり、以前から注目されていた地域である。新潟市の北部から新発田市、胎内市にかけて今回は海揚がり品の情報はないが、胎内市教委によると荒川河口付近から和船の錨が回収され保管しているという。長岡・出雲崎地域は 65 点と最も多くの海揚がり品が確認されている。揚がる地点は「寺泊沖タラバ」と「出雲崎沖」である。寺泊沖タラバでは珠洲焼を中心に弥生土器や須恵器、15 世紀代の中国竜泉窯系の青磁の盤など多彩な遺物を確認した。長岡市寺泊の大河津分水沖約 11km、水深 200m 前後に通称「かなばち」と呼ばれる地点がある。この周辺に網が入るとかなりの確率で珠洲焼が揚がるという。地元では沈没船の存在も言い伝えられている。出雲崎沖は三島郡出雲崎町の沖、5km から 10km、水深 80m から 200m 前後を指し、珠洲焼を中心に須恵器も揚がっている。柏崎地域は 5 地点などで 8 点を確認している。当地は底引き網漁（ごち網漁）があり盛んではなく、それを反映してか遺物量は少ない。椎谷沖で古墳時代前期の產と見られる古式土師器の壺が揚がった。また、須恵器が目立つことも特徴で、中越沖地震後、海底に掘り出された古木が漁の障害になることから、大規模な古木の回収作業が行われた。その際に、須恵器の横瓶も回収されている。上越・糸魚川地域は 7 地点などで 58 点と、長岡・出雲崎地域に次ぐ海揚がり品を確認している。そこで珠洲焼が集中する上越市名立沖は昭和 30 年代から海揚がり品が報告され始めた。大陸棚縁辺の水深 170m ~ 200m は「名立タラバ」と総称される海域で、引き揚げ地点は數か所知られているが、「川尻前」と「塚の前」が多く揚がる地点とされる。特に「塚の前」は船が沈んでいると地元では言い伝えられ、実際に多くの珠洲焼が集中して海揚がりしている。佐渡地域では瀬戸内から北前船で運ばれた御影石を含む 48 点が確認されている。ここでは地点を限定することなく、島の周辺全体 13 か所で揚がっている。沿岸域から沖合 15km、水深 200m 前後である。海揚がり品が確認できた例は比較的新しく、1982 年に縄文土器が旧畠野町松ヶ崎沖の水深約 250m で発見された。小泊産須恵器の積出しが行われた場所であるが、須恵器の大量出土は報告されていない。北端の大野亀の西北には近世陶器の集中地点が存在する可能性がある。

以上のように、海揚がり品は本県の海域の深浅を問わず各地域で揚がっているように見えるが、実際は底引き網漁の盛んな地域に多いなど、漁法の違いによって海揚がり品の数が左右される傾向にある。一方、遺物引き揚げの多い各タラバは大陸棚縁辺にあり、深海から湧き上がる潮と風による三角波の発生など航海や操業の危険性が指摘されている。タラバからの海揚がり品が多い理由には、こうした海況事情も背景にあると考えられる。また、この指摘や事実から当時の航路の想定に至る可能性もうかがえる。

2 各時代の海揚がり品

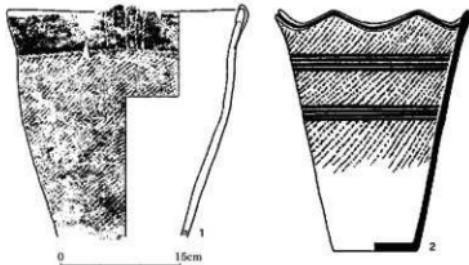
A 縄文時代

縄文時代の海揚がり品は、縄文土器 2 点と石器 1 点である。これらについて若干の検討を行い「まとめ」に代えたい。

佐渡松ヶ崎沖海揚がりの縄文土器（図版 34-1）は、千石原 II 式土器〔寺崎 2009〕独特の器形を有し、口縁部の円文直下に撚糸側面圧痕文が押圧されているのが特徴的である。このように撚糸文が押圧されている土器は、東北地方南部の大木 7b 式土器の影響が認められるものと理解され、新潟県内はもとより富山県や石川県といった北陸地方や岐阜県飛騨地方というように広域に分布している。中でも糸魚川地域においては、長者ケ原遺跡第六群第二類土器〔藤田・清水 1964〕や、六反田南遺跡 D 類 3 類土器（第 19 図）〔新潟県教育委員会他 2012〕として分類されるなど目立つ存在である。しかし、それらの土器は口縁部が無文帶で、口縁部と胴部の境界に横位あるいは口縁部に縱位に撚糸が押圧され、以下は縄文が施文されているだけである。このように有文土器に押圧されている例は、浅鉢を除けば、大木 7b 系の深鉢でもそれほど多くはなく、まして北陸の新崎式土器をベースにして生じた土器に付けられた例はほとんど記憶がない。時期的には前葉から中葉とされているが、当資料は前葉の範疇は越えないと考えられるものである。

角田沖海揚がりの縄文土器（図版 5-5）は、その細身で底部から口縁部へと直線的に外傾する器形と、4 条 1 単位で三段構成の横位平行沈線文が特徴である。このような特徴に近い土器は、福島県など大木式土器圏では確認できなかったが、新潟県長岡市馬高遺跡の土器群中（第 19 図）〔中村 1958、長岡市 1992〕にわずか 1 個体であるがみることができる。それゆえこの土器は、大木式土器の外核圏に当る信濃川中流域の土器に出自を求めることができそうである。なお、この土器は、前述の縄文土器よりも 2 時期ほど下った中期中葉後半の所産と考えられる。

これら 2 個体の縄文土器は、陸地に接するまたは近接した地点ではなく、陸地から遠く離れた地点から海揚がりしていることが特筆すべき点である。まさしく、舟で移動中に舟が沈んだ、あるいは何らかの事情で舟から海中に没したかのいずれかによって生じた現象である。この事実は、すでにいくつかの論考〔富権 1984、今村 2006a・



第 19 図 関連縄文土器

2006b, 寺崎 2011】で指摘されているところの、縄文時代前期末から中期前半の日本海における活発な海上交通の実態を証明する具体的な証拠として重要である。また、このように陸地から遠く離れた海中深くより完全な形に近い縄文土器が引揚げられた事例は、この 2 例を除いて新潟県内はもとより近接県の日本海沿岸においても聞いたことがなく、全国的にみても稀な事例と思われる。なお、この 2 点の縄文土器は、地域は異なるが、近接すると思われる地点から海揚がりしている点も注目である。

琴浦沖海揚がりの磨製石器（図版 34-2）は、実見した限りでは、製作痕・使用痕は認められなかった。しかし、過去に表面の摩耗や貝殻の付着痕跡のため確認できないという指摘や、大学関係者から石器という鑑定をうけたこと、青竜刀形石器の変容形態の可能性【堅木 2007】という評価があるため掲載するに至った。先述されているように、今後の研究に期待したいところである。

B 弥生時代・古墳時代

弥生時代と古墳時代の海揚がり品は、新潟地域の間瀬沖と長岡・出雲崎地域の寺泊沖タラバで弥生土器が 1 点ずつ、長岡・出雲崎地域の寺泊沖タラバと柏崎地域の石地沖で古式土師器が 1 点ずつ、上越・糸魚川地域の浦本浜沖から弥生時代と考えられる石錘 1 点の計 5 点が引揚げられている。

弥生土器は、間瀬沖のもの（図版 6-12）は残念ながら現在所在不明で、実見して調査を行うことはできなかつた。以前の紹介【寺村 1956】によれば、完形品で終末の千種式壺形土器 B 類【新潟県教育委員会 1953】に類似とされているが、現在では北陸東北部（能登・越中・佐渡・越後）系壺【滝沢 2005】とされているものであろうか。寺泊タラバのもの（図版 8-1）は、口縁部が欠損しているが、有段口縁を持つ北陸南西部（越前・加賀）系の壺とされている。この両者は、同じ北陸系でも前者は在地系、後者は非在地系というように出自が異なり、同じ後期という時期にあっても前者は、後者よりも新しいと考えられる。古式土師器（図版 19-1）は、新潟県域では今までに海揚がりした例は寺泊沖タラバ例のみで、今回の石地沖例で 2 例目である。両者ともに口縁部が大きく欠損しているため口縁形態は不明であるが、前者は球胴丸底の壺、後者は底径が小さく胴部が大きく張り出す形状などから二重口縁の壺形土器ではないかと予測できる。石錘は、今後検討を要するが、孔は持たないものの西日本出自の可能性を指摘しておきたい【石川県埋蔵文化財センター 2013】。

いずれにせよこの 5 点は、数は少ないが弥生時代から古墳時代にかけての日本海交通・交易の様子をうかがうことができる貴重な資料である。今後このような類例が増加し、その一端が明らかになることを期待したい。

C 古代

古代の海揚がり品は、須恵器 21 点、灰陶軸器 1 点、土師器 1 点がある（第 1 表）。圧倒的に須恵器が多く、器種別では壺 10 点、横瓶 6 点、長頸瓶 4 点、水瓶 1 点で、貯蔵具以外の海揚がり例はない。現状では出雲崎沖周辺で横瓶が多く引き揚げられている。須恵器の産地については、佐渡地域の小泊産、あるいは上越地域の高田平野西部丘陵産と推定できる個体が含まれる¹⁾。一方で産地不明品も半数以上にのぼる。

掘隆地域	掘隆地点	種別（器種）
上越地域	名立沖	須恵器 3 点（長瓶瓶 1・水瓶 1・壺 1）
新崎地域	荒浜沖	須恵器 1 点（横瓶 1）
	樅谷沖	須恵器 1 点（横瓶 1）
	石地沖	須恵器 1 点（壺 1）
長岡・出雲崎地域	出雲崎沖	須恵器 6 点（横瓶 3・長瓶瓶 2・壺 1）
	寺泊沖タラバ	須恵器 3 点（横瓶 1・壺 2）
新潟地域	角田沖	須恵器 3 点（壺 3）
	東鳥・佐渡沖	灰陶軸器 1 点（短頭壺 1）
	二ツ庵沖	須恵器 1 点（壺 1）
	月布島沖	須恵器 1 点（長瓶瓶 1）
佐渡地域	野浦沖	須恵器 1 点（壺 1）
	江浦沖	土師器 1 点（長瓶瓶 1）

第 1 表 新潟県内における古代の海揚がり品

1) 須恵器の産地同定にあたり、春日真実氏から御教授いただいた。

海揚がり地点に注目すると、長岡・出雲崎地域を中心に、柏崎地域の荒浜沖から新潟地域の角田沖までの延長約50kmの海岸線に、数珠つなぎのように引き揚げ地点が集中する。一带は佐渡を対岸に控えた地域であり、小泊窯との関わりが気になるところではあるが、前述のように越佐海峡における須恵器の流通は小泊一窯で語れるほど単純なものではないようである。複数の産地（供給元）が関わっていることは明白で、小泊以外の産地を明らかにすることが今後の課題と言えよう。

D 中世

1) 概要

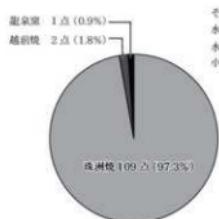
中世に属すると考えられる海揚がり品は113点ある。それらのうち、寺泊沖で漂流していたといわれる西洋船の船飾り（図版18-60）を除けばすべて中世陶磁器である。本報告で提示した新潟県における全時代の海揚がり品が206点であるから、中世陶磁器はその54.9%を占める。

産地別にみると、珠洲焼が109点（97.3%）と圧倒的に多く、その他は越前焼が2点（1.8%）と中国龍泉窯青磁が1点（0.9%）と僅かに3点が含まれるに過ぎない（第20図）。

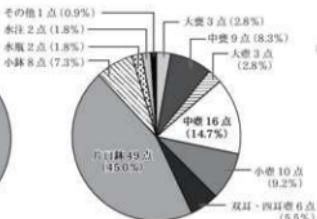
2) 珠洲焼の傾向

109点の珠洲焼を器種毎にみていく。壺は、大壺3点（2.8%）・中壺9点（8.3%）・法量不明壺1点（0.9%）であり合計13点（11.9%）である。壺は、大壺3点（2.8%）・中壺16点（14.7%）・小壺10点（9.2%）で合計29点（26.6%）があり、その他に双耳・四耳壺が6点（5.5%）ある。鉢は最も多く、片口鉢が49点（45.0%）、小型鉢が8点（7.3%）であった。その他、水瓶2点（1.8%）と水注2点（1.8%）がある（第21図）。

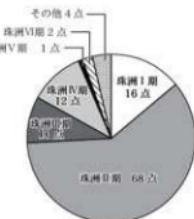
吉岡康暢が6個一組で「日常容器の一セット」〔吉岡1994〕と海上運搬のモデルケースと捉えた名立海底遺跡における第一群〔室岡1972〕の組み合わせは、中壺1点（16.6%）・中壺1点（16.6%）・小壺2点（33.3%）・片口鉢2点（33.3%）からなる（括弧内は構成比）。県全体の海揚がり珠洲焼の器種構成比をみると、外容器と成り得そうな壺（大壺・中壺・法量不明壺）は13点=11.9%で、中容器と成り得そうな小型製品（小壺・双耳壺・四耳壺・水瓶・水注・小型鉢）は合わせても28点=25.7%と低率で、片口鉢は逆に49点=45.0%と高率を示している。消費地遺跡においては、やはり片口鉢の出土比率が高いことを勘案すると、先の六個セットが常に積荷運搬の標準的な組み合わせであったとは必ずしもいえない可能性を示しているといえよう。



第20図 中世陶磁器の产地別構成



第21図 珠洲焼の器種別構成



第22図 珠洲焼等の時期別数量

3) 分 布

中世の陶磁器が引き揚げられた海域は、粟島沖、粟島～佐渡沖、佐渡沖（越佐海峡）、角田沖、弥彦沖、寺泊沖タラバ、出雲崎沖、柏崎沖（詳細不明）、名立沖、直江津沖、能生弁天岩沖、上越、糸魚川沖（詳細不明）がある。それぞれの海揚がり陶磁器の産地別、時期別の数量は第2表に示したとおりである。

産地は先述したとおり、珠洲が大部分を占める。時期別にみてみると、の中でも吉岡編年II期の製品が68点(60.2%)と多くを占め、中世後期のV期は1点(0.9%)、VI期は2点(1.8%)と極めて少ないことが特徴的である(第22回)。その他、中国龍泉窯青磁の盤が寺泊沖タラバから揚がっている。本品は、明代の15世紀中頃から後半の所産と考えられるもので、日本海側から完形で引き揚げられた例は極めて珍しい。また、出雲崎沖からは越前焼の播鉢(16世紀後半から17世紀初頭)と壺(15世紀後半～16世紀前半)が揚がっている。青磁と越前焼は共に単独の引き揚げで、珠洲焼などの同時代の陶磁器が伴わないことが特徴として挙げられる。

陶磁器が引き揚げられた海域毎にみていくと、時期的なまとまりがあることに気づく。粟島沖と粟島～佐渡沖では吉岡編年I期の珠洲焼しか揚がっておらず、該期の沈船、乃至は航路が存在していた可能性を示唆するものであろう。寺泊沖タラバと名立沖では多少のバラツキはあるものの、どちらも吉岡編年II期の珠洲焼が突出して多い。引き揚げ地点をみるといざれも、複数の漁業関係者により違う日に狭い範囲で引き揚げられていることから一括性は高く、該期の沈船の可能性が強く示唆される。吉岡編年II期の珠洲焼は、佐渡沖(越佐海峡)・角田沖・弥彦沖・出雲崎沖・柏崎沖でも揚がっており、広域な分布が認められる。続く、吉岡編年III期以降の珠洲焼には、目立った集中域はみられない。吉岡編年IV期の製品については、佐渡沖(越佐海峡)・角田沖・寺泊タラバ・能生弁天岩沖など多くの海揚がりが認められるが、吉岡編年V期・VI期に至ると今のところ、名立沖や上越・糸魚川沖に限られている。消費地遺跡においては同時期(III期前後)に出土量の減少は認められず、どちらかというと増加傾向にあることを勘案すると、生産量の問題ではなく、運搬能力の向上による沈没量の減少、あるいは航路の変更による水没地点・水深の変化等にその要因を求める方がより適切なように思う。本県の海揚がりにおける珠洲焼の極端な偏在性については、陸に築かれた中世遺跡からの出土陶磁器の組み合わせや変遷とは全く異なる点が興味深い。

E 近 世

1) はじめに

新潟県海揚がり陶磁器研究会における調査の結果 2014年(平成26)4月現在、海揚がりとして確認できた近世陶磁器は9点である。これは珠洲焼の109点に比べると圧倒的に少ない。その反面、新潟県内の近世遺跡からは大量の陶磁器が出土している。この出土量からすると近世において日本海を舞台とする活発な物流が営まれていたと容易に推察でき、これを裏付けるための文献資料も豊富に存在する。にもか

吉岡編年	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	その他	計
粟島沖	4							4
粟島～佐渡沖	3							3
佐渡沖(越佐海峡)	2	1		1				4
角田沖		1		1				2
弥彦沖		6						6
寺泊沖タラバ	1.5	28.5	5.5	2.5			吉岡I 船形1	40
出雲崎沖		2	1				越前2	5
利根沖(詳細不明)		1						1
名立沖	3.5	26	3	5.5	1	1		40
直江津沖	1							1
能生弁天岩沖				1				1
上越・糸魚川沖 (詳細不明)	1	2.5	0.5	1		1		6
計	16	68	10	12	1	2	4	113

註)複数の西周に跨る場合は、案分した。船形は木製。

第2表 海域毎の時期別陶磁器集計表

かわらず、なぜ海揚がり近世陶磁器が少ないのかについて若干の考察を加え、「近世のまとめ」としたい。

2) 出土遺物からみた新潟県における近世陶磁器の様相

海揚がり近世陶磁器について述べる前に、まず新潟県内にもたらされた近世陶磁器の実態を把握するため、県内各地の近世遺跡から出土した陶磁器について概観する。

新潟県内の近世遺跡の調査は1981年の藏王堂城跡の調査を嚆矢として、以後、徐々にではあるが調査例が増加し¹⁾、これに伴い県内の近世陶磁器の様子が次第に明らかになってきた。

そこで、これまで新潟県内の近世遺跡から出土した陶磁器の中で圧倒的数量をほこる肥前陶磁器において、特に出土量の多い17世紀から18世紀代の碗と皿を中心にその様相を概観することとする。ちなみに肥前陶磁器は16世紀末以降、佐賀県の有田町、伊万里市から長崎県の波佐見町、佐世保市三川内町を含む一帯で生産された。

新潟県内における肥前陶磁器については最も初期の岸岳系唐津碗から確認でき、さらに16世紀末から17世紀初頭の胎土目の皿は少量ずつであるが内陸部でも出土している²⁾。また日本海側に出土例が多い17世紀前半の砂目の溝縁皿は広範囲の遺跡から出土し、その量も比較的多い。初期伊万里の皿も同様に量的には少ないが出土範囲はかなり広い。17世紀後半の磁器碗・皿については佐渡奉行所跡で定量出土し、越後の各遺跡でも若干量の出土がある。

新潟県内で肥前陶磁器の出土量が爆発的に増加するのは18世紀である。18世紀前半では、碗は陶器の具器手碗と磁器の梅樹文や内外面に網目文が描かれたU字高台粗製碗、皿は陶器の銅線釉と透明釉のかけ分けの小皿、磁器の蛇の目釉剥ぎで高台径が狭く高台無釉のものや縁文様に折れ松葉文を描く小皿、もしくは内外面とも無文の平形の小皿が主流となる。この時期、陶器、磁器の割合はほぼ同じではあるが、碗皿別では皿の出土が多い。それが18世紀後半になると大半の遺跡で碗皿のほとんどが磁器となり、その多くが波佐見産のもので占められる。磁器碗はU字高台粗製碗が主流で、他に薄手半球碗、小丸碗、筒形碗というように器種も豊富になる。陶器碗は出土量が激減し肥前産のものが見られなくなる。反面、関西系の小杉碗や薄手の半球碗がみられるが、出土量は少ない。皿も肥前磁器のみとなり、陶器は見られなくなる。磁器皿は見込みコンニャク印判五弁花を施した高台径の広い丸皿が主流となる。碗皿の出土割合は逆転し、碗の出土が多くなり、皿が減少する。19世紀前半でも碗は肥前磁器のみで、器種は小丸碗、薄手半球碗に加えて広東碗、小広東碗が見られるようになる。反面、皿の出土はさらに減少する。なお19世紀中頃になると江内遺跡、高田城下鍋屋町遺跡では瀬戸戸美濃の端反碗が出土するようになり、皿はほとんど見られなくなる。

肥前以外の製品は18世紀後半の関西系の小杉碗、19世紀の瀬戸戸美濃の端反碗に代表されるように碗において若干量ずつ認められる。その他18世紀代の越中瀬戸の広口壺等が沿岸部、および信濃川・阿賀野川水系の遺跡から出土する。擂鉢においても17世紀以降、肥前産が大半を占める。しかし18世紀前半には山口県の須佐唐津の擂鉢が少量ずつ比較的広範囲に出土する。他に佐渡や沿岸部には堺産のものが数点みられる。以上、新潟県内における大まかな近世陶磁器のようすを見てきたが、各遺跡ごとの若干の相違はあるにしても、大筋においてこのような傾向から大きく逸脱することはない。

1) 長岡城跡、新発田城跡、佐渡奉行所跡、高田城下鍋屋町遺跡、村上二之町、近世新潟町広小路地点、柏崎町遺跡、江内遺跡、元屋敷遺跡等

2) 岸岳系唐津碗は見附市の元屋敷遺跡から2点出土している。胎土目の皿は元屋敷、江内、柏崎町等で出土している。

3) 越後旅商と新潟県内への近世陶磁器の流通

次に新潟県内の遺跡から大量に出土している肥前陶磁器が誰により、どのような流通ルートを通り新潟県内にもたらされたかを文献資料から探ることとする。

肥前陶磁器の流通は大まかに「伊万里商人が有田の窯元から製品を仕入れ、それを筑前商人、紀州商人などの他の旅商人に売りさばく。その旅商人たちが全国各地に肥前陶磁器をもたらすといった構造」[伊万里市歴史民俗資料館 1995 1 頁] がみられる。伊万里商人は松尾、前川、武富、大塚家など天保年間で約80軒を数え、その商業活動は様々であった³⁾。

伊万里商人と越後との関連を記す資料の一つに前川家『銀控帳』がある。これは今町での前川家と筑前商人との取引が記載⁴⁾されている。また 19 世紀初頭、旅商から武富家宛ての手紙には越後三条の神子嶋貞助、新潟の播磨屋勘三郎、布屋忠吉といった越後旅商の名が記載されている〔伊万里市歴史民俗資料館 1995 33 頁〕。さらに伊万里津の陶磁器移出先および数量を記した 19 世紀前半の記録⁵⁾によると越後には 9,000 俵〔伊万里市歴史民俗資料館 1995 2 頁〕を積出している。これは江戸・大阪を除いた地方市場での取扱量としては多い。さらに 1850 年（嘉永 3）建立の伊万里立町天満宮鳥居には越後連中という記載があり、1871 年（明治 4）正月には越後商人 7 名が伊万里に滞在した〔伊万里市歴史民俗資料館 1995 43 頁〕という記録があるように伊万里商人と越後および越後旅商との関係をうかがわせる文献資料が多く存在する。

山形真理子の論考〔山形 2008〕によると幕末・明治初期に美濃西浦屋と取引のあった新潟商人 17 名のうち伊万里の武富家と取引のあった越後旅商として三条の神子屋〔神子嶋カ〕貞助、新潟の播磨屋勘三郎、布屋忠吉、亀田屋十蔵、三国屋喜助、寺田屋善次郎、内藤屋権兵衛、植木屋長右衛門、伏見屋岩藏、備前屋新吉の 10 名を挙げている〔山形 2008 339 頁 表 7-17〕。また明治 25 年（1892）刊行の『日本全国商工人名簿』の「各國陶器卸商」には越後陶器卸商として布屋忠吉、伏見屋岩藏、寺田屋善次郎、内藤屋権兵衛の 4 名の名がある。

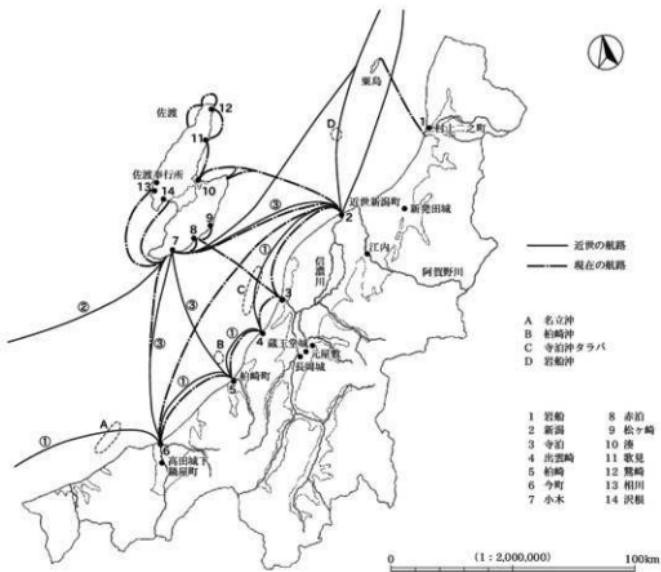
次に肥前陶磁器積載船の新潟港への回漕ルートについては伊万里津から下関を経由して新潟などの日本海沿岸にもたらされた〔山形 2008 340 頁 図 7-2〕とされており、新潟港の位置付けとして「新潟が回漕による全国的な陶磁器取引のネットワークの拠点とされ、全国と地場市場を中継する機能を持った港町」〔山形 2008 342 頁〕としている。

そこで新潟港への回漕ルートを大まかに示すと第 23 図のようになる。ルートは①越中伏木から今町→柏崎→出雲崎→新潟、②能登から小木→新潟、さらに③今町、柏崎→小木→新潟が考えられている。①と③のルートは中世のルートとも大きく相違しないものと思われる。それは漁場である名立沖タラバ、寺泊沖タラバから多くの珠洲焼が揚っていることから、中世のルートは名立タラバ、寺泊沖タラバ、もしくは

3) 松尾家は主に筑前商人を取引相手としており、また窯元への資金の貸し付けを行っていた。前川家は有田の各窯元の製品を取扱い、手船で伊万里～大阪間の回漕を行っていた。前川家もその取引先は主に筑前商人で、18 世紀末から 19 世紀前半まで年平均 80 人ほどの旅商人（大多数が筑前商人）と取引し、取引高のピークは 18 世紀末から 19 世紀初頭で鉛 1,093 貫にも及んだ〔伊万里市歴史民俗資料館 1995〕。

4) 宽政 5 年（1793）、筑前商人の山鹿治太郎が前川家への焼物代金返済において代物弁済の一一部として越後産布一反を納め、翌寛政 6 年（1794）に山鹿本人が今町で銭 6 貫 300 勘を前川善三郎に支払っている〔伊万里市歴史民俗資料館 1995〕。同じく筑前商人の芦屋文次郎は前川家への借用 21 貢 98 勘（利息込）を寛政 6 年（1794）6 月、今町で借用代金の一部を前川善三郎に支払っている〔伊万里市歴史民俗資料館 1995〕。

5) 明治 25～29 年頃 花鷗芳樹編集『伊万里歳時記』の巻之二 天保 6 年〔1835〕「伊万里積出陶器萬國圖」より〔伊万里歴史民俗資料館 1995 1 頁〕



第23図 近世等の航路

その付近を通過していたものと考えられる。さらに現在の航路も図に示すように若干のズレはあるにしても同様のルートを通っていることから、近世のルートもほぼ同様であると推測できる。このようなルートを経由して新潟湊に揚陸された陶磁器は基本的に廻船問屋から仲買人の手に移り、そこからさらに地廻り廻船宿、川売り商人を経て、沿岸および内陸市場にもたらされていった〔山形 2008 - 342 頁〕とされる。

4) ま と め

以上、見てきたように伊万里商人・筑前商人の今町での取引や越後陶器商の存在と活動記録、回漕ルートの確保があるにもかかわらず調査の結果、近世陶磁器の海揚がり品が 10 点と圧倒的に少ない。その理由として①掲がった近世陶磁器はその場で取扱選択され、大半が廃棄されたため、②現在の漁業海域と近世の海難事故多発地点が一致しないため、および陶磁器積載船の海難事故率が低かったため、③新潟湊に入津した陶磁器積載船の割合は全体からみれば少なかったためなどが考えられる。

①と②の漁業海域については近年、寺泊沖タラバでは近世陶磁器が掲がったという話は聞いたことがなく、また過去に陶磁器が網にかかったという話もあるが、その際、破片は海に捨てたという聞き取り調査の結果⁶⁾がある。②の海難事故であるが尼瀬湊を含む出雲崎湊を例にとると、江戸期を通して出雲崎付近での海難事故は 87 件起きており、うち 55 件は出雲崎湊に歸泊中に難船・破船事故に遭った〔出雲崎町史編さん委員会 1993 - 530 頁表 7 より〕とされ、出雲崎近海の海難事故の実に 6 割以上を占め、沖合

6) 平成 23 年 11 月 20 日寺泊町個人宅での聞き取り調査

での事故率を上回っている⁷⁾。また出雲崎の内藤家の廻船万歳丸の例では蝦夷・西国を年3往復（多い年は4往復）し、30年余りで難船・破船は5回〔出雲崎町史編さん委員会 1993 598頁〕とされ、その事故率は5.5%と低い数値となる。この数値がすべての廻船に当てはまるわけではないが、これを大きく逸脱することはない想定できる。③については元禄10年（1697）、新潟湊に入津した廻船は約3,500艘であり、同年の移入品のうち陶磁器の取扱い金額は約1,000両であった。これは移入品全体の取扱い金額460,020両の約2%に過ぎない。単純計算しても廻船のうち陶磁器積載廻船は年間70艘ということになる。さらに天保6年（1835）、「伊万里積出し凡そ陶器荷高国分」〔伊万里市歴史民俗資料館 1995 4頁〕によれば伊万里湊積み出し合計313,100俵のうち、越後向けは9,000俵であり、これは18世紀から19世紀初頭にかけて肥前陶磁器の国内需要が増加した時期と呼応し、元禄年間に新潟湊での陶磁器取扱量はかなり増加したと推測できる。しかし新潟湊全体からみれば陶磁器の取扱い量は少なく、また事故に遭う確率も②の数値からして低かったと推測できることから、海揚がり近世陶磁器が発見される率が低いことも納得できる。

以上のように、現時点での新潟県内における近世陶磁器の出土量に比べて海揚がり近世陶磁器が少ない理由を推測した。しかしだ未調査地域や調査不足のところもあることから、今後も新たな海揚がり近世陶磁器が確認される可能性も十分あり、それによって新たな展開になることも十分ありうる。

3 海揚がりの珠洲焼における加飾法

A はじめに

本稿では、今回の調査において主体を成す珠洲焼に施された加飾法を概観し、特に刻文・刻印・櫛目文を中心とした、時に窯記号として理解されることもある装飾的記号について扱う。

珠洲焼の加飾法に関しては、1980年代後半から1990年代前半にかけて、吉岡康暢によって各地消費地資料および窯跡資料の検討が行われ研究成果がまとめられており〔吉岡 1989a・b, 1994〕、珠洲焼研究の到達点となっている。吉岡は珠洲焼に見られる加飾法を6項目に分類しており、なかでも刻文は「器体の局部に笠状ないし草木状器具により記号状の图形・図文を一単位刻記」したもの、対して刻印は「器体の局部に小円形を基本型とする印判に图形・図文を刻み押捺」したものと定義されている〔吉岡 1989〕。その他の加飾法には装飾印打文・櫛目文・刻画・刻銘（書）があり、櫛目文および刻画については今回の調査でも確認された。

B 調査で確認した加飾法

109点（所在不明資料を含む）のうち、半数にあたる54点で加飾法を確認した。器種は甕・壺（T種・K種・R種・四耳壺）・片口鉢・水瓶・水注であり、双耳壺（図版33-52）を除き一通りの器種に認められたと言える。49点と海揚がり点数が最も多い片口鉢では六割近い27点に加飾法を確認。主要3器種にあたる甕・壺・片口鉢の中では比較的高い加飾率を示している。また、点数は僅かだが水瓶および水注では全個体の胸部

7) 近世の出雲崎湊は「淵の入口は幅6間～11間、深水は1丈～1丈2尺で、水底にはばへ（岩礁）があり現在のような防波堤のある湊ではなかった。」「各湊そのものが北西に面しているため、時代化で北西方面からの風が吹くときには北西方向から波が強く打ち込んで来て、漁船し滞航しているときは風や雨をしのぎにくい淵であった」〔出雲崎町史編さん委員会 1993 531頁〕

に何らかの加飾が認められた。¹⁾

加飾法を技法で大別すると、刻文 14 点、印字 16 点、櫛目文 24 点、刻線 4 点となる²⁾。最も多いのは櫛目文で、刻文・印字がこれに続く。刻線は特に少ない。

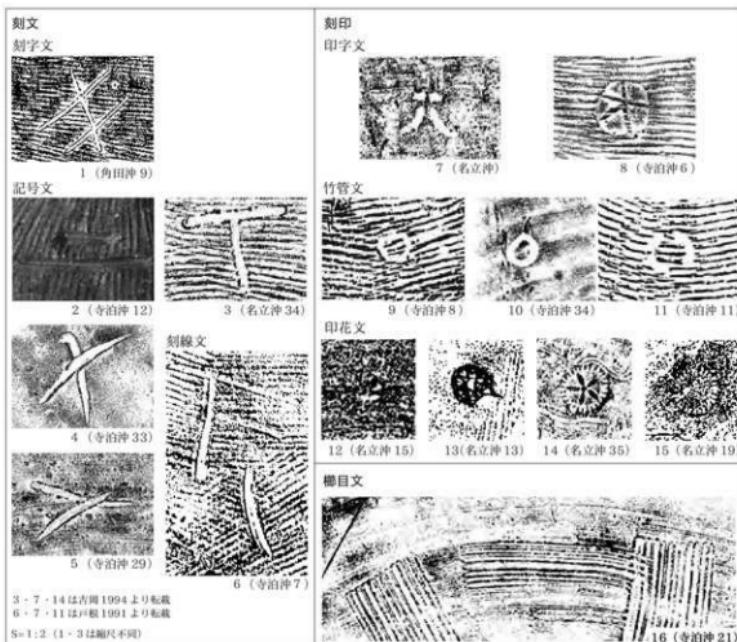
1) 刻 文

甕（角田沖 9）、壺 T 種（名立沖 34・寺泊沖 7・9・10・12）、片口鉢（寺泊沖 19・23・24・29～33）に認められる。

甕に刻記されたものは 1 点のみと少ない。胴部上位に記された「キ」字状の記号文（第 24 図 1）で、右肩上がりの 2 条の平行線の後、これと交差する直線が引かれる。所謂、片仮名の「キ」字と同じ筆順である。

壺では中・大型の T 種に限られ、「ニ」字状の記号文（寺泊沖、第 24 図 2）、「T」字状の記号文（名立沖、第 24 図 3）、「J」字状の刻線文（寺泊沖、第 24 図 6）の 3 種を確認できた。寺泊沖 7 は縱位の刻線文が少なくとも 2 条、やや離れて刻記され、更に横位の「ニ」字状の記号も付されているようである。

片口鉢で 9 点中 8 点とほぼ全てを占める刻文は「X」字状の記号文（第 24 図 4・5）であり、同様の記



第 24 図 主な加飾法

- 1) 水瓶・水注に関しては掲載点数が少なく、本稿で特に取り扱った片口鉢に見られる加飾法と共に考察を進めるのは煩雑であるため、今回は加飾法の内訳点数を挙げるのみに留めた。
- 2) 弥彦沖 16・名立沖 35、寺泊沖 9・49は加飾法の重複が認められた個体であり、加飾法毎に集計を行うとその総数は、資料点数とは異なる。

号文は他器種では認められなかった。刻線の太さや2画の交差角度は個体毎に異なるが、第1画が右下がり、第2画が左下がりで統一されており、画一性がうかがえる。消費地遺跡出土資料における「×」字状記号について、「筆順はほとんど例外なく第一画左下がり、第二画右下がりで交差させている」[吉岡 1994]とされており、今回確認した片口鉢の一群は、刻記された記号が同様でありながらも、施文手順や施文方向が異なる³⁾。

片口鉢における施文位置は内面で、上位に寄る傾向がある。施文位置と片口の位置とでは、相關関係は認められない。片口鉢においては、器体の正面観よりもむしろ正置した際に記号自体が認識されることを念頭に置かれたためであろう。

2) 刻印

壺（寺泊沖6）、壺T種（寺泊沖8・9・11・49）、壺R種（名立沖35）、片口鉢（名立沖15・17・18・19・22・25・37・38・寺泊沖34、出雲崎沖42）に認められた。

壺に押捺された刻印は○に「大」字を伴うもの（第24図8）で、寺泊沖の1点のみと非常に少ない。

壺T種の場合、刻印が押捺された個体は寺泊沖に限定される。3点が竹管状工具によって押捺されており、中壺2点は後述する寺泊沖・出雲崎沖揚陸の片口鉢2点と同様、カマボコ形を呈する（第24図9）。小壺（寺泊沖11）に認められた刻印は、3ツ切れの○（第24図11）である。所在不明資料の寺泊沖49には印花文が認められる。

壺R種は確認点数16点中、名立沖35の1点のみで少ない。同地点揚陸の片口鉢（名立沖17）と同種の、

	名立沖	出雲崎沖	寺泊沖	弥彦沖	角田沖
日期	壺T種 刻文「T」	片口鉢 刻印 ○	壺 刻印 ⊕	壺T種 刻文「二」	片口鉢 櫛目 ■■■
	壺R種 刻印 ⊖		片口鉢 刻文「×」	櫛目 ■■■	櫛目 ■■■
	片口鉢 刻印 八八八八カ ●△○ ⊗○		刻文「×」 刻文「×」 刻文「×」 刻文「×」 刻文「×」	刻印 ○ 櫛目 ■■■	
III期			壺T種 刻文「二」 刻文「 」「 」 刻印 ○ ※	片口鉢 刻文「×」 刻文「×」 刻文「×」	
IV期			壺T種 刻印 ○ ◎		壺 刻文「キ」

第25図 時期別・海揚がり地点別の主な加飾法

3) 「×」字に限らず、刻文・刻印が施された時点での器体・工人の向きによって、同種の記号であっても筆順や文字種は異なる。例えば「×」字状の記号では、施文時の向きが90度異なるだけで左下がり・右下がりが逆転する。ただし、ヘラ状工具の刃の入り具合や払いの向き・器体の正面観を検討することによって、本来意図された記号・文字の向きを推測することが可能である。

〇に五弁花が伴う（第24図14）刻印が押捺される。

また、片口鉢は最も刻印の種類が豊富で、印花文・記号文・竹管文が混在する。印花文（第24図12～15）は、4点とも名立沖から海揚がりした資料であり、名立沖17および名立沖19は外輪に類似性が認められる。また、名立沖近海では八字上に点を伴う記号文（第24図7）が3点ある。名立沖22は生物の付着により判然としないが、同種の記号文である可能性が高い。寺泊沖・出雲崎沖では2点の竹管文を確認、寺泊沖34および42は2点ともカマボコ形の竹管状工具が押捺されており、壺T種と共に揚陸地域が限定される。

3) 横 目 文

壺T・K種（名立沖11・寺泊沖49）、壺R種（名立沖9・10・35・36・寺泊沖15・16・弥彦沖18）、四耳壺（直江津沖44・寺泊沖13・48・粟島沖4・粟島～佐渡沖7）、水瓶（名立沖29）、片口鉢（名立沖27・28・上越糸魚川地域54・寺泊沖20・21・36・弥彦沖13・16・17）に認められる。

横目文の種別では、壺類の胴部および片口鉢の口縁部に施入された横位波状文が合わせて18点と多い。波状文以外では、片口鉢の内面上位に施文される横位の直線的な横目文（第24図16）が、6点（寺泊沖20・21・36・弥彦沖13・16・17）認められる。卸目の施入後、同じ原体を用いて卸目の上端付近に施入されており、吉岡Ⅱ期の個体に限られるようである。寺泊沖および弥彦沖から揚陸した個体に認められ、弥彦沖13・17は法量や卸目の施入方法に共通点がある。この横位の横目文は、刻文や刻印を持つ個体では認められず、これ自体が刻文・刻印と同様の役割を担っていた可能性が高いと考えられる。

C 考 察

海揚がり陶磁器に関しては、名立沖の一括資料に関する報文にて「窯記号」と表現された〔室岡1972〕ように、資料に何らかの刻文・刻印が施されていた場合、窯記号として認識されることがある。しかし、既に吉岡が示したように、刻文・刻印は多様であり、また、「×」や「|」といった記号種は時期毎に若干の多寡が認められるものの、時期を通して施文されるため〔吉岡1994〕、器種や器形と合わせた総合的な評価無くして、それ単体で時期を特定できるものでもない。加えて、これまでに報告されている窯跡資料においても、刻印・刻文が特定の窯跡と直接対応するとは断定し難い。

だが、今回の調査では、第25図に示したように、以下の点で揚陸地域毎の優位性が窺える結果となった。特に吉岡Ⅱ期における片口鉢は、名立沖近海では八字形の刻印および印花文が中心となる。出雲崎沖から寺泊沖にかけては竹管文が見られ、寺泊沖では刻文「×」字形の割合が高い。また、寺泊沖から弥彦沖にかけては横位の横目文が記号的に配された個体が認められる。

特定の記号種において、単独ないしは隣接する2海域にかけて偏在し、印花文の1例を除き同種の記号が名立沖周辺海域と寺泊沖周辺海域では併存しないことから、海揚がり地点は2海域に大別することができる⁴⁾。ただし、特に沈船の存在を想定した際に、以下の2点について検討の余地が多分に残

4) 加飾法の偏在性に関しては、以下的一群による問題点を含む。名立沖16・21・26・寺泊沖22・25・26・35・弥彦沖16の8点は、卸目条数が奇数であり、通常の入れ組み技法によって卸目を施入後、1条分卸目を追加する。この追加の1条は、本来、当該期の卸目が底部中央を通り対角線方向に一度に施入されるのにに対し、底部中央を跨がない。弥彦沖16は例外的に横位の横目文を持つが、その他の7点は刻文・刻印を持たず、他の記号とは排他的な関係にあると言えよう。ただし、刻文・刻印で見られたような揚陸地域の偏在性は認められず、卸目を1条追加する行為が生産・流通の実態を反映した記号として解釈し得るか、今後の検討を要する。

されている。つまり、同種の記号が一箇所に集中するのではなく、隣接2海域にまで広がりを見せる点と、寺泊沖の「×」字状の刻文や竹管文に見られたような、時期を越えて同じ記号種が用いられた事例が認められる点である⁵⁾。今後、資料の増加によって、上記2点の検討が進展すれば、生産集団・流通圏に関する新たな展望が得られるであろうと期待する。

4 新潟県海揚がり品の位置づけ

19世紀、スイスの湖底から遺物が引き揚げられ、これが水中考古学の始まりとされる。日本では1908年に諏訪湖底で遺物が採集され、次いで琵琶湖の湖底遺跡調査が続いた。1975年に始まった江差に沈む開陽丸、1977年の小豆島沖の水の子岩、1988年の宇治島沖のいろは丸の調査と発掘などへ、水中考古学の調査は進展する。1980年以降、日本の水中考古学を牽引する伊万里湾の鷹島海底遺跡調査が継続され、2011年に木造船体も海底の砂地下で発見された。鹿児島・沖縄でも海底の調査が続く。

1970年代以降、水中考古学は日本も含めてその調査範囲を世界中に広めた。沈没船引揚の金銀財宝をオークションにかけ、巨万の富を得た話も耳にする。しかし、それは考古学調査に似て異なるもので、墓荒らしと似た骨董品商売である。沈んだ場所を秘密にし、高く売れる物を引き揚げ、考古学の基本である記録が欠けることも多い。最近の学術的な沈没船の発掘調査は韓国、中国、台湾、フィリピン、ベトナム、ブルネイ、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タイ、インドなどアジア各国で行われ、欧米は地中海やカリブ海で長年にわたる調査で水中考古学の進展が著しい。そうしたなかで、海に囲まれ海を利用してきた日本は、華々しい沈没船の引揚という点では水中考古学の後進国となった。それでも北部九州や沖縄で継続的に海底の調査が継続され学術的な成果を挙げるが、日本海沿岸の調査は数少ない。

新潟県は1896年(明治29)に海揚がり珠洲焼があり、1911年(明治44)3月の新潟新聞に珠洲焼、同年に坪井正五郎が朝鮮土器(須恵器)、1912年(明治45)に大野雲外が绳文時代石棒を海揚がり品として紹介し、初期段階の水中考古学の先端を歩んでいた。寺村光晴の海揚がり陶磁器研究を経て、日本の水中考古学が画期を迎えた1970年代、室岡博は1972年に名立沖引き揚げの6個一組の陶磁器を紹介し、1977年に寺泊タラバの引揚品を確認したように、国内で新潟県は最先端を走る研究状況であった。

新潟県の特徴の一つであるが、沈没船そのものは未発見ながら、その積荷であったと推定される物が数多く引き揚げられた。しかも多くの引揚品は漁業関係者の情報で場所がほぼ特定できる。タラバを中心に広範囲で見つかるが、角田沖、寺泊沖、出雲崎沖、荒浜沖、椎谷沖、石地沖、名立沖など集中する地域もある。

明治時代から始まる底引き網漁による海底からの引揚品は、繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、珠洲焼、中国青磁、越前焼、備前焼、唐津焼、越中瀬戸焼、有田波佐見焼など各時代の陶磁器が多い。日本海側に共通して広がる有田波佐見焼など広域流通品と、越中瀬戸焼など地域限局的流通を示す物がある。鎌倉室町時代の珠洲焼が半数を占めるのも、能登半島から東北に向かう船の積荷の時期的な特

5) 寺泊沖・出雲崎沖の竹管文に関しては、Ⅱ期の片口跡とⅢ・Ⅳ期の壺類で類似した刻印が用いられている。壺Ⅲ種を吉岡Ⅳ期に比定、片口跡を吉岡Ⅱ期に比定したこと、帰属年代に大きな隔たりが存在する。同様の記号がⅡ期からⅣ期に渡る長きにわたって同地域に流通した可能性を考えるとともに、資料の帰属年代の再考察を含め、今後の課題としたい。また、寺泊沖・出雲崎沖の34・42に關しては竹管文だけではなく腰高型の器形、法量にも類似性が認められたため、本来は一括遺物であった可能性が考えられる。寺泊から出雲崎にかけては漁場が近接していることから、海底・陸上を問わず資料の移動があったことは想像に難くない。

徵を反映していた。石仏、石製品、鐵鑄、鐵製品、仏像も見られる。

それらは縄文時代中期、弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町戦国時代から江戸時代の物を含み、船による人々の移動と交易を語り、時代的な変遷状況が追える。珠洲焼の詳細な編年で地点を見ると、鎌倉時代の物資流通の一端がうかがえる。しかし、陸地の遺跡の豊富な出土品と比べ海揚がり品は僅かで、朝鮮陶磁器はなく中国陶磁器も1点に過ぎない。若狭湾は越前焼や弥生土器が一般的で、新潟県は珠洲焼や須恵器が多いという地域性も見える。

多くの地点から引き揚げられた200点を越える物が、網羅的に考古学的情報である写真・実測図・説明記述を作り時代や種類が特定され集成された。歴史資料としての価値を高め、日本海の海上交通史や文化交流を探る水中考古学の中核となる基礎資料群となる。さらなる研究の基盤として利用が望まれ、各地の博物館で展示公開され、様々な視点から強い光を投げかけることが期待される。

おわりに

本書は、2011年度から2014年度の足掛け4か年をかけて、新潟県海揚がり陶磁器研究会が行った新潟県域における陶磁器をはじめとした海揚がり品の集成報告書である。対象地域は、村上地域、新潟地域、長岡・出雲崎地域、柏崎地域、上越・糸魚川地域、佐渡地域の6地域で、7市1町1村におよぶ。その成果は本書の第1章から第IV章および報告書抄録のとおりである。ここでは、その特徴と課題に触ることで「おわりに」としたい。

各地域で確認できた海揚がり品の掲載地点は、村上地域が3地点、新潟地域が4地点、長岡・出雲崎地域が3地点、柏崎地域が5地点、上越・糸魚川地域が7地点、佐渡地域が13地点の合計35地点である。粗密はあるがその分布は、佐渡市の松ヶ崎沖～柏崎市の笠島沖、上越市の名立沖～糸魚川市の浦本中浜沖というように海岸線に沿って連なる、あるいは粟島周辺や佐渡周辺というように点在する状況である。新潟市北部から胎内市にかけてなど海揚がり品が確認できていない海域も、「存在しない」というよりも、過去に底引き網漁が行なわれていたか否かによる結果ではないかということが、聞き取り調査の結果からうかがえることから、今後海揚がり品が確認される可能性は十分にあると思われる。一方詳細な地点は、海揚がりしてからかなりの時間を経た資料もあること、漁業関係者が掲載地点にそれほど注意をはらっていないかったこと、漁業経営上の問題から詳細な地点は明らかにできないなどの理由から不確実な部分もある。今後その部分をいかにして明らかにしていくかが課題のひとつであるが、私的調査の限界性を感じるケースも少なくなかったことから、今後は行政主導または行政と合同の調査が望まれる。

海揚がり品は、縄文土器から御影石まで時代・種類共に多様で、陶磁器類では縄文土器・弥生土器・古式土師器が2点ずつ、須恵器が21点、土師器と灰釉陶器が1点ずつ、中世陶器が112点、中国青磁1点、近世陶磁器が9点である。陶磁器以外では御影石29点、錠14点、仏像3点、石仏2点の他に8種類8点である。陶磁器では中世陶器が7割を越えるというよう突出して多く、中でも珠洲焼がほとんどを占めている。このような現状は何を物語っているかを述べることは、日本海に面する周辺各県の状況が明らかにされていないため時期尚早であるが、日本海における船運を利用した珠洲焼の活発な流通網が存在したことがうかがえる。この他に、陸地から遠く離れた佐渡海峡において縄文土器2点が海揚がりしているという事実は、少なくとも5,000年余り前の縄文時代中期において、すでに舟を利用した日本海交通（交易）が存在したこと具体的に物語っている。

今回の調査で知り得た状況は、まさに「冰山の一角」に過ぎず、新潟県の近海には多数の遺物が存在することは確実で、今後も海揚がり品は増え続けるであろう。しかし海揚がり品は、陶磁器は破片のほとんどが廃棄され、完形品を持ち帰っても転売や譲渡されるものも少なくないという現状を鑑みると、行政が主導する何らかの保護対策の必要に迫られていることを感じずにはいられない。

最後に、今回の調査・報告のきっかけをつくっていただいた佐々木達夫金沢大学名誉教授をはじめ、調査・報告費用を助成していただいた三菱財團人文科学研究助成、公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金、財團法人高梨学術奨励基金、お忙しいにもかかわらず快く海揚がり品の記録、聞き取り調査、情報提供などにご協力いただいた多くの方々に、心より感謝致しますと共に厚く御礼を申し上げます。

本書が、今後の海揚がり品の研究の一助となればこの上ない幸いです。

引用・参考文献

- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する粗描－県内出土の報告例から－」『研究紀要』第 4 号 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳 2006 「東北系近世陶磁器雑考」『越佐補遺些』第 11 号 越佐補遺些の会
- 安藤正美 2008 「越後の江戸後期における庶民向け肥前陶磁器の様相」『第 18 回九州近世陶磁学会資料 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 東海・北陸・甲信越編』九州近世陶磁学会
- 石川県埋蔵文化財センター 2013 「福井ナカミチ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第 30 号
- 伊藤信太郎・室岡 博・金子拓男 1975 「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」『越佐研究』第 35 号 新潟県人文学研究会
- 今村啓爾 2006a 「繩文前末における北陸集團の北上と土器系統の動き（上）」『考古学雑誌』第 90 卷第 3 号 日本考古学会
- 今村啓爾 2006b 「繩文前末における北陸集團の北上と土器系統の動き（下）」『考古学雑誌』第 90 卷第 4 号 日本考古学会
- 伊万里市歴史民俗資料館 1995 『伊万里の陶器商人』平成 7 年度企画展図録 伊万里市歴史民俗資料館
- 伊万里市歴史民俗資料館 1996 『伊万里の陶器商人』平成 8 年度企画展図録 伊万里市歴史民俗資料館
- 出雲崎町史編さん委員会 1993 『出雲崎町史 通史編 上巻』出雲崎町
- 小熊博史 1998 「佐渡海峡から揚陸された縄文土器」『長岡市立科学博物館研究報告』第 33 号 長岡市立科学博物館
- 大野雲外 1912 「海底発見の石器に就て」『人類學雑誌』第 28 卷第 10 号 日本人類学会
- 大竹信雄 1990 「大地とくらし」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん室
- 海上保安庁 2000 『第 6662 号 海底地形図 1/200,000 能登半島東方』
- 海上保安庁 2002 『第 6661 号 海底地形図 1/200,000 佐渡海峡付近』
- 柏崎市立博物館 2006 「渚モノがたり－漂着物からみた越後・佐渡－」（フィールド・ワーク叢書② 第 51 回特別展図録）
- 春日真実 2007 「新潟県船上式名立沖揚陸須恵器水瓶について」『新潟考古学談話会会報』第 32 号 新潟考古学談話会
- 堅木宜弘 2007 「佐渡市小木地区琴浦沖揚陸の磨製石器」『越佐補遺些』第 12 号 越佐補遺些の会
- 亀井明徳[✉] 2001 『季刊考古 學基準資料としての貿易陶磁器』第 75 号 雄山閣
- 木村孝一郎 2008 「越前焼の研究ノート」『吾々の考古学』 和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 久我 勇 1996 「文化財編 第 2 章 和島村の指定文化財」「和島村史」資料編！ 自然・原始古代・中世・文化財 和島村
- 紅村 弘 1966 「三 猪魚具」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房
- 佐々木達夫・田崎稔也・渡邊玲 2011 「新潟県の海底文化財に関する調査」『金大考古』第 69 号 金沢大学人文学類考古学研究室
- 佐々木達夫[✉] 2013 『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進 海の文化遺産総合調査報告書－日本海編－』金沢大学考古学研究室編。特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所
- 佐藤俊策 1988 「両津市野浦沖の海底から須恵器壺が揚がる」『佐渡考古歴史（会報）』第 13 号 佐渡考古歴史学会
- 佐藤俊策[✉] 1989 「真野湾沖の海底より近世の船徳利が揚がる」『佐渡考古歴史（会報）』第 16 号 佐渡考古歴史学会
- 佐藤俊策 1989 「小木半島江積沖から揚がった土師器」『佐渡考古歴史（会報）』第 17 号 佐渡考古歴史学会
- 佐藤俊策 1999 『相川浜石（会報）』第 7 号 相川近世考古談話会
- 佐藤康行 1989 「寺泊における鰯漁の変遷とその漁業形態」『寺泊町史研究』第 5 号 寺泊町史編さん委員会
- 佐藤康行 1991 「寺泊における海の信仰と漁業技術について」『寺泊町史研究』第 7 号 寺泊町史編さん委員会

- 珠洲市教育委員会／能登町教育委員会 2011 「史跡珠洲陶器窯跡保存管理計画書」
- 高橋保雄 1994 「寺泊沖揚陸の珠洲焼口鉢」『新潟考古学講話会報』第13号 新潟考古学講話会
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷 ーいわゆる北陸系を中心にしてー」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 竹部佑介 2007 「寺泊タラ場揚陸の片口鉢」『越佐補遺些』第12号 越佐補遺些の会
- 坪井正五郎 1911 「越後の海底から引上げられた朝鮮土器」『人類學雜誌』第27卷第1号
- 鶴巻武則 1988 「第5編 文化伝承 (1) 第1章 神社と祭り」『寺泊町史』資料編4 民俗・文化財 寺泊町
- 寺崎裕助 2009 「新潟県における新崎式系土器 一縄文時代中期初頭後半から前葉の編年と型式一」『新潟県の考古学II』新潟県考古学会
- 寺崎裕助 2011 「縄文時代における移動・移住の一事象 ー新潟県糸魚川市六反田南遺跡と秋田県男鹿市大畠台遺跡の事例からー」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第12号 新潟県立歴史博物館
- 寺村光晴 1956 「越佐海峡タラバ揚陸の弥生式土器」『貝塚』第55号
- 寺村光晴 1957 「海中から揚陸された須恵器 ー越佐海峡タラバの考察其二」『若木考古』第47号 國學院大学考古学会
- 寺村光晴・久我勇 1960 「寺泊乃おいたち 先史遺跡について」寺泊町教育委員会
- 戸根与八郎 1991 「中世編 第5章 寺泊タラ場揚陸土器」『寺泊町史』資料編1 原始・古代・中世 寺泊町
- 戸根与八郎 1992 「新潟県粟島沖発見の灰釉短頸壺」『北越考古学』第5号 北越考古学研究会
- 戸根与八郎 1993 「第2章 中世遺物からみた出雲崎」『出雲崎町史』通史編 上巻 出雲崎町
- 戸根与八郎 1996 「原始・古代編 第5章 奈良・平安時代の和島村」『和島村史』資料編1 自然・原始古代・中世・文化財 和島村
- 富樫泰時 1984 「秋田県における北陸系の土器について」『本庄市史研究』第4号 本庄市史編さん室
- 中村孝三郎 1958 「馬高 No.1」長岡科学博物館研究調査報告第二冊 長岡市立博物館友の会
- 長岡市 1992 「馬高遺跡」『長岡市史 資料編1 考古』長岡市
- 新潟県教育委員会 1953 「千種」新潟縣文化財報告書第一(考古編)
- 新潟県教育委員会 1977 「IV 寺泊タラバ揚陸土器」『寺泊・出雲崎』新潟県文化財年報第16
- 新潟県教育委員会・肺新潟県埋蔵文化財調査事業 1996 「鶴越自動車道関係発掘調査報告書江内遺跡I」新潟県埋蔵文化財調査報告書第76
- 新潟県教育委員会・肺新潟県埋蔵文化財調査事業 2007 「第Ⅶ章第1節」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告XXIII 岩田遺跡!』新潟県埋蔵文化財調査報告書第176集
- 新潟県教育委員会・肺新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012 「六反田南遺跡IV」新潟県埋蔵文化財調査報告書第229集 新潟県教育委員会・肺新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 新潟市史編さん原始古代中世史部会 1995 「新潟市史通史編1 原始古代中世近世(上)」新潟市
- 新潟市文化財センター 2014 「新潟市文化財センター年報」第1号 新潟市文化財センター
- 新潟市歴史博物館 2014 「新潟市歴史博物館開館10周年記念特別展 大新潟凌展 図録」新潟市歴史博物館
- 西谷正直 2013 「季刊考古学 水中考古学の現状と課題」第123号 雄山閣
- 能生町史編さん委員会 1986 「能生町史」上巻 能生町役場
- 野上建紀 2000 「磁器の編年(色絵以外) 1.碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会
- 花ヶ前盛明 1997 「海からあがった珠洲焼」『名立町史』名立町
- 東中川忠美 2000 「陶器の編年 4.壺・甕」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会
- 藤田亮策・清水潤三 1964 「長者ヶ原」新潟県糸魚川市教育委員会
- 藤塚明 1995 「第4章 第2節 中世の暮らし」『新潟市史 通史編1 原始古代・中世近世(上)』新潟市
- 巻町教育委員会 2000 「巻町の文化財」第三集
- 松井広信 2013 「四爪鉄鋤の基礎的研究 一船に関わるモノの型式学的考察ー」『金沢大学考古学紀要』第34号 金沢大学考古学研究室
- 見附市教育委員会 1995 「元屋敷遺跡I ー見附市南部地区農業集落排水事業汚水処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー」見附市埋蔵文化財調査報告書第15

- 見附市教育委員会 2005 「県営圓場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III 元星敷遺跡II」見附市埋蔵文化財調査報告第21
- 室岡 博 1972 「名立沖海底遺跡」『頭城地方の海と海底・海浜遺跡』上越市立総合博物館教養叢書第一編 上越市立総合博物館
- 山崎龍教 1988 「第7編 文化財 第1章 文化財の保護」『寺泊町史』資料編4 民俗・文化財 寺泊町
- 山本 雄 1987 「荒浜沖海底遺跡」『柏崎市史資料集』考古篇1 考古資料 柏崎市史編さん室
- 山形真理子 2008 『藩陶器専売制と中央市場』 日本経済評論社
- 山口栄一 1994 「角田浜沖タラ場」『巻町史』資料編1 考古 巷町
- 吉岡康暢 1989a 『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
- 吉岡康暢 1989b 『日本海域の土器・陶磁器(中世編)』『人類史叢書』 六典出版
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

引用・借用図版

【挿 図】

- 第6図 〔珠洲市教育委員会／能登町教育委員会 2011〕
第7・9・10・12・13・16図 〔卷末図 〔海上保安庁 2000・2002〕〕
第14図 〔室岡 1972〕
第19図 〔新潟県教育委員会 2012、中村 1958〕

【図 版】

- 図版 3-8 〔戸根 1992〕
図版 4-1 〔佐々木 2011〕・2 〔新潟市史編さん原始古代・中世史部会 1995、新潟市歴史文化課歴史資料整備室〕・3・4 〔新潟市文化財センター 2014〕
図版 5-5 〔新潟市文化財センター 2014〕・6・8 〔山口 1994〕・7 〔新潟市文化財センター〕
図版 6-9・10・13 〔新潟市文化財センター 2014〕・11 〔巻町教育委員会 2000〕・12 〔寺村 1956〕
図版 7-14～18 〔新潟市文化財センター 2014〕
図版 8-2～5 〔戸根 1991〕
図版 9-7～9・11 〔戸根 1991〕
図版 10-12・14 〔戸根 1991〕・18 〔高橋 1994〕
図版 13-30 〔戸根 1991〕
図版 14-31・32 〔戸根 1991〕・33 〔戸根 1993〕
図版 15-35・37・39 〔戸根 1991〕
図版 16-43 〔戸根 1993〕
図版 17-47～50・52・53 〔戸根 1991〕・51・54～58 〔戸根 1993〕
図版 18-59 〔戸根 1991〕・60 〔鶴巻 1988〕
図版 19-4 〔山本 1987〕
図版 21-3 〔春日 2007〕
図版 23-14 〔吉岡 1994〕
図版 26-22～24 〔佐々木 2011〕
図版 27-25・27 〔佐々木 2011〕
図版 29-32 〔佐々木 2011〕・33・34 〔伊藤 1975〕
図版 30-35～38 〔伊藤 1975〕・39 〔吉岡 1994〕
図版 31-42 〔吉岡 1994〕
図版 34-1 〔小熊 1998〕・2 〔堅木 2007〕・4 〔佐藤 1989b〕
図版 35-7 〔佐藤 1989a〕

図 版

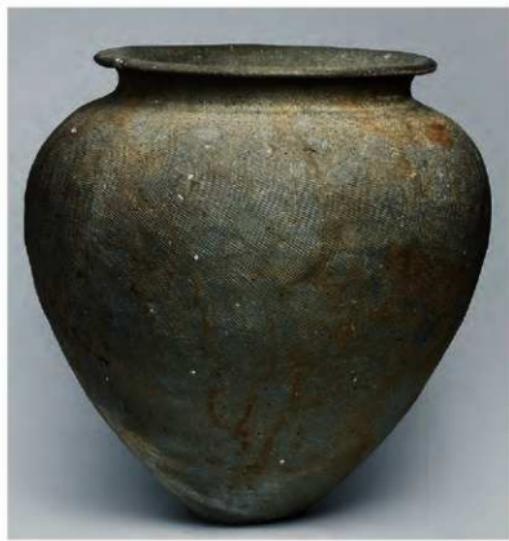
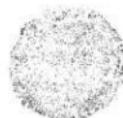
〔栗島沖〕



1



2

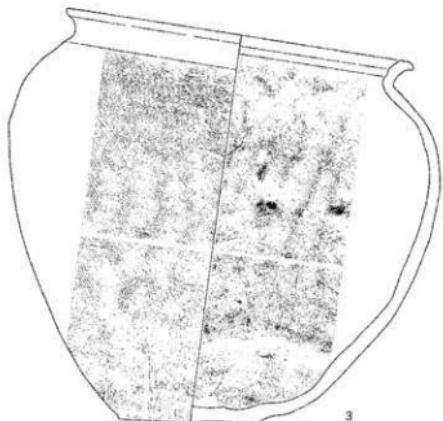


珠洲燒壺

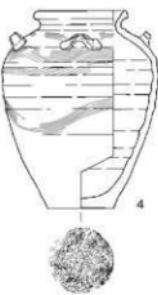
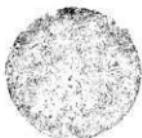


珠洲燒壺

0 1・2 30cm (1:6)



3

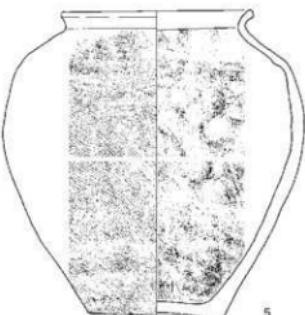


4

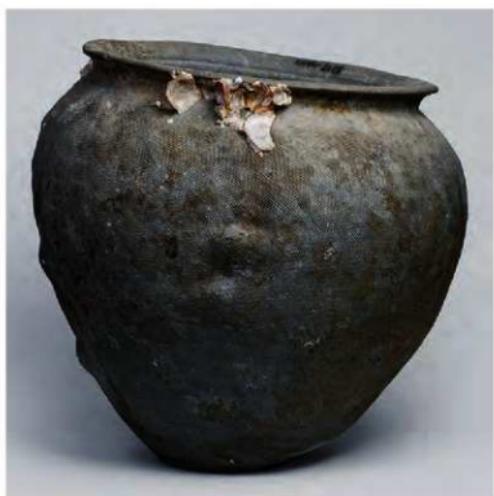


珠洲燒四耳壺

〔粟島～佐渡沖〕



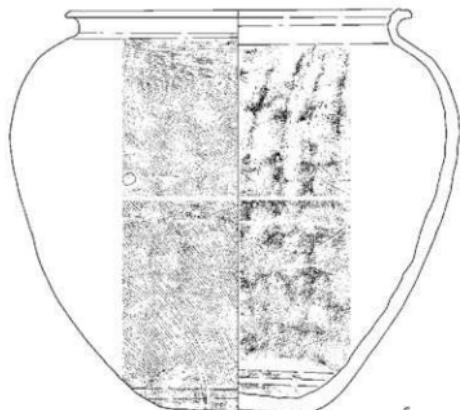
5



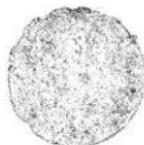
珠洲燒甕



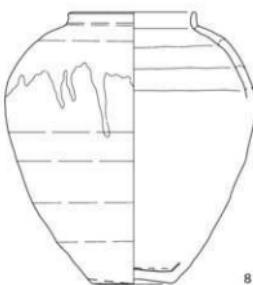
珠洲燒点



6



珠洲燒四耳壺



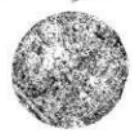
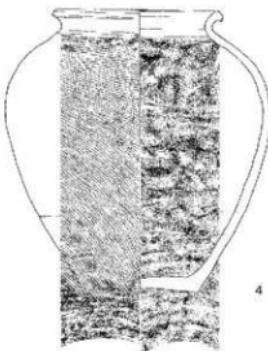
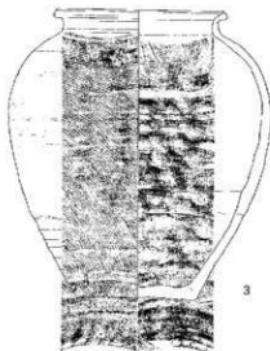
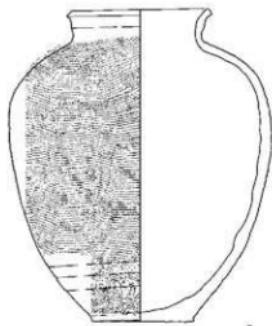
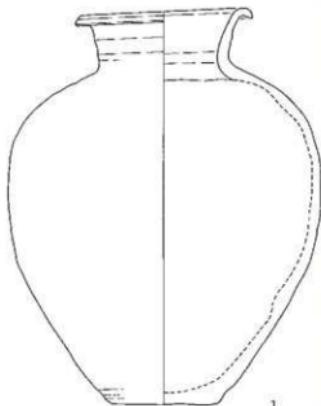
8



珠洲燒甕

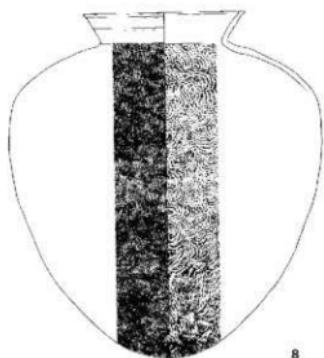
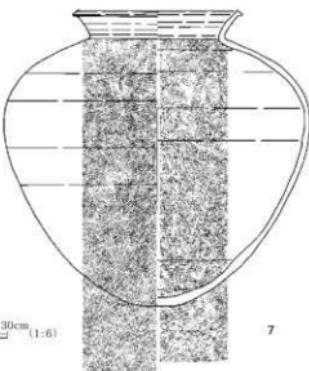
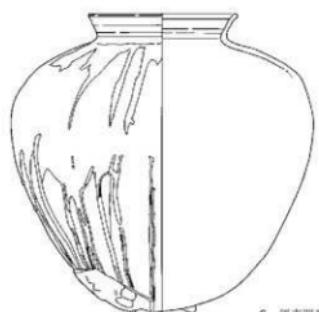
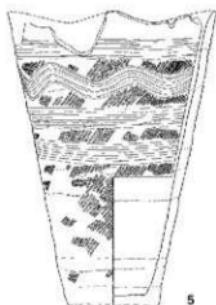


灰釉短頸壺

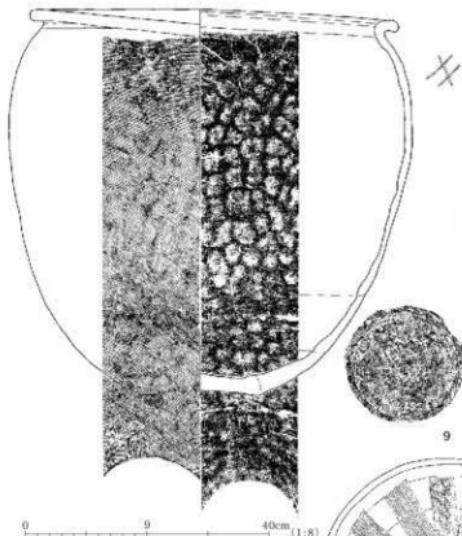


0 1 ~ 4 30cm (1:6)

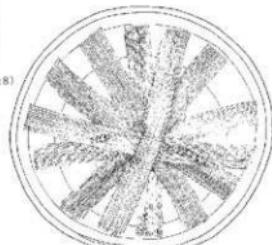
〔角田沖〕



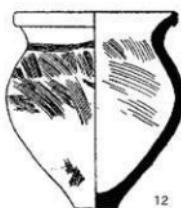
0 6 ~ 8 40cm (1:8)



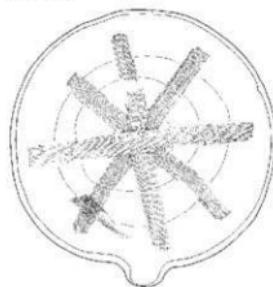
[間瀬沖]



珠洲焼片口鉢

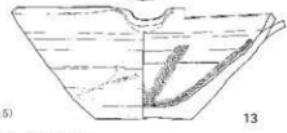


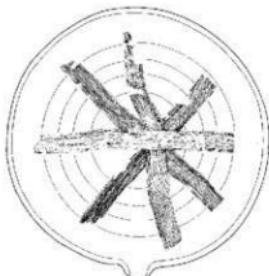
[弥彦沖]



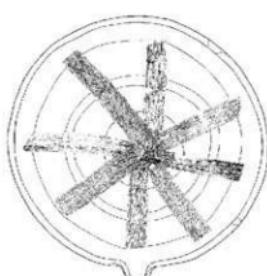
弥生土器甕

0 10 25cm (1:5)
10-13 30cm (1:6)

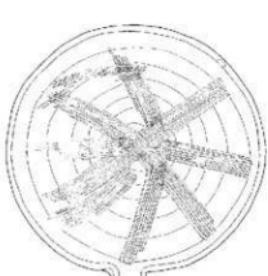




14



15



16



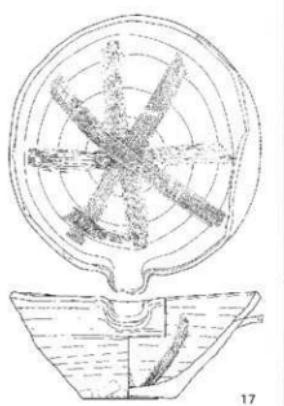
珠洲焼片口跡



珠洲焼片口跡



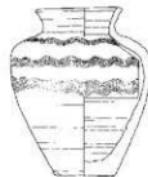
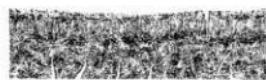
珠洲焼片口跡



17



珠洲焼片口跡



18



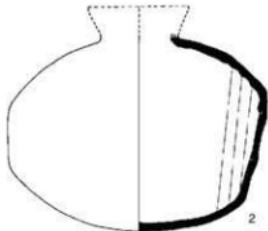
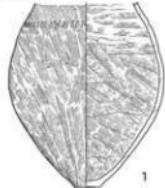
珠洲焼壺



0 14 ~ 18 30cm (1:6)

図版 8

〔寺泊沖カラバ〕



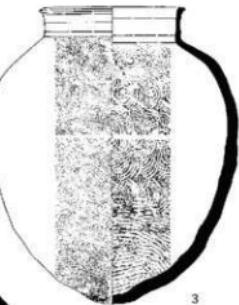
長岡・出雲崎地域 1 (寺泊沖カラバ)



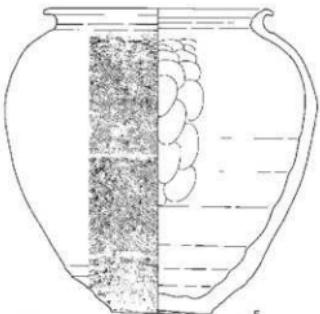
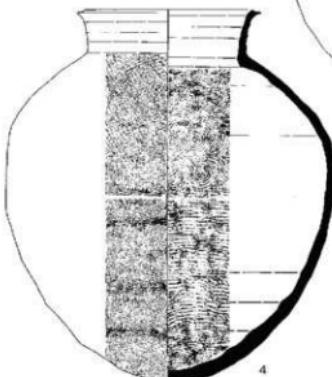
須志器模版



弥生土器裏
0 1~2 30cm (1:6)
0 3~5 40cm (1:8)



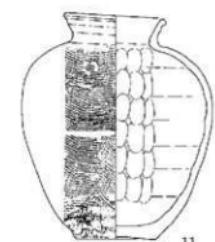
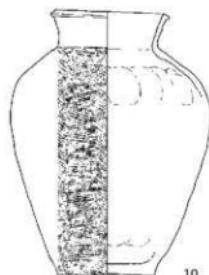
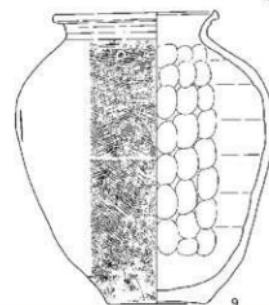
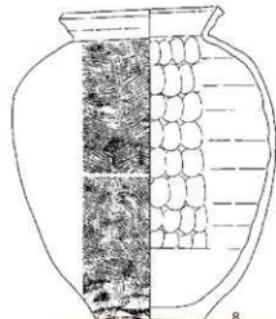
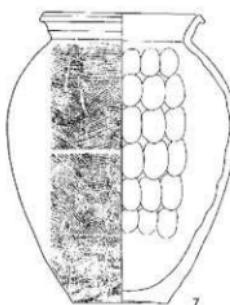
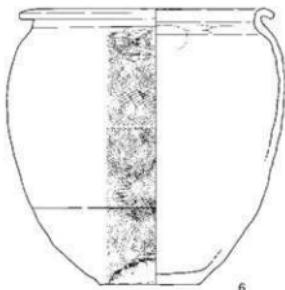
須志器模



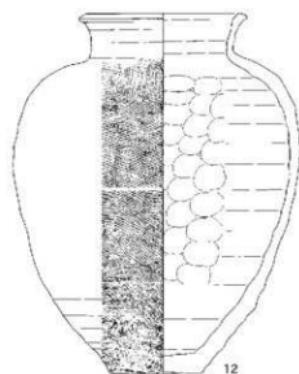
須志器裏



珠洲焼裏



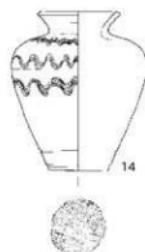
0 7~11 30cm (1:6)
0 6 40cm (1:8)



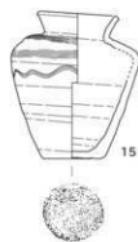
珠洲焼四耳壺



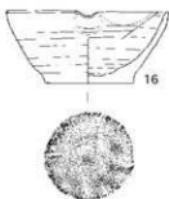
珠洲焼壺



珠洲焼壺



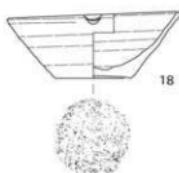
珠洲焼壺



珠洲焼片口跡

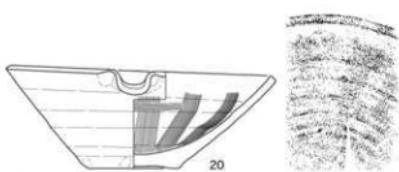
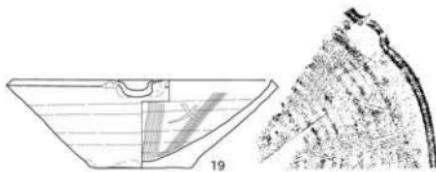


珠洲焼片口跡



珠洲焼片口跡

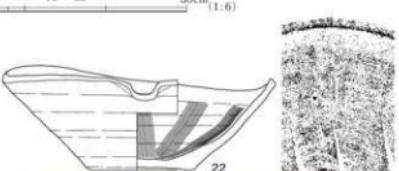
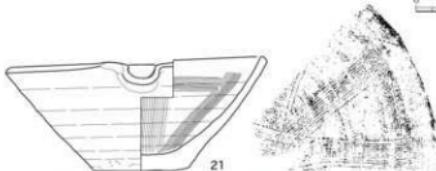
0 12 ~ 18 30cm (1:6)



珠洲焼片口跡

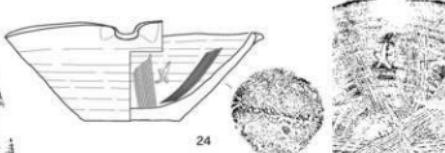
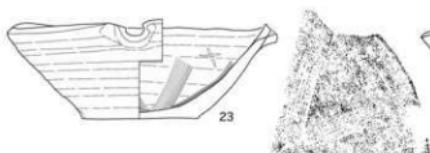
珠洲焼片口跡

0 19 ~ 22 30cm (1:6)



珠洲焼片口跡

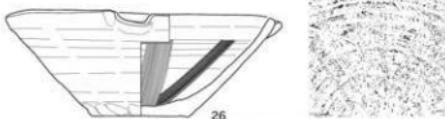
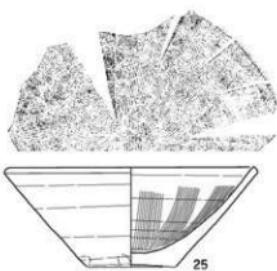
珠洲焼片口跡



珠洲焼片口跡

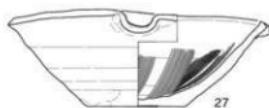
珠洲焼片口跡

0 23 ~ 26 30cm (1:6)

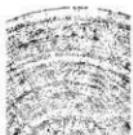


珠洲焼片口跡

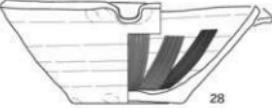
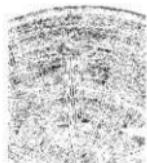
珠洲焼片口跡



27



28

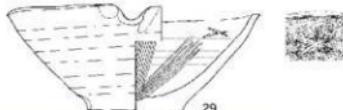


珠洲焼片口跡

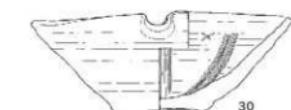


珠洲焼片口跡

0 27 ~ 30 30cm (1:6)



29



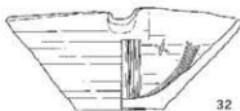
30



珠洲焼片口跡



珠洲焼片口跡

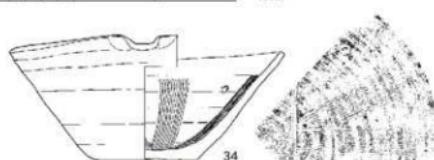
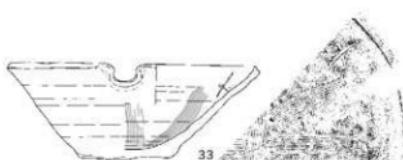


珠洲焼片口跡



珠洲焼片口跡

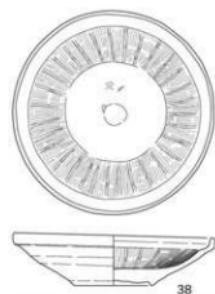
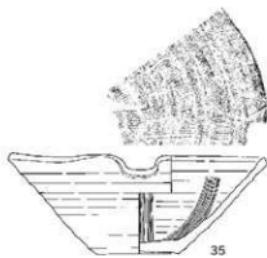
0 31 ~ 34 30cm (1:6)



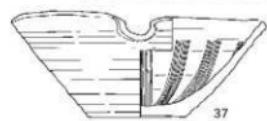
珠洲焼片口跡



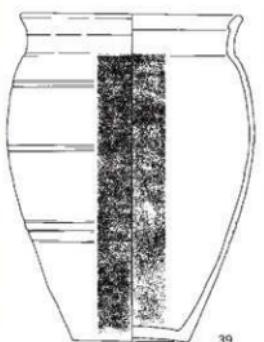
珠洲焼片口跡



珠洲燒片口跡



珠洲燒片口跡

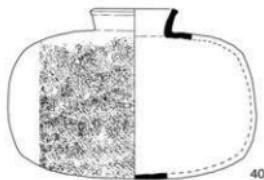


珠洲燒片口跡

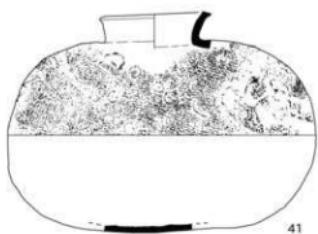
0 35 ~ 38 30cm (1:6)

0 39 60cm (1:12)

唐津燒壺



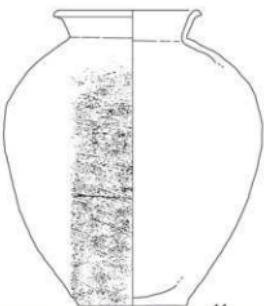
須恵器模版



須恵器模版



0 40 ~ 44 30cm (1:6)



珠洲焼片口跡



珠洲焼片口跡



珠洲焼壺



45



越前焼鉢



46

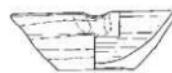


伊万里燒鉢

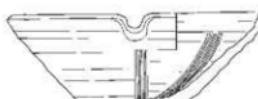
0 46 20cm (1:4)
0 45・47～58 30cm (1:6)



50 珠洲焼片口鉢



51 珠洲焼片口鉢



52 珠洲焼片口鉢

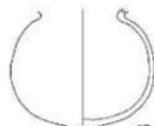


53 唐津焼瓶



54 備前焼徳利

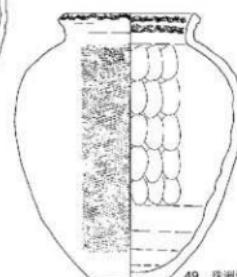
〔寺泊冲タラバ〕



47 古式土師器鉢

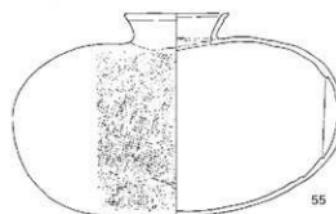


48 珠洲焼四耳壺

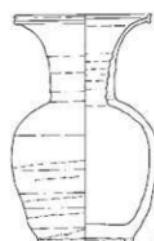


49 珠洲焼壺

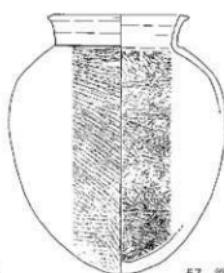
〔出雲崎沖〕



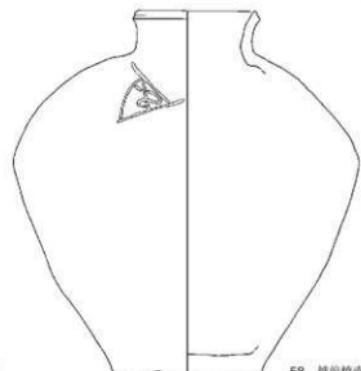
55 須恵器模版



56 須恵器長颈壺



57 須恵器壺

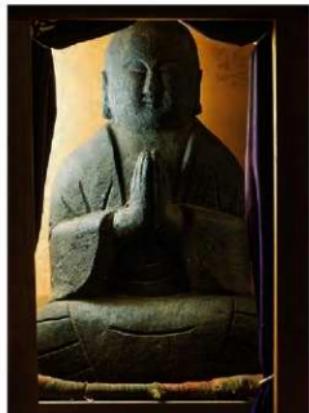


58 越前焼壺



60

二面神社御神体



62 地藏尊像



61 阿彌陀如来像



61 阿彌陀如来像 光背



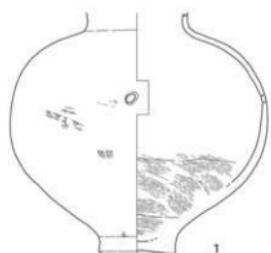
63 北前船錨



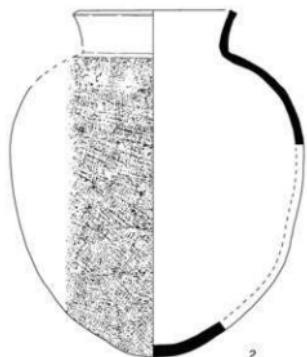
64 順助丸 シャフト

柏崎地域 1 (石地沖・椎谷沖・荒浜沖)

〔石地沖〕

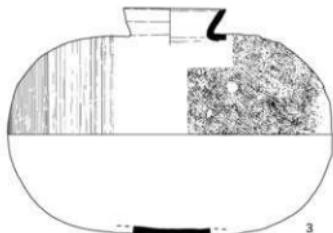


古式土師器裏



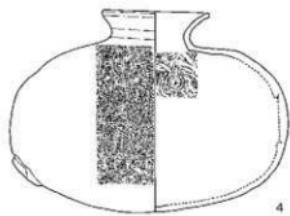
須恵器裏

〔椎谷沖〕



須恵器横板

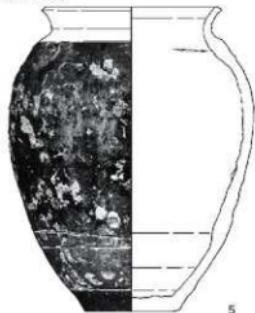
〔荒浜沖〕



須恵器横板



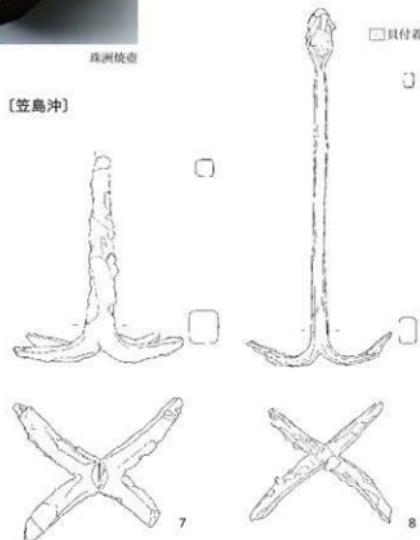
〔地点不明〕



〔番神沖〕



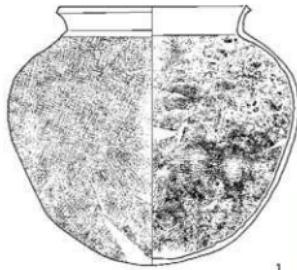
〔笠島沖〕



0 5・6 30cm (1:6)
0 7・8 1m (1:30)

上越・糸魚川地域 1(名立沖)

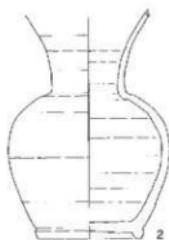
〔名立沖〕



1



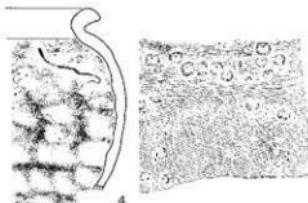
須恵器壺



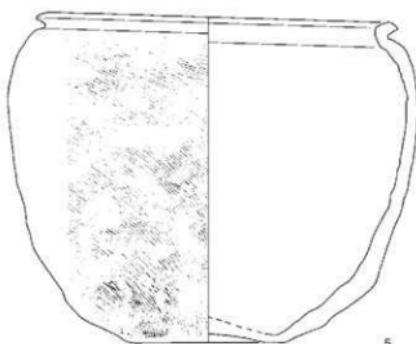
須恵器長頸瓶



須恵器水瓶



須恵器壺



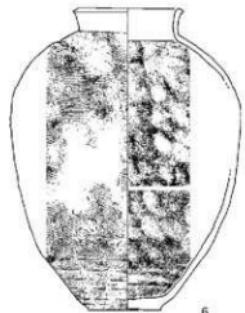
5

0 2~5 30cm (1:6)

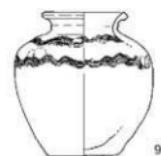


0 1 40cm (1:8)

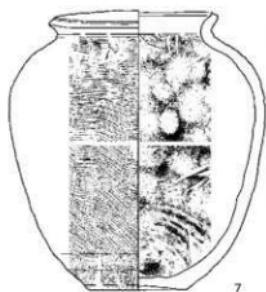
須恵器壺



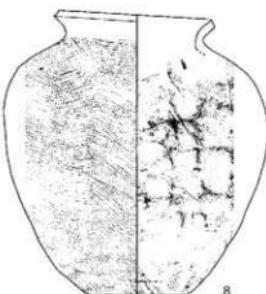
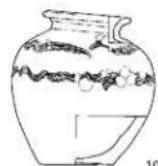
珠洲焼壺



珠洲焼壺



珠洲焼壺



珠洲焼壺





(部分拡大：縮尺任意)



12



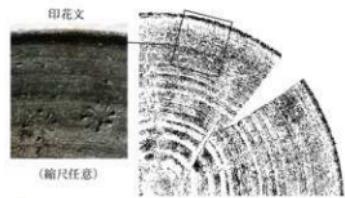
13



珠洲焼片口跡



(縮尺任意)



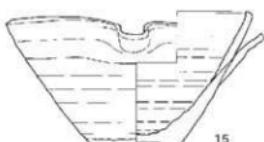
印文



14 珠洲焼片口跡

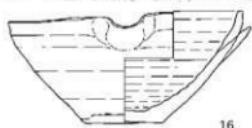


珠洲焼片口跡



15

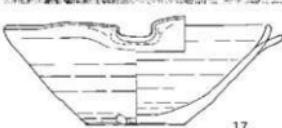




16



(縮尺任意)



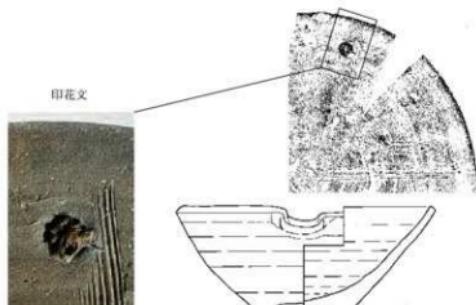
17



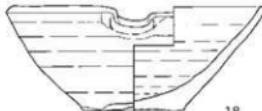
珠洲焼片口鉢



珠洲焼片口鉢



(縮尺任意)

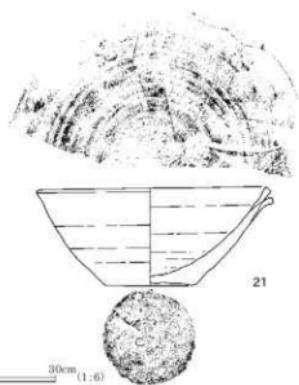
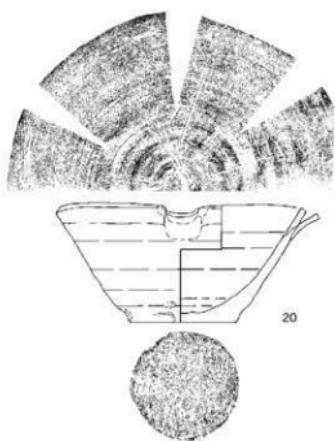
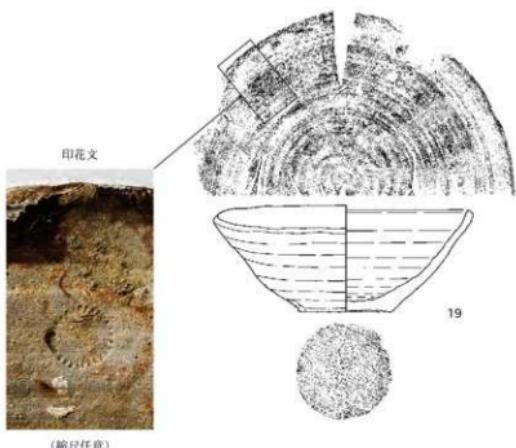


18

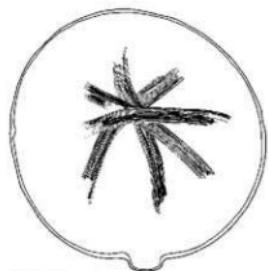
0 16 ~ 18 30cm (1:6)



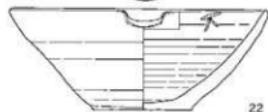
珠洲焼片口鉢



0 19~21 30cm (1:6)



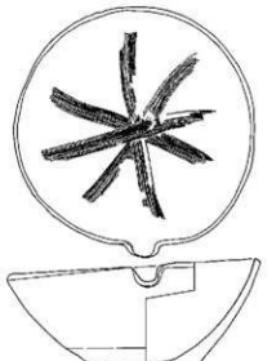
22



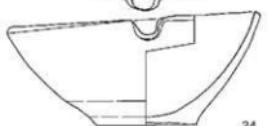
23



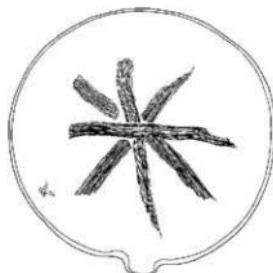
珠洲焼片口跡



24



珠洲焼片口跡



25



26



珠洲焼片口跡



27



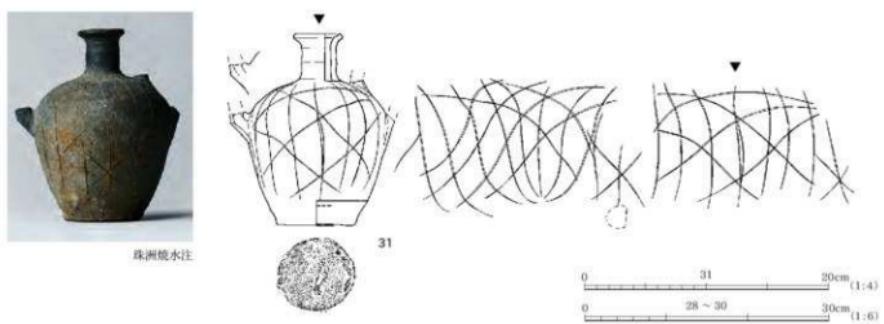
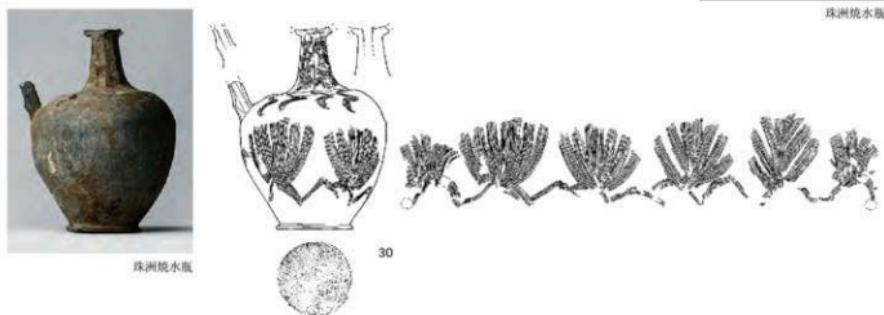
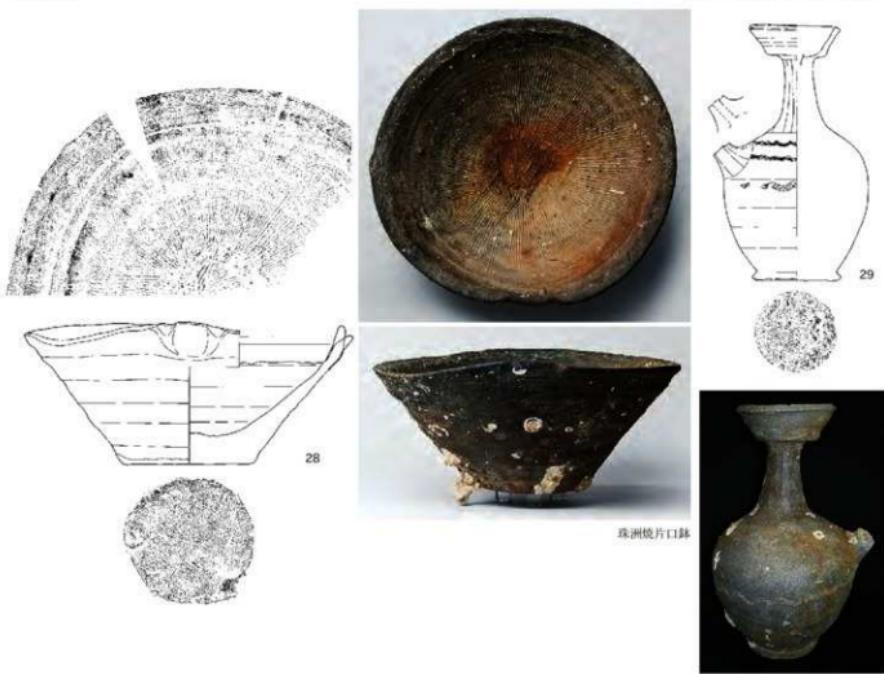
珠洲焼片口跡



珠洲焼片口跡



0 25 ~ 27 30cm (1:6)





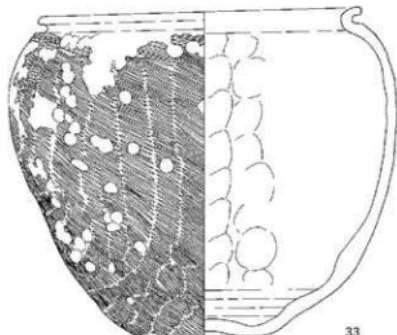
32



珠洲焼水注

〔名立沖揚陸陶質土器群〕

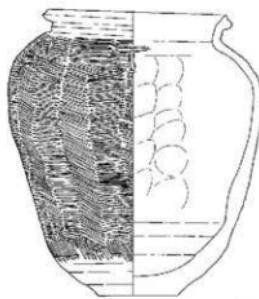
第一群



33



珠洲焼甕



34



珠洲焼甕

0 32 20cm (1:4) 0 33・34 30cm (1:6)



35



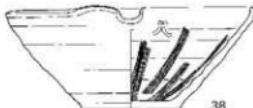
珠洲焼壺



36 珠洲焼壺



37



38

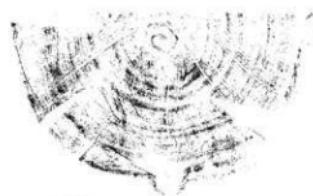


珠洲焼片口鉢



珠洲焼片口鉢

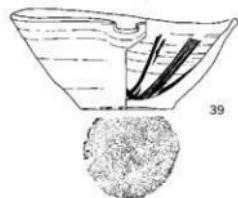
第二群



39



40

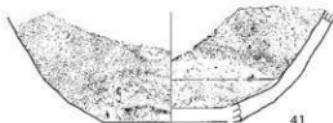


珠洲焼片口鉢



珠洲焼片口鉢

第三群

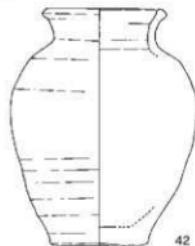


41



珠洲焼甕

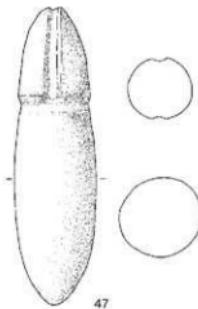
第四群



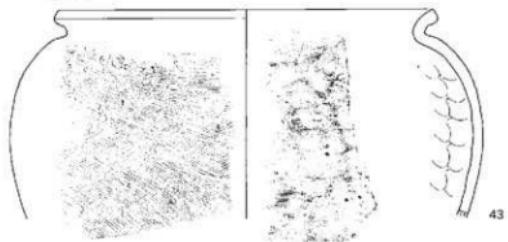
[直江津沖]



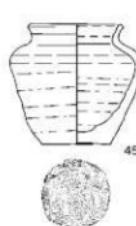
[浦本中浜沖]



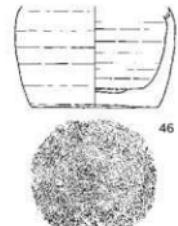
第五群



[能生弁天岩沖]



[鬼伏高見崎沖]

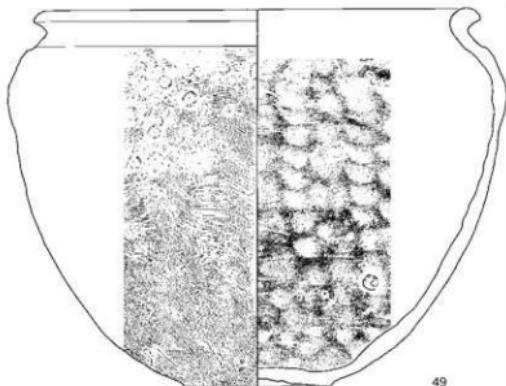


[上越自動車学校直江津教習所沖]

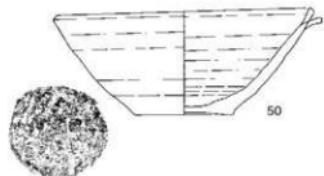


0 43 ~ 45 30cm (1:6)
0 42 · 46 · 47 20cm (1:4)

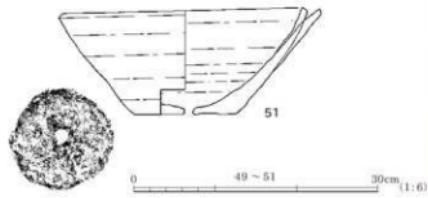
〔地点不明〕



珠洲焼片

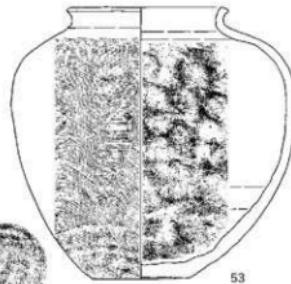
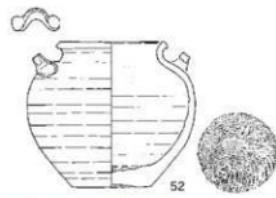


珠洲焼片口跡

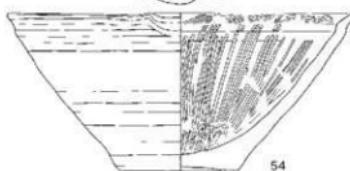
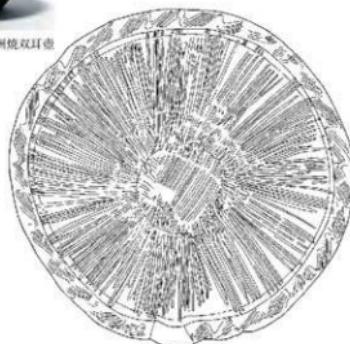


珠洲焼片口跡

0 49~51 30cm (1:6)



珠洲焼双耳壺



珠洲焼片口鉢



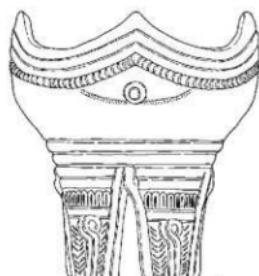
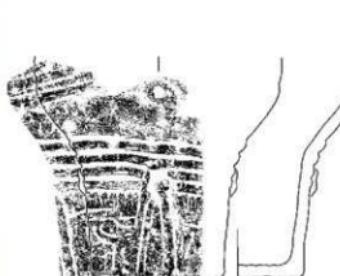
55 鉢(浦本沖)



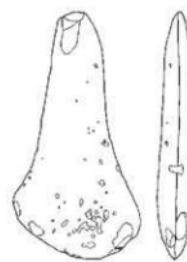
56 鉢



57 鉢



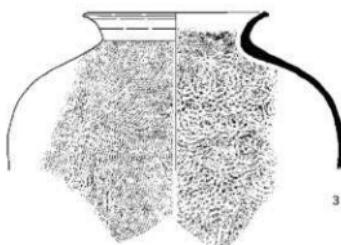
縄文土器深鉢



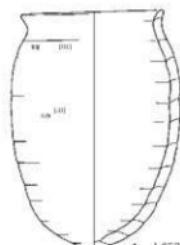
磨製石器



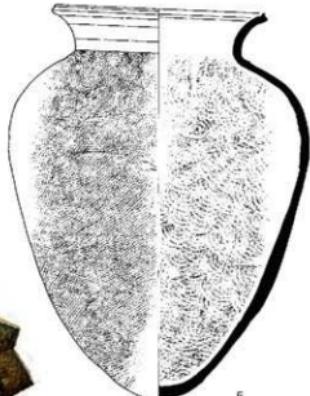
2



3



4 土師器甕



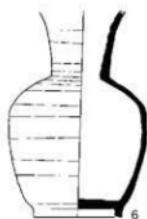
5



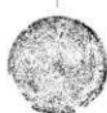
須恵器甕

0 1・4 20cm (1:4)

0 2・3・5 30cm (1:6)



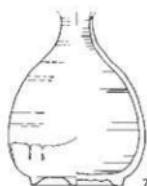
須恵器長颈瓶



田村



齋田



近世陶器胎塗利



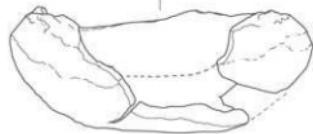
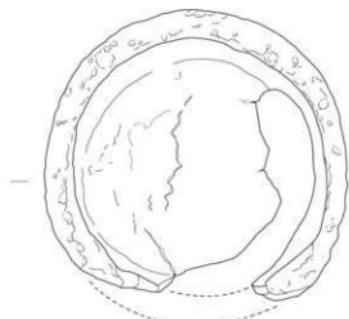
近世陶器黄釉鉢



田村



齋田



石跡



11 鉄製用途不明品

0 6 ~ 9 30cm (1:6)

0 10 ~ 11 40cm (1:8)

報告書抄録

ふりがな	ほんかいにしづんだとうじき
書名	日本海に沈んだ陶磁器
副書名	新潟県内海揚がり品の実態調査
編著者名	寺崎裕助、相羽重徳、安藤正美、田海義正、伊藤啓雄、加藤由美子、鹿取渉 木島勉、小林ひろ子、塩原知人、竹部佑介、湯尾和広、渡邊ますみ／佐々木達夫
調査団体	新潟県海揚がり陶磁器研究会（会長：寺崎裕助）
所在地	〒950-0852 新潟県新潟市東区石山3丁目4-47 寺崎裕助方
発行団体	新潟県海揚がり陶磁器研究会（会長：寺崎裕助）
発行年月日	2014（平成26）年9月24日

ふりがな 所取地域	ふりがな 地 点	遺 物 点 数	ふりがな 所取地域	ふりがな 地 点	遺 物 点 数
むらかみちいさ 村上地域	栗島沖	珠洲焼4点	じよさき　いそいわ 上越・糸魚川 地域	名立沖	須恵器3点、珠洲焼40点
	栗島～佐渡沖	古代灰釉陶器1点、珠洲焼3点		直江津沖	珠洲焼1点、仏像1点
	栗島～寝屋漁港 中間地点沖	近世陶器1点		能登弁天岩沖	珠洲焼1点
むらかみちいさ 新潟地域	佐渡周辺	珠洲焼4点		鬼伏高見崎沖	越中瀬戸焼1点
	角田沖	繩文土器1点、須恵器3点、 珠洲焼2点、仏像1点		水門中津沖	石錐1点
	問瀬沖	弥生土器1点		浦本沖	鏡1点
	弥彦沖	珠洲焼6点		越前動車学校 直江津教習所沖	土人形1点
ながおか 長岡・出雲崎 地域	寺泊沖タラバ	弥生土器1点、須恵器3点、 古式土師器1点、珠洲焼38点、 青磁1点、店津焼2点、 備前焼1点、石仏1点	じよさき 佐渡地域	鶴崎沖	鏡1点
	寺泊上片町沖	船シャフト1対		二ツ亀沖	須恵器1点
	出雲崎沖	須恵器6点、珠洲焼3点、 越前焼2点、伊万里焼1点、 鏡1点		大野亀沖	近世陶器2点
	不 明	セメント製鉢壺1点、西洋船 舶飾り1点、仏像1点		相川沖	鏡2点
	石地沖	古式土師器1点、須恵器1点		月布施沖	須恵器1点
むらかみちいさ 柏崎地域	椎谷沖	須恵器1点		野浦沖	須恵器1点
	荒浜沖	須恵器1点		江稚沖	土師器1点
	番沖	石仏1点		大字須沖	近世陶器1点
	豆島沖	鏡2点		内津大川港沖	鏡4点
	不 明	珠洲焼1点		松ヶ崎沖	繩文土器1点

日本海に沈んだ陶磁器

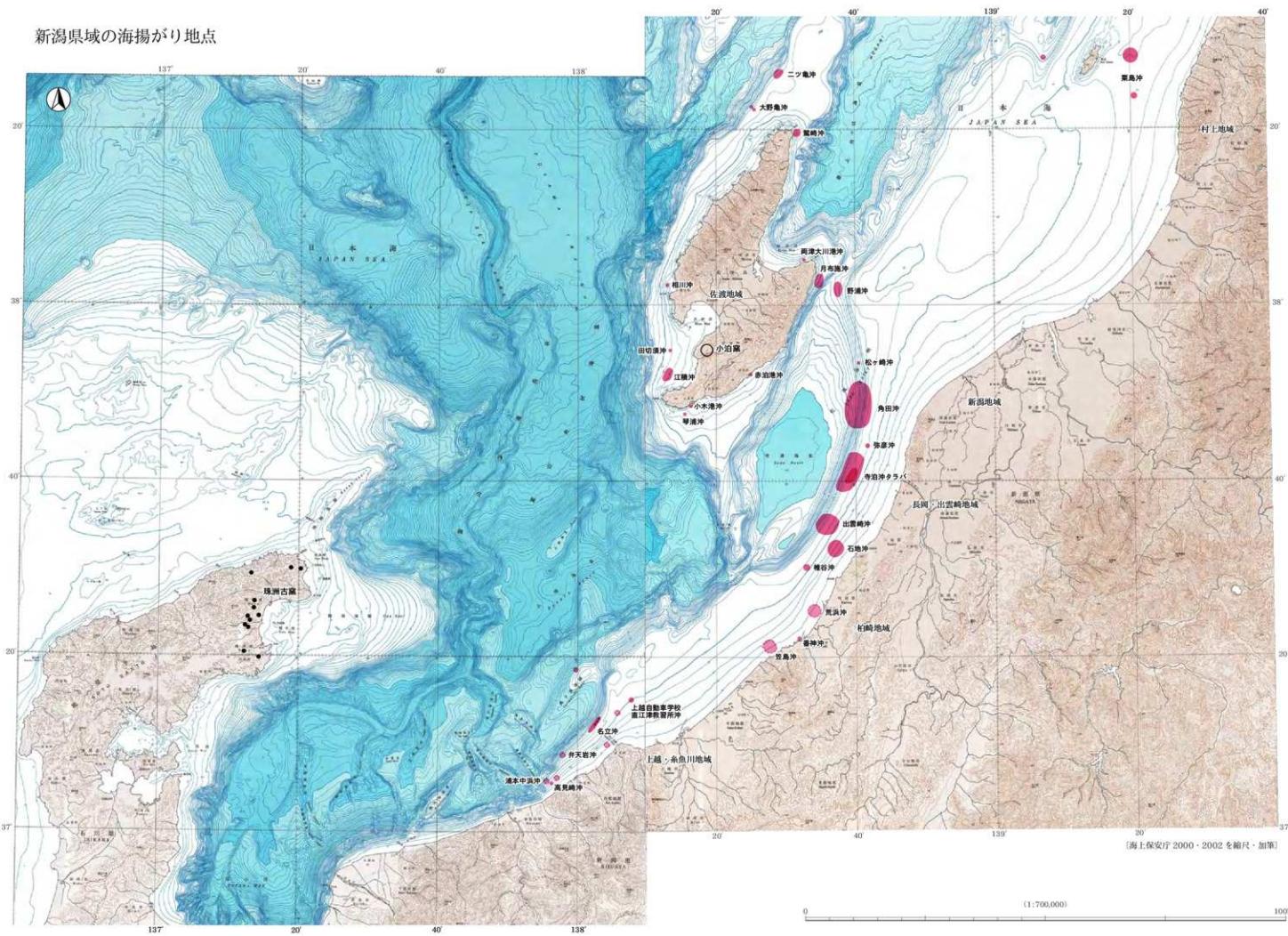
－新潟県内海揚がり品の実態調査－

2014(平成26)年9月19日印刷
2014(平成26)年9月24日発行

編集・発行 新潟県海揚がり陶磁器研究会
〒950-0852 新潟県新潟市東区石山3丁目4-47
寺崎裕助方

印刷・製本 有限会社不二出版
〒963-8024 福島県郡山市朝日2丁目1番5号

新潟県域の海揚がり地点



海上保安庁 2000・2002を縮尺・加算

(1:700,000)

100km

Underwater Ceramics in the Japan Sea

Report of the Drowned Ceramics
Survey in Niigata Prefecture

日本海に沈んだ陶磁器
新潟県内海揚かり品の実態調査
2014
新潟県海揚かり陶磁器研究会

